女子文壇

第壹巻 第六號

口繪
三宅克己 水彩画 月夜の海濱
山中古洞 彩色画 ころもがへ
都下 有名各女學校卒業生大判寫真八頁



中村不折画
吉田晩稼題字

明治三十八年六月一日發行（毎月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

東京 女子文壇社 發兌
（電話本局六〇七番）

注意――此目次を熟讀順次內容閱覽を乞ふ

第壹卷 女子文壇 第六號

目次

次頁には本誌の名譽贊成員大家芳名を增訂掲載す

▲本號は又々表紙改版、石版彩色口畫增加、寫眞口繪亦倍數、內容體裁共に大刷新

名譽贊成員

（イロハ順次第不同）

文學博士 井上哲次郎君
哲學館大學長文學博士 井上圓了君
少年世界記者 巖谷小波君
文藝俱樂部記者 石橋思案君
石井研堂君
醫學士 石原喜久太郎君
二六新聞記者 江見水蔭君
理學士 飯塚啓君
東京府女子師範學校教諭 岩本ふく子君
甲府商業學校教授 池田朝長君
在廣島高等師範學校 今村武男君
帝國大學、高等師範、日本女子大學教授 文學博士 萩野由之君
慶應義塾教授 林毅陸君
太陽記者 長谷川天溪君
女子教育獎勵會東京女學館幹事 西田敬止君
島根縣女子師範學校教諭 錦織竹香君
衆議院速記者 新井田次郎君
太陽記者 鳥谷部春汀君
東儀鐵笛君
獨逸學協會早稻田大學講師 文學士 長連恒君
東京女子高等師範學校教授 文學士 尾上柴舟君
文學士 大町桂月君
獨逸學協會學校長 大村仁太郎君
大和田建樹君
大塚楠緒子君
仙臺第一中學校教諭 大宮宗司君
東京府女子師範學校教諭 大塚治六君
外國語學校教授帝國大學講師 文學士 岡田正美君
東京府女子師範學校教諭 岡田ふみ子君
女子圖案會理事 岡不崩君
東洋女藝學校講師 岡みち子君
醫學士 岡本武次君

博文館發行戰爭實記記者 押川春浪君
新潟縣女子師範學校長 川面松衛君
市立下關商業學校教諭 川崎又次郎君
萬朝報記者 茅原華山君
信濃每日新聞記者 川崎默堂君
女子英學塾教師 河井道子君
河井醉茗君
河合英忠君
醫學士 樫田龜一郎君
福岡縣東筑中學校長 金澤來藏君
鏑木清方君
女學世界記者 勝間恒彥君
春日郞悟君
吉田晚稼君
武內桂舟君
文學士 武島羽衣君
法學士 武田千代三郎君
文藝俱樂部記者 武田櫻桃君
攻玉社教師 竹貫登代多君
少年世界記者 竹貫直人君
日本女學校教授 高平德文君
東京心性學館主 高橋邦三君
大阪新報社總務部長 高橋雄豺君
萬朝報記者 高橋鬼川君
田邊太一君
醫學士 田村光顯君
太陽記者 田山花袋君
市立甲府商業學校長 田崎要君
中學世界記者 鷹野止水君
博文館編輯局主幹 坪谷善四郎君
女子英學塾主 津田梅子君
早稻田大學講師東京中學校教師 上谷[illegible]數君
文學士 中內蝶二君

名譽賛成員

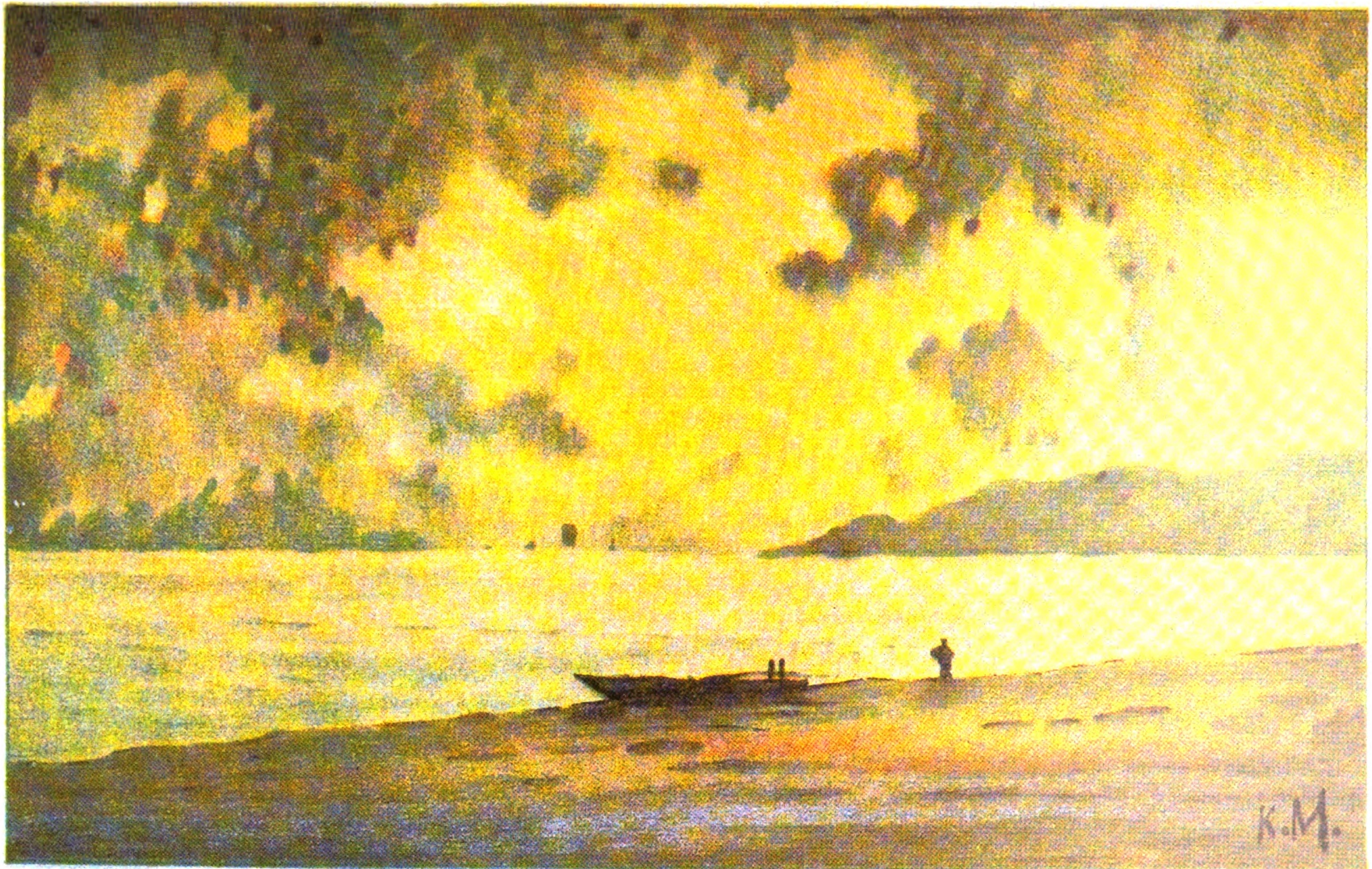
（イロハ順次第不同）

醫學博士 中濱東一郎君
中村不折君
報知新聞記者 中村千代松君
中里蛟峰君
三井同族會書記長 成瀬隆蔵君
日本女子大學校長 成瀬仁蔵君
東京府女子師範學校教諭 永田とめ子君
學習院教授 南日恒太郎君
農科大學講師 文學士 村上辰午郎君
村岡良弼君
中學世界記者 上村左川君
博文館出版部長 内山正如君
淑徳女學校長 黒田眞洞君
文學士 久保天隨君
熊本私立尚絅高等女學校教諭 栗田正治君
文學士 栗林己巳蔵君
法學士 熊倉操君
學習院教授 山口弘一君
日本女學校教授 山根勇蔵君
博文館副支配人 山田靜三君
高等師範學校教授 山田萬太郎君
山中古洞君
在農科大學 矢田鶴之助君
東京府共立女學校監督 子爵 松井康義君
萬朝報記者 松井柏軒君
女學世界記者 松原廿三階堂君
前田曙山君
福井學圃君
東京女學館教授 國分操子君
太陽記者 國府犀東君
東京府女子師範學校教諭 小寺あや子君
加持世界記者 小林雨峰君
文學士 幸田成友君

近藤仙吉郎君 農學士
文學博士 姉崎正治君
東京女子高等師範學校教授 東基吉君
竹柏園主幹 佐々木信綱君
東京女子高等師範學校教授 佐藤球君
醫學士 佐々倉永三郎君
獨逸學協會學校講師 佐藤吉次君
横濱商業學校教諭 坂本盛一君
市立下關商業學校長 齋藤軍八郎君
學習院教授 北里闌君
太陽記者 岸上質軒君
少年世界記者 木村小舟君
三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子君
同校教諭 文學士 三輪田元道君
文學博士 三宅雪嶺君
日本女子大學校教授 三宅花圃君
三宅克己君
都新聞記者 宮川鐵次郎君
博文館出版部 宮川大壽君
日本女子大學校教授 文學士 鹽井雨江君
獨逸學協會學校講師 文學士 芝葛盛君
獨逸學協會學校講師 文學士 志田義秀君
愛國女學校講師京華中學校教諭 鹿田熊八君
東京府女子師範學校教授 神通せき子君
從二位伯爵 東久世通禧君
廣津柳浪君
獨逸學協會學校講師 守屋荒美雄君
本居直臣君
籾山衣洲君
霽中庵雀志君
學習院教授 杉田義雄君
慶應義塾教授 菅緑陰君

（以上六號〆切迄に賛成並寄稿の快諾を得たる芳名増訂）

月夜の海岸



三宅克己先生筆

東京三間石印

ころもがへ



山中古洞先生画

東京大江石印



（所在　淺草區七軒町）

東京府立第一高等女學校卒業生並職員　（明治三十八年）



（所在　麹町區四番町）

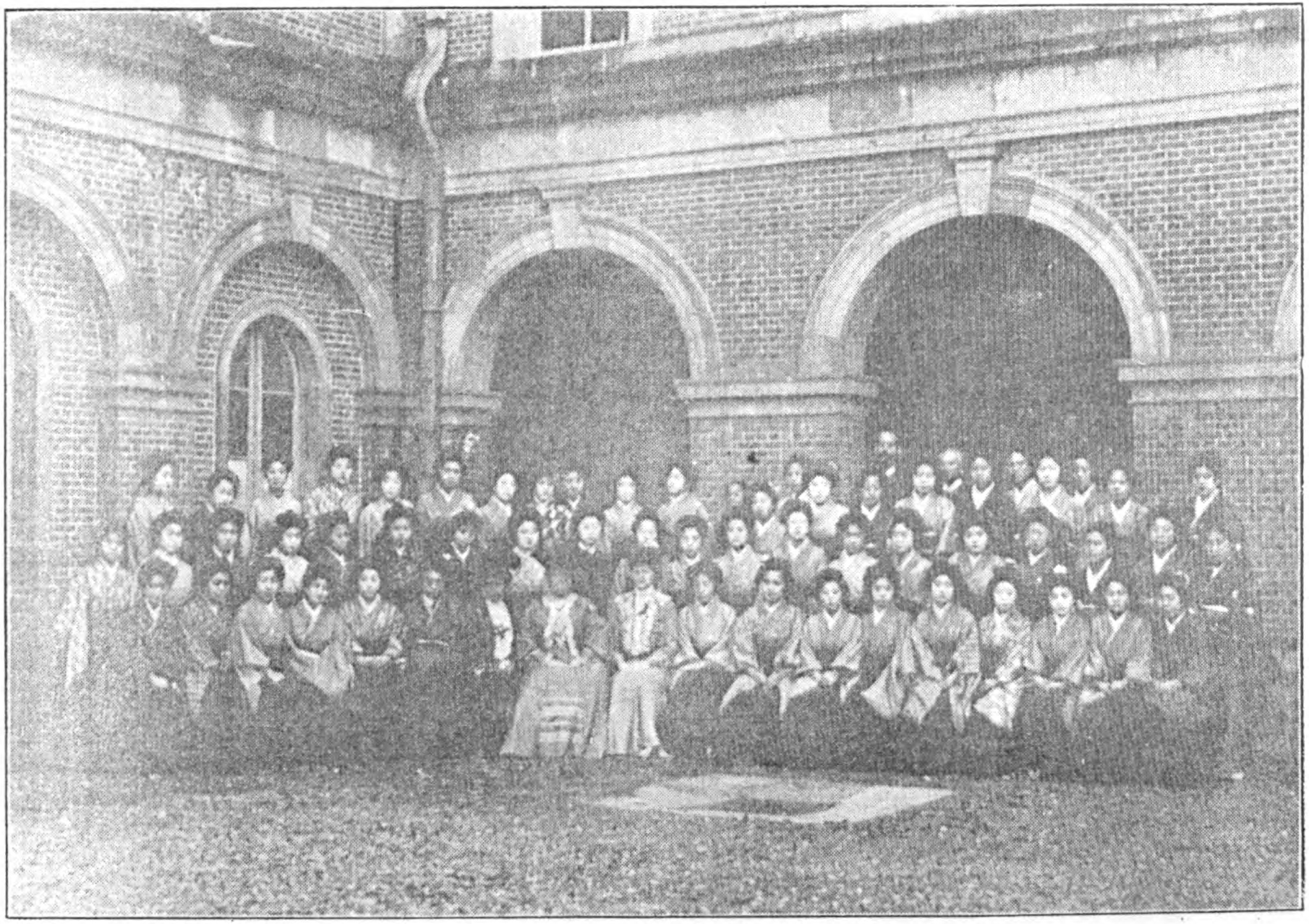
三輪田高等女學校第二回卒業生並職員　（明治二十八年）



（所在　小石川區柳町）

跡見女學校卒業生並職員

（明治三十八年）



（所在　麴町區虎の門內）

東京女學館普通科卒業生並職員　（明治三十八年）



（所在　小石川區表町）

淑徳女學校卒業生並職員

（明治三十八年）



（所在　本郷區弓町二丁目）

女子美術學校卒業生並職員

（明治三十八年）



（所在　本郷區龍岡町）

日本女學校卒業生並職員

（明治三十八年）



（所在　赤阪區青山南町七丁目）

青山女學院普通科卒業生　（明治三十八年）

每號 獎學賞與金を呈す

低廉無比 青年筆戰雜誌の大王

秀才文壇

十二號一日 十三號十五日 發行

不折先生 水彩畫及寫眞版入

●百二●十頁●頗美本●

大判

價郵 一冊金十一錢
税共 六冊六十三錢

東京小石川區指ヶ谷町

▲文光堂發行▼

學生必讀 大評判の本誌を讀めば文章の上達疑ひなし

!! 女子文壇誌友投書家諸子の寄稿を特に望む !!

◎◎懸賞文詩歌募集◎◎投書〆切六月卅日 册子發表七月廿日

投書種類 論文、美文、小説、紀行文、小品文、書簡文、新躰詩、和歌俳句狂歌川柳等題及文躰隨意

賞品 特賞廿圓 各壹名 天賞拾五圓 各壹名

地賞拾圓各貳名 人賞五圓各參名 秀逸參圓各五名

佳作壹圓各拾名 但和歌以下の賞は五圓以下五拾錢以上

◎選者＝文學士日東生＝文學士天花生

◎投書は一人にて各種何篇投ずるも隨意とす

◎原稿の行數は一行廿四字詰て一篇凡そ百五十行內外

◎寄稿者は披露册子印刷實費として五拾錢送金のこと

◎披露册子の體裁は總クロース製本頁數四百五十頁紙質舶來上等光澤紙

▲寄稿及印刷費等は〆切期日迄に送付のこと

寄稿所 兵庫縣城崎郡西氣 日本文壇會

文藝美術 第壹卷第五號

にひしほ

創作評論

六月十五日發行 （定價二十錢 郵税）

第壹卷第五號要目

●第一回創作研究結果發表

●創作談（其二） 廣津柳浪

●やたら縞（長編小説） 社中合作

●短篇小說 綠哲

●美文 ゆづる

●譯文 紫影

●韻文 菫月一露

●第二回創作研究懸賞募集

●新作合評 同人

●文士月旦 至文

▲文學界諸士の今昔▲新進十詩人

●文藝時評 記者

●美文 狂醉

●短篇小說 廣津柳浪

●諸大家愛讀小說（題目數百篇）

東京市麻布區霞町二十二 にひしほ社

文章 歌俳 小說 添削 女子文壇講讀者に限り謝儀隨意

常陸筑波郡大穗村 大塚琴江

新奇發明 増酒資料

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法なり

（附錄）腐敗酒直し法、醤油參倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の醸造家及び請賣營業者の大有益家内：：右今回披露の爲拾萬部限り：：**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺く〻べからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に擬せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ：（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授產館**

肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製式劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製金壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

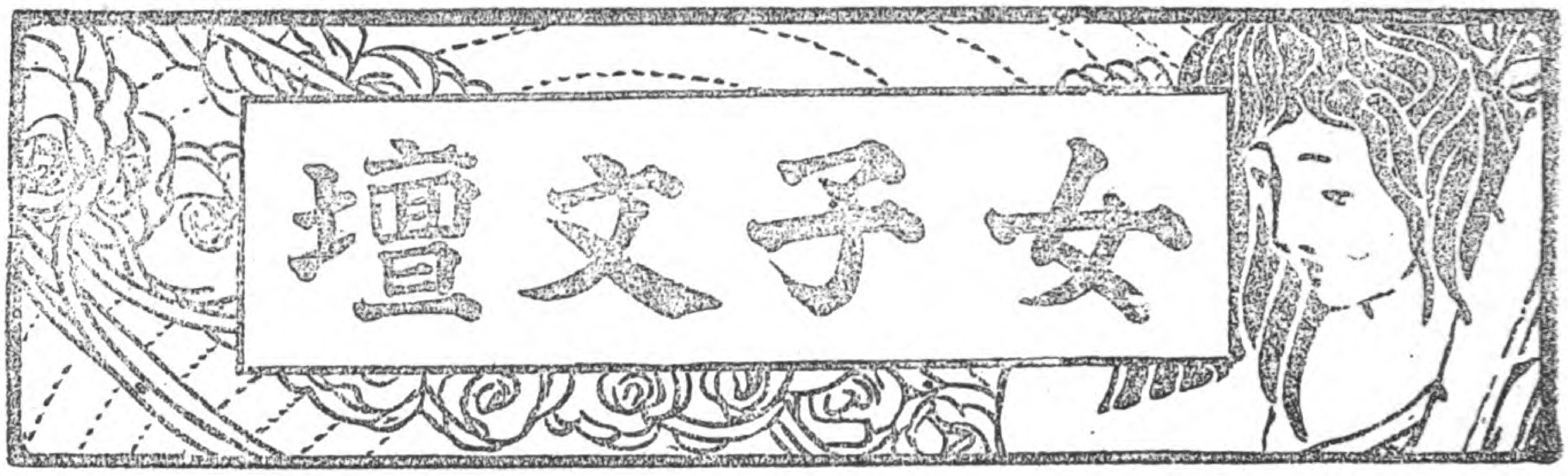
本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も本劑參劑分を用れば二三ケ月間滯りたる月經にて必ず忽ち**快通流下**する特効あり又もキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**悪血毒血**一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯る深く注意ありて一專賣元日新館藥房一の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが（腋臭症）根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の腋臭わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢若金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事（振替下谷五四六番）

以上 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**





試に投稿せよ

自分の投書した原稿が紙上へ出た時の嬉しさは天にも地にも代へ難い程で、況して生れて初めて作つた歌なり文なりが、紙上へ載つた時には嬉しさの餘り。其雜誌を抱いて寢たと云ふ人は數多も聞きました。處が此初めて投稿すると云ふ事は、多少の勇氣を要するので、既に雜誌へ出て居る人の作を讀むと、如何にも上手で、豪さうで、迚も自分のやうな者は投書しても載りはすまいと、引退思案に傾く人も往々見受けます。けれども昨今は以前のやうに、難かしい熟字や、大人びた題を捉えて、歌や文を作る時代は過ぎました。字の使ひざまを上手にならうとか、文の姿を整へやうとか云ふには、修養さへ積んで行けば出來る事で、畢竟、詩にせよ、文にせよ、眼の着けどころ、情の寄せどころさへ、美しく優しくあつたならば、諸嬢が平素に使つて居られる文字だけでゝも、立派な文章が出來上る譯です。又我「女子文壇」は雜誌の性質として、左樣な投稿を好んで採用します。諸孃のお蔭で「女子文壇」は毎號數千部增刷すると云ふ大した勢ひですから、必ず新しい讀者、新しい誌友が、月々幾千人宛か增して行くに相違ないので、其等の人々に試みに勇氣を振つて投稿せられんことをお勸めするのです。

名家文壇

所謂女學生

（現今の女子教育に對する非難の當否）

文學士　和田鼎

一　女子の德育に對する非難

女學生といふ。詞は單に字が示す如く女の學生といふ丈の意味ではなく、今ではこの稱呼の中に澤山の意味を含んで居る樣である、其中に於て最も著しいのは不品行といふことである、女學生の墮落といふことは屢々吾人の耳を打つた忌むべき響である、是が爲めに眞面目なる父兄は一時大に女子を學校に送ることを躊躇した傾がある、併し其の流傳は餘程針小棒大になつて居る、よく新聞に汚名を流す女學生といふものを仔細に檢して見れば多くは其外形が女學生の風采を爲して居るのみで學校に籍を置き相當なる監督者の下にある所のものではない、よし、この例外は固よりあるとしても其多分は皆是である、畢竟其實よりも其聲の方が大であるが、抑も女子墮落の原因は地方に於ける女子普通教育の未だ普及せざるが爲めに、年少の女子が多く都下に集まり來る風があつて、多くは勿論適當なる親戚若くば朋友に託して其監督を依賴するけれども、中にはこの考なく單獨に出京して如何しき素人屋若くば下宿屋に宿するものがある、各種の誘惑は直にこの經驗なき年少者を捕へて日夜に墜落の渦中に投入するのである而して男學生の墮落は多く人の注意を引かぬけれども、女學生の墮落は大に人の視聽を驚かすからして、一人の墮落者があつても其評判は直ちに傳播するといふ風がある、畢竟女子が誘惑多き都に遊學するのが根底から間違てある、故に其墮落するものは多くは適當なる監督者なき女學生であつて、決して女學生一般が不品行であるのではない、と信ずる、また女學生の品行の不良につきて直ちに其責を學校に歸せんとし一女學校生に何等かの不品行の行爲があると直ぐに其學校の德育を疑ふ者が多い樣であるがこれは果して至當なる非難であらうか、元來世人は餘りに重きを學校に置き、吾學校にさへ入れて置けば、卒業後完全

なる人を作つてくれる樣に思ふて居るのが、根本的の謬誤である、學校は固より其の學生の不良なる行爲に對しての責任を有するは勿論であるけれども、學校は決して萬能なるものではない學校德育は畢竟學生に健全なる倫理の概念を與へ、人として如何に其身を處すべきかを知らしめ、以て其行爲を指導するに足るべき素養を形づくらしむるにある訓育としては學校の敎員は自ら學生の師表たるべきことを心掛け、學生の行爲につきて出來得る限り之を善導するに力め、寄宿舍に於ては特に德性の涵養に力を竭すは勿論であるけれども啻是丈に依賴して以て德性の涵養を完うすることを得べしとはいへぬのである、尚此外に學生の德性に影響を與ふる大なるものが二つある、一は即家庭で一は即外圍の境遇換言せば社會敎育である、品行が不良に陷る場合を檢して見れば十中の八九迄は其家庭の不良か若くば社會敎育の不良なるかに基くもので、一躰女子は其家庭の感化を受くることが多く、また新聞雜誌小說其他の讀み物若くば親しく見聞する社會の狀態等によりて多く動かされ易いものであるからして、女子の德性の圓滿なる發育を望むとすれば家庭と學校とまた外圍の社會敎育との三者がよく聯絡調和するに非ずんば不可能の事であるといふてよい、要するに女學生の品行につきての非難は學校も固より其一部を負はねばならぬけれども、是を以て直ちに其學校の德育を疑ふて罪を學校のみに歸するのは決して至當なる非難とはいへないのである。

吾人は切に世の子女を有せらるゝ人々に向つて希望に堪えぬことがある、夫れは外でもない封建時代からの遺風として、男子は其家を相續するものであるから、其成功と不成功とは其家に取つて最大切で、一家の幸福の凡てを犧牲に供しても、長男丈は立派にしたいが、女子は結局他人に嫁せしむるのであるから、啻一通り其結婚の資格さへ備へる樣にして置けば夫れで澤山である、といふ風で、極端のになると、弟の學資を出す爲めに、其姉を忌むべき醜業婦にして居るものさへあるやうなことを聞いてをる其心事や寧ろ憐むべきであるけれども、實に甚しき間違で、偏頗極つた處置といはねばならぬ是は固より極端の一例であるが、大躰に於て、一家内に男子と女子との上に大なる輕重を見るのは普通であるが、是は依然同等に取扱ふ樣にせねばならぬ、女子の因循とか卑屈とか嫉妬とかいふ性質は、生れ降るよりこのかた常に片手落の取扱を受くる

からヽ其天然の美點を失ふて自然に虚僞に陷る樣になるのである、これは數千年來歷史的に遺傳し來りた弊風であるが、どうしても是から改良せねばならぬことと思ふのである、世間一般に女子の出生の時は男子の出生程に喜ばぬ位で、女子は最初の光を見そむる時既に幾分の輕蔑を受けて居る、それから一にも二にも成る可く抑壓する方が多く、女子の美點を啓發する方が少いのは、女子をして養ひ難くならしめたる惡風であると思ふ。

二　體育に關する非難

一口に女學生風といへば、人は直ちに其姿勢動作の粗暴なることを聯想し其態度が突飛で生意氣であると非難する、この非難は全然不當であるとはいふことが出來ぬけれども、尚其間に多くの誤解がある樣に思はれる、それは一つは吾邦の從來よりの習慣上、女子はひたすら優美ならんことを力めて、子供の中から兎角「女の子はさういふことをしてはならぬ」「女の子は出しやばるものではない」、といふ風で、男の子の活潑に飛び廻るに反して、一にも二にも成るべく大人しく大人しくといふ風に壓し付けて、少しく活潑なことでもすれば、直ちにお轉婆の名の下に非難されるのであるから、遊びたいことも遊ばず、仕たいこともせず、言ひたいことも言はぬ樣にするのが、即ち女といふことに考られて居つたのが、近時女子自ら其謂れなき服從に甘んぜぬ樣になり、また教育の上より見るも、決して至當の仕方でないといふことから、急にその束縛の繩を解いた爲めに、一時の反動として今度は極端に活潑に奔らんとするの傾があつて、從來の習慣とは大に異り、其勢姿動作が著しく活潑になつて、中には自轉車を馳するもの、肥馬を驅るものさへ生じて來るといふ有樣を現じたからして、從來只大人しいといふことを標準として居ッた者の眼から見れば如何にも突飛粗暴の如く考へらるゝのも、決して無理ではないが、更に一方より觀察すれば、是が爲めに女子の躰格が著しく改善せられたといふ結果を生じて居るのである、從來の女子がよく里餘の道を歩するとも難んじ、多く室內に座するが爲めに血色惡く、凡て四肢の發達甚しく不良で、青白く瘦せた女子が女子の標準であつたのが、現時の女子はよく二里位の道を往復しても苦痛を覺える程でなく、野外の運動散步等を力むるところから、血色も大によく四肢の發育もやゝ整頓し來つた

のは著しき事實である、健全なる國民は健全なる母に待たざるべからずとしたならば、たとひ中には二三の粗暴突飛な女子が出來るとして見ても、全體の上より見れば大なる進歩というて差間へない、要するに此非難は主として從來の習慣上より來つたもので、漸次時勢の進歩と共に解かるゝものというてよい、然し勿論女子の粗暴といふが如きは最も愼むべきことで、活潑は充分活潑にありたいのであるが、其姿勢動作が粗野に流るゝの風は充分に矯めなくてはならぬ、運動はとかく粗暴に流れ易いものであるからして、これを柔らげる爲めには禮儀を以てしなくてはならぬ禮儀は男女共に其品位を保つ上に最も大切であるが、殊に女子に於て其切要を見るのである、運動はもとより運動の爲めの運動でなくして、體格の整正なる發達を謀り姿勢動作の規律にはまりたる品位を身に得るにあることゝ信ずるのである、若しこの點に於て今の體育に尙ほ欠くる所なりとの非難は正に當然のことゝ思はるゝけれども、習慣上より一概に現今の女子を非難するのは大に誤つて居ると信ずる。

元來體育の問題は近來は大分に人の注意を傾くる樣になつて來たが、未だ〳〵極めて不整頓で幼稚の域にあることは確かである、三育といふ中に於て、體育は他の二つ程に重んぜられて居らぬ樣である、たとひ重んぜらるゝ樣になつたとして見ても、未だ其方法はいはゞ試驗中に屬するものというてよい、或は米國式とか或は獨逸式とか或は佛國式とか或は瑞典式とか、現時歐米諸國に於て行はれて居る方法を輸入して良さうに思はるゝものを試驗して居る最中というてよい、日本人の現今の狀態に於て何れが最も適當であらうかも未定である、此頃は瑞典式が最も日本人に適する樣に思はるゝとの事であるが、是とても確定した體育とは未だいへぬ樣である、今は過渡の時代であるからして多少の損は免かれ難いが、何でも大に研究して男女共に體格を健全にせねばならぬ、殊に戰後の日本人は一層此點に留意して體力の優勢なる歐米人と實力競爭の舞臺に引けを取らぬ準備をせねばならぬ、而して其根本は女子の體育にあるのである、夫れで體育は飽く迄盛ならしめねばならぬけれども、體育は男女によりて性理上大に區別せねばならず、又年齡身體の强弱によりて其方法を異にせなければ、却て大害を生ずるものであるから、其點には充分の研究を要するに相違ないが、只一ツ現今の女子の體育法に於て殊に留意すべき

は、前に言うた通り容儀を整へ規律を正すの點である、世の非難の起るのも全く此點に於ける欠陷より起る事であるから、今後は只形に於て身體を運動さすといふに止めず夫によりて起居動作の上に儀容を整へ規律正しくするの精神を養はねばならぬ、體操の時間許りやつても他の時は紊れる樣では何の役にも立たぬというてよい、身を端しうすれば意もまた自然に正しくなるものである、形式よりは精神である、現今の女子の體育に就ては形の運動のみは段々盛んであるが、運動の精神が丸きり欠けて居る、この點に就て、世人は女學生風を嫌ふのであつて、體育そのものを嫌ふのではないと信ずる。

三　智育に對する非難

女子の智育に對してもまた非難の聲を聞くのである、其非難の點は種々ある樣である、極端なる論者は女子には學問は必要でない、只裁縫習字作法位の實地に必要なる力さへあれば澤山である、植物學だの動物學だの代數學だのといふ樣なものは、徒らに女子を理屈に奔らしめる計りで、何の役にも立たぬといふ樣な非難もあるが、斯の如きは洵に頑迷固陋の非難で、決して今後の女子が只日常のことのみの智識丈ですむものでないことを知らぬ論である、是等の智識は單に其れ丈が獨立して役に立たぬとして見ても、普通學一般の諸科の智識が纒りて、こゝに一の統一を見るのである、是れが即ちビルヅングで、健全なる常識は全く是によりて養成せらるゝのである、又是によりて高尙なる趣味をも養ふことが出來るのである、高尙なる趣味を解すれば自然其品位を高むる事が出來る、故に單に直接に實際に用がないからというて、直ちに女子の智育を非難するのは大なる誤である、次の非難は今の女子教育に於て女子に敎ゆる所の學問は實際に役に立たぬ、學問は固より必要ではあるが今少し役に立つ樣にありたいといふのであるこの非難は學校に重きを望みすぎるから來る非難で、學校を卒業さへすれば直ぐに實地に役に立つと思ふのは根本的の誤である、學校にあつては實務に當るべき素養を形づくるので是の素養さへあれば、實務の練習を爲すに指導となつて、容易に實務に當ることを得るのである、若しこの素養なきものと素養あるものとを比較したならば、暫くの間に於て其優劣は明瞭にあらはるゝに相違ない、只實務といふことにのみ重きを置きて其實務を行ふべき智能の素養

を輕んずるのは、其本を忘れて其末に泥むものといふてよいのである。

然し、今の女子敎育に於ては、其智育は徃々女子をして實務を卑しむの風あらしむるの弊はある樣である、これは必ずしも學校の方針が惡いのではないのであらうか、從來女子は勞働を卑しむの惡風があるからして、成るべく卑近な實務を練習することを嫌うて、只理論の方に力を入れる風があるからであらうと思はれる、元來女子の學問は決して物識りになる爲めではない健全なる常識を養ひ能く其品位を保ちて女子の天職を完うする爲めである、女子が學問を以て獨立せんとするが如きは斷じて一般の場合に望むべきではない、然るに女子が少し學校に學ぶ樣になると、兎角實際の用務を煩とし卑み勞働を嫌ふ樣になる、臺所で家事の手傳をするのは何だか下卑て、机の上で國文の本を讀むのが何んだか高尙の樣な氣がする、といふ風で、農家の女は、農事の手傳を嫌ひ、商家の女は、商業の手傳ひを嫌ふといふ樣な風がある、夫れならば、學問の方が立派に出來るかといふと、夫れも生半可である、要するに氣位ばかり高くして實際には用にたゝぬものになつて仕舞ふ、家事科といふ學科を修めたといふ者も、親類緣者との日常物品の贈答に對する、簡易な例も知らぬ、水引の結方も碌には出來ぬ、こんな敎育ならなくてもよいといふ風な非難は何れでもよく聞く事である、この非難はたしかに今日の女子敎育の弊の一つであつて、全然この非難が正當とはいはれぬけれども、確かに其弊はある、即ち一言にしていへば、智識をのみ與へて訓練を欠ぐの弊があるからである、訓練は初等敎育で大分に注意して居るけれども、小學以上の學校に於ては餘程ネグレクトされて居る事は確かである、學校を出たものが直ぐに實務に通ずる如く考ふるは固より誤りであるが、訓練の不足の爲めに勞働を卑しむの風は大に改良せねばならぬ、是の事たる只命令的に行はんとするも不可である、さうすれば却て反動を生ずるからしてやはり根本に就て勞働の眞聖なる事を自覺する樣に力めねばならぬ、又家事科の如きは力めて卑近なる實際的の事より敎へて行かねばならぬ事は勿論である、要するに女子の敎育が全然現今の生活狀態を風馬牛する樣な弊は避けねばならぬと共に、世の非難する人に向ても重きを學校にのみ責むるの不當なることを考へられたいことを希望するのである。

以上現今の女子敎育に對する非難の重なるものを擧げ

て其當否に關する愚見を述べたのである要は外ではない、折角今發展の氣に向ひつゝある女子教育に對する非難が、この好氣運に障害を與へはせぬかとの考から、世の同憂の士と共に眞面目に是等の問題を攻究したいとの考へに外ならぬ、實に海老茶式部の問題は決して川柳點の玩弄物にのみ委しておくべきものではなからう。

（完）

歌の糸口

（前號つゞき）

大和田建樹

四、その調べ

言葉は如何に精選に精選を加へて。優雅美妙の物を用ひたりとも。その續け方と並べ方とが宜しきを得ざる時は。よき歌となるべからず。たとへば庭木の如し。松あり櫻あり梅あり竹あり。木ぶり枝ぶり如何によくとも。松の木の間に櫻を。梅の傍には竹をなど。その植方の配置排列よろしからざる時は。折角の庭も殺風景もて抹殺せらるゝに至らん。歌の言葉これに外ならず。短言すれば言葉の調和なり。名づけて之を調べといふ。

烟草屋の廣告しつゝ賣り歩く聲を聞けば。「ピンヘット、ピンヘット、サンライス」といへり。

今これを逆さまにして。「サンライス、サンライス、ピンヘット」と言ひ換ふれば。歌ひにくゝして調べをなすべからず。此外「はさみ庖丁小刀とぎ」といひ。「瓢簞の苗へちまの苗」といひ。「烟草にマッチに新聞いかゞ」「ビールに正宗葡萄酒いかゞ」など呼びつゝ歩く滊車の窓の賣聲といひ。その續け方によりて調べをなしたるものなれば。言葉の上下を置き換へなどして言ひ換ふれば。稱へにくゝなりて口に乘りがたきは。誰も試みて知らるべし。賣聲の如き物すら猶調べを整ふる必要あり。況んや歌ひ吟じて面白く感ぜしめ得べき歌に於てをや。調べの整はざるは歌ならぬ事。今更いふまでも無かるべし。

さらば調べを整ふる方法如何。支那の詩には平仄押韻あり。西洋の詩には長短音押韻字ありて。まづ之を支

配する事なれども、わが和歌には其事なく。たゞ耳の熟練するに從ひて。おのづから調べのよしあしを判別する事の出來るやうになるを待つ外なければ。敎ふべく習ふべき方法には乏しけれども。その階梯ともなるべき二三の注意を促し置かん。

一つには同音もしくば類似の字の言葉を重ねて調べをなす事。

左の歌に就きて見るべし。

あはと見る淡路の島のあはれさへ
　のこる隈なくすめる夜の月（源氏）
いかにせんしのぶの山のした紅葉
　しぐるゝまゝに色のまさるを（千載）
よき人のよしとよく見てよしといひし
　吉野よく見よよき人よく見つ（萬葉）
つよく引くつなでとみせよ最上川
　そのいな舟のいかりおろさて（夫木）
さゞす鳴く狩場の雪に假寐せん
　宇陀のふし柴しばし宿かせ（夫木）
住吉の濱の村萩露もろじ
　しばしな吹きそ松の浦風（夫木）
我戀は庭の村萩うちかれて
　人をも身をも秋の夕ぐれ（拾玉）

俗謠にいへる「てんてれつく天狗の面」「しん州しなのゝしんそばよりも」又は「かんだかぢちよのかどのかんぶつや」なども此類ぞかし。

二つには口もつれのして言ひにくき音を一つ處に寄せ用ふべからず。

たとへば子供等のいふ「にかいのきやくはよくかきくふきやくだ」「ながもちのうへになまごめないつぶ」の如き。甲は加行の音多きによりて言ひにくゝ。乙は奈行の音多きによりて言ひにくし。歌にもかゝる言ひにくき音を用ふるは調べを破るの一つなればなり。「露をかたしくさまくら」は謠曲の文句なれども耳ざはりし。「瀧のおとは絶えて久しくなりぬれど」は。舌もつれして「なにぬねの」と言ひ違ふる子供あり。注意せざるべからず。

三つには結句の音數に注意すべし。

音數もとより七つに限られたるなれども。こゝには。更に之を三字四字に組立つるか。四字三字に組立つるか。又は他の二字五字。もしくば五字二字に組立つるかの問題を指す。三字四字とは。

風や(三字)　解くらん(四字)
雪は(三字)　降りつゝ(四字)
花ぞ(三字)　散りける(四字)

の類。

二字五字とは。

なく(二字)　時鳥(五字)
春(二字)　ふけにけり(五字)
あふ(二字)　よしもがな(五字)

の類。

五字二字とは。

うぐひすの(五字)　なく(二字)
をみなべし(五字)　かな(二字)
秋の夜の(五字)　月(二字)

の類。

これらは普通にて何れも調べよけれども。四字三字に至りては。萬葉集時代にこそ多く見えたれ。古今集より以後の歌集には極めて少なく。調べつまりて卑しげに聞ゆれば。好みて用ひざらんこそよからめ。二つ三ついはゞ。

月影(四字)　あはき(三字)
さきたる(四字)　椿(三字)
わが戀(四字)　まさる(三字)
ふるさと(四字)　おもふ(三字)

の類これなり。尤も二の句四の句に用ひんは普通。ただ結句すなはち五の句に用ふる場合をのみ言ふ事を誤解する勿れ。又稀には取除もありて。「うつろふ(四字)ものを(三字)」などよみたるもなきにはあらず。猶こゝに漏らしてはならぬ一事なり。字餘りを用ひて。七音の結句を八音となす場合には。五字三字といふ組立を用ふる事おほし。たとへば。

舟をしぞ(五字)　おもふ(三字)

わが袖の（五字）　うへに（三字）
　鐘のこゑ（五字）　あはれ（三字）

の類。ふと見れば四字三字とまぎらはしきやうなれば注意しおくなり。

四つには同音の文字を句の終に重ねおくに巧拙の別あり。

　巧なるは。

　秋は來ぬ。紅葉は宿に降りしきぬ。
　あすか井に宿りはすべし蔭もよし。
　　みもひも寒し御馬草もよし。
　見てのみや人に語らん櫻花。
　　手ごとに折りて家づとにせん。

　拙なきは。

　春風にちるや櫻の花の上に。
　野に出でゝにほふ菫の花つみて。
　玉章をおくりし友をおもふかな。

よく／＼思ひ味ひて辨ふべきなり。拙なきはせんかたなきに同音の重なりたるもの。巧なるは殊更に重ねて調べをなしたるもの。思ひ紛らすべからず。

おのれ四五年前の事なりき。故郷に遊びて友の家に招かれしに。

　又もこん鈴菜の花に舞ふ蝶の
　　別れて逢ひて逢ひて別れて

とよみたりしを。同席せし人。その後他人に語るとて、下の句を記憶しちがへ。「逢ひて別れて別れて逢ひて」といひたりしかば。おのれ聞きて。それでは都々一めきたりと笑ひし事ありき。たゞ二つの「別れて」と「逢ひて」との言葉すら。置きやうを上下に換ふると。雅となり俗となるの別かくの如し。これにても調べの歌に大切なる事をおのれ深く信じたると共に。人にも普く信ぜしめんとするなり。　（終）

○正誤　前號に「人音」とありたるは「ん音」の誤植。

月香（承前）

文學士　久保天随

折しも、鍾離義も床より起き出で、顔洗ひなどし、早く官衙に出でゝ、事を執らむとて、中堂の方に歩み出でしに、昨日來りし下婢の茫然として、帯を手にして庭中に立つて見、いたく心に怪しみ、物かげに隠れて、なほも窺ひ居たりけるに、月香は、それとも知らず、庭の中央なる土穴に向ひ、さめ〴〵と泣くさまの、如何にも心得難ければ、中堂に走り行き、月香を呼びて、如何なる故ぞと問へば、いよ〳〵悲しげに、打ち泣きて、唯だゆるし玉へといふのみ。鍾離公は、再三慰めすかし、必ず之を聞かむとすれば、月香わづかに涙を收めて、さて云ひけるは、賤妾幼かりしとき、父なるもの、こゝにて、毬を蹴つて遊ばしめしが、誤つて、毬を此穴に落しけるとき、父なるもの、妾に向ひ、毬をして自と穴より出でしむる工夫やあると問ひければ、妾は、無くてやはと答へ、腰元に命じて、水を取り來らしめ、之を灌ぎしに、水の滿つる頃、毬は其儘に浮び出でける。かくて父なるものは、妾が愚ならぬを褒めそやし、喜に堪へぬさま、今も目に見ゆるやうにてこゝに思はず、有りし昔を思ひ出でゝ、うら悲しく涙の落つるを覺えぬばかり、あはれ、願はくは、憐を加へて、幸に深く咎め玉ひぞといふ。鍾離公、之を聞きて、大に驚き、汝の父は何と名乘りしか、又汝は幼時如何にしてこゝには在りけるぞ、なほ詳しく語り聞かせよといへば、月香對へて、妾の父なるは、姓を石、名を壁といひ、六年の前、この縣を預りしなるが、不幸にも、思ひがけなき火災の爲め官倉を燒き失ひし罪によりて、職を革められ、なほ償の金を促られしより、晴れぬ思のむすぼれて、やがて身まかりしかば、有司は、妾と腰元とを官賣に付し、本縣の住民賈公といふの家に引き取られしなるが、この賈公は、さきに寃罪によりて獄に繋がれしを我が父の計らひによりて活命の恩を蒙りしものとかにて、妾等を大切に撫育しけるが、今しも、商用の爲め旅に出でたる留守に、その妻なるが、平生快からぬことあるにより、容赦なく、こゝには轉賣されしなれ、仔細は、此の如く、この外、少しも隠すことも候はずといふ。

　今朝訴出衷腸事、鐵石人知也涙垂、

鍾離公、聴き畢りて、心に思ふやう、兎死しては狐悲

み、物は其類を傷すとかや、我も石壁も、同じくこの縣を預りしものなるが、彼が時の不幸に遭ひ、天災の爲に身まかり、肉身の娘まで下賤に沈みしを、我とし見もせず聞もせざりしならば、その儘に成り畢りなむ。天、すでに彼をして、我が家に來らしめしからには、我とし之を扶持せざれば、同官の體面にもかゝり、石公、九泉の下にありて、我を如何なる人とやいはむとて、やがて、夫人を招き、ありし次第を一わたり說き聞かせけるに、夫人も、すでに縣令の娘とあるからには、賤しき婢と、ひとしなみに視るべきに非ざれども、我が娘の祝言の最、愈よ近づきしを如何にし玉ふといふ。鐘離公は、兎も角も、今より月香を使ふことは罷めて、我が娘の同胞とも視るべく、その外は、我自ら處分ありといひ、やがて一封の書を草し、人を遣して、高大尹の許に屆けしめけるに、大尹、何事にやと封を開いて讀み下せば、しばし祝言の日を延べむといふことにて、其文は次の如くなりける。

男を婚し女を嫁するは、父母の心得、すでに成人と雖も、乃ち高明の事なり。近ごろ、小女閣を出でむとするに因り、豫め媵婢月香を置く。その顏色端麗、擧止安詳なるを見て、心竊に之を異とし、細に來歷を訪うて、乃ち兩任の前、石縣令の女たるを知る。石公は廉吏、倉火に因つて官を失ひ、軀を喪ひ、女も亦た官賣せられ、轉展して塞家に售らる。同官の女は、猶ほ吾女のごときなり。この女、年すでに笄に及ぶ、惟だに屈して媵婢となすべからざるのみならず、且つ吾女をして此女に先つて嫁せしむべからず。僕、今急に此女の爲に婿を擇び、小女の薄奩を以て、之を嫁せしめむとす。令郎の姻期は、少らく改めて定むるを待て。特に此に拜懇す、伏して惟ふに情諒。鐘離義、頓首。

高大尹、見をはりて、さては此の如き事あるか、これ固より長者の事、吾、如何ぞ鐘離公をして獨り其美を擅にせしめむやとて、さて返書をものしけるは、

鸞鳳の配、佳期ありと雖も、孤兎の悲、豈に同志なからむや。親翁に在りては、すでに同官の女を以て女となり、不佞に在りては、むしろ親翁の心を以て心とせざらむや。亦言を三復するに、人をして悲惻せしむ。この女、廉吏の血胤、閥閲に慙づるなし。願はくば、親翁賜うて兒の婦となし、以て始の期を踐ましめ令愛は別に高門を選べ。庶幾はくは、兩便ならむ。むかし遽伯玉ひとり君子たるを耻づ、僕今

願はくは親翁の誼を分たむ。高原、頓首。

使の者、この書を帶びて還るや、鍾離公、以爲へらく、高氏が孤女を娶らむといふは、義擧といふものから、吾が娘も、彼の倅も、すでに久しき前より約束せしなれば、今更改むべきに非ず。しかず、我が石小姐を嫁し遣るを待ち、やがて、別に粧奩を整へ、吾が娘の事を全くせむにはと。依つて、又一封の書を寫し、人をして再び高氏に屆けさせける。その文は、

無依の女を娶るは、高情に屬すと雖も、すでに定るの婚を更るは、終に正道に乖かむ。少女、令郎を久しく鳳飛を諧ひ、鸞鳴を准擬す。令郎に在りて、妻を停めて妻を娶るはすでに、古禮に違ひ、少女をして、婿を捨てゝ婿を求めしむるも、人の非を免れ難からむ。請ふ、君、三思して必ず前義に從へ。義、惶恐再拜。

高公讀み畢りて、嘆じて云へらく、我一時思ふこと熟せず、今鍾離公の言を聞けば、まことに、愧ぢ入るの外なし。今の我身に、兩つながら心を盡すべき道こそあれ。鍾離公をして、其志を行ふを得せしめ、吾も亦た同じく其名を享け、幕世の後までも、美談として傳へらるべしとて、又返書を認めけるは。

女を以て女を易ふ、僕の義を慕ふや般なりと雖も、妻を停めて妻を娶る、君の禮を引くや甚だ正し。僕の次男高升年方に十七、尙ほ未だ姻を締せず。令愛は我が長兒に屬し、石女は我が次子に屬せむ。佳兒佳婦、兩對の良姻、一死一生、千秋の高誼。粧奩は求備を要せず、時日は且つ和同を喜ぶ。伏して冀はくば、俯從改め卜すべからず。原、惶恐再拜。

鍾離公、書を得て大に喜び、かくの如き處分は、まことに雙美といふべく、高公の義氣、まことに古人に愧ぢず、吾はまさしく下風に拜すべきなりとて、早速夫人に告げ知らせ、ありかぎりの粧奩を分ちて二となし、衣服首飾など、少しく買ひ增し、兩女を一樣にして、厚薄なき樣にして。やがて十月望の日の前二日といふに、高公は、二つの飾り立てし轎を用意し、笙簫鼓吹の賑はしき中に、兩位の新人を迎へければ、鍾離公は、先づ服裝を送り出せし後、瑞枝、月香の二人を前へ喚び、夫人をして人の妻たるの道を說き聞かさしめ、やがて、二人は拜別して出でたりける。月香は、鍾離公夫婦のこよなき恩懷を深く心に感じ、去り難く覺えて、しばしは打ち泣くのみ。かくて、轎に乘りて行く途すがらの事、くだ〳〵しければ記るさず。やがて、縣に

至れば。この上なき吉日良時といふに、しかも兩對の新夫婦、花の如く、錦の如く、目ざましかりける有樣にて、高公夫婦の喜び、限りなきも理や、正に是れ、

百年好事從レ今定、一對姻緣天上來、

かくて、三日の後とや、鍾離公は、夢に一位の官人に遇ひしが、幞頭象簡の姿、いかめしく、面前に立つて、說き出でけるは、我こそ月香の父たる石壁にて、生前は、この縣の大尹たりしが、倉糧たま／＼火を失し、賠償の道なきにより、鬱々として身まかりけるが、上帝時にその清廉を察し、その無罪を憫み、勅して、本縣の城隍神とせられける。月香は、吾が愛女なるが、こたび君の高誼を蒙り、泥中より拔かれて、美眷となりぬる、この陰德の事は吾すでに上帝に奏聞しぬ。元來、君は嗣子なきが、上帝その善を行ひしを賞美し、依つて、一子を授けて、其門を大にし、君も亦た身を高位に致し、齡も久しかるべし。都縣の高公も、君と心を同うじ、孤女を娶りける故、上帝亦た二子に高官厚祿を授け、以て其德に酬ゆべしとなり。あはれに如何なる折にても、決して弱を凌ぎ寡を苦しめ、己を利し人を損すべからず、天道は昭々たるものにて、纖毫の事にても洞察されざることなきよし、普ねく世の人に告げ知らせよかしといひければ。鍾離公は、答拜せむとして、身を起しけるに、おのが衣服の裾をふみ、その儘に、後に倒るれば、これなむ南柯の一夢なりける。あまりの不思議に驚きて、その由を夫人に語りしに、夫人も感に堪へかねし風情。やがて明くるを遲しと、轎に打ち乘り、城隍廟に詣で、香を焚いて禮をなし、百兩の金を喜捨し、道士に命じて、廟宇を新にせしめ、この事を碑にしるして、廣く衆人を諭し、又この夢の物語、事こまかに高氏に告げ知らせしに、高公は、二人の兒子とともに、書を披いて、嗟嘆して止ます。

かくて、鍾離夫人は、年四十を過ぎて、子を生みしが、名を天賜と命けたりける。その後、鍾離義は、宋に歸して、龍圖閣大學士となり、九十までも生き延び、その子天賜は、大宋の狀元となり、高登。高升ともに、宋朝に仕へて、卿宰の高き位に昇りける。これは、後の話なり。こゝに、賈昌は、旅に在ること久しからずして、回り來りしが、月香と腰元との在らざれば、妻を責め問ひ、幾たびか爭ひしが、その後、鍾離和公が月香を養女となし、その姬君とともに、高門に輿入せさせよしを聞きて大に安堵し、二十兩の金を以て、かの腰元を贖ひもどし、石小姐の許に送らむといひしが、

かの趙には、夫婦の恩愛、今さら別るゝに忍びずといひ、張牙婆も亦た懇に請ひければ、賈昌も、之を諾ひける。かくて、趙二夫妻は、懷安縣に赴きて、大尹高公を尋ねけるに、高公は、事の由を問うて後、屋敷に入れ、その嫁の言ふところ、月香の語りしに相違なければ、その儘に、留め置き、又人をして、厚く賈昌に物を賜ひけるに、賈昌は辭して受けず。これより、賈昌は、其妻の義なきを怨じ、誓を立てゝ、別居することゝし、一人の婢を招きしが、やがて、二人の男子を生み落しける。これも、善を爲せし報なるべし、後人詩あり、歎じて云ふ、

人家嫁娶擇ニ高門一、誰肯周全孤女婿、
請看兩公陰德報、皇天不レ負好心人、

（完結）

ものしづく（四號つゞき）

三宅花圃

四 生野の落葉

彼平野二郎國臣は、筑前の甲艮郡に生れ、父は福岡藩先鋒隊の師範をつとめたる程なれば、武藝つたなからず、又天稟の才は文學に長じて、和歌をこのみ、よみ出るも多き中に、勤王の志をこめて秀逸いと多し、月照を日向に送らんとしつる海原に、西郷はとかくすくひあげつれども、遂に入ぬる月かげの、また世を照す術もなきを、いたくなげきつゝ、花の都といふ長歌をうたひていひけらく

花の都も秋はなほ、ゆふべ淋しき風情あり名はけがれたる清水や、落くる瀧の音羽山、木の葉いろづく折からに、落るや紅葉の散々と、みだれゆく世の涙波にや、芦のさはりはしげくとも、なほ世のために身を盡し、つくさんとても筑紫かた、波影の岸のなみならぬ、操をいつか深みどり、いつもかはらぬ青柳の、驛路こえて香椎潟、多々良の橋を打渡り、千代の松原千代かけて、萬代かけて君が代の、千歳の松によそへつゝ、神にあゆみを箱崎の、社にかけし四つ文字の、筆の主をよくとへば、延喜の帝かしこくも、御手も下しましてふ、ここも昔は石だゝみ、かさね／＼し白浪の、寄せし例を忘れじと、うらみ浦わの夕たすき、かけてなげくも哀なり、濡衣塚のぬれ衣、我身にきたるこゝちせり、やがてはかたの侘ずまゐ、こゝも波風騷しく又ゆく先は薩摩潟、沖の小島にあられども、心細くも都にて、たれかあはれと思ふらむ、賴む心はつくし人、一人の外に打あけて、語ふ友も涙路へて野間の關屋の關守に、せきとめられて又舟に、のれどもそれと寄方も、涙にゆられて行先は、黑の瀨戸てふ名もうしや、やがてかごしま籠の鳥、翅ちゞめて潜みしが、又木がらしと愕きて、日向をさして舟出せし、日は神無月望の月の、傾く月ともろともに、照りかゞやきて曇りなき、身は大君の爲にとて、こゝに一人の薩摩潟、いかなるちなみ先の世の、ちぎりもふかき舟の中、底の藻屑と成ぬる

を、
　ありあひ人も船人も、楫の雫の露ほども、
さりとは知らず、白波の立騒げどもかひぞなき、なほ東雲の明烏啼より外はなかりけり、
かくばかり風流韻字の方にも志し深ければ、望東尼もみやびたる言葉かたぎとして、交いともあつければ、井伊大老も櫻田の變ありし頃、望東尼の山莊にひそみて、とかくはかりつる事共、行はれず、名を匿し姿をかへて、藩主の出遊をうかゞひ訴へし事また聞入られず、肥後に入りかの神武必勝、制蠻策など草し奉れるも、悉く聞入られねば空をあふぎてうたひて曰ふ。

　我胸のもゆる思にくらぶれば
　　けぶりはうすし櫻じま山

一すぢにおもふ心は通はなむ
　さつまの關はよしとざすとも

薩藩にては志をよしとありて、金子など給はりしも、いまだ用ゐらるゝ時にいたられど、平野は一人こゝを頼みに思ひて、一朝島津氏にして上京あらむか、世は草木の風に靡くが如く、東夷一手に平げられんとを待たりけれ、時しも文久二年四月島津氏入京すと聞えて、從者千餘騎行装いかめしくうちたては、すはや時こそ來りたれと、はやり男の輩、錦旗を奉じて東の空に打立んずとひたあせれども、いかに思ふ所やありけむ、かつは志士の意に任するやうに、かつは公武の間に立ちて勢につかんとするやうに、兎角ひきしろひ、日を過すを、かくと心付てはいかでもだしぬべき、今日までも待にまちたる時機を徒らに過して、今はた、何時をか待たんとする、島津氏たらざらんには、同志の人々糾合して、いかにともせむ、人の手をからざらんと、引かへされぬ、やたけ心の、ふし見の寺田屋に打集ひひしめくを、なだめむとして使にたちし者ありけるより、いよ／＼怯なりと此方は憤り、共にともに論じ合ひ、はては格鬪して殪るゝものも多くあり、此時黑田氏も上京ありと聞ゆるは主とする所、島津氏の義擧をとゞめん爲なりと、いひ傳ふるを、平野は聞きて、福岡薩摩は親緣の間なり、必ずそのいふ所は用ゐらるべし、黑田氏にしてかくとゞめ諫めなば、かれての心組もうたかたの泡とやならん、と伊辨田尙平といへると共にその道に立迎へ、播州大藏谷にて行逢たり、平野は機智に富み、かゝる方には巧なれば、島津氏の從者なりと僞りて黑田氏の從臣につきていへけるやう、今や世の人心さま／＼にはかりがたき折なれば、心なくして上京あり、萬一の變もあらむには、進退に迷ひたまふことなしともいはれかたし、暫く國表に輿をかへし、時を待たれんこと萬全の計とこそ覺え候へ、われ／＼兩人密使としてまかり越候、とあざむきこしらへけるに、平野なりとは知るものなければ、いたく驚き、それより引かへされしたるが、後に平野のたばかりあらはれ遂に獄に繋がれたり。
吉田屋の夜嵐にこそ散殘りたれ、今さしかゝりたる鬪のそら音に曉の露しぼる袖もまださむき、夏のはじめつかた、福岡桝木屋の獄にありと聞て望東尼のいひやりたる、

　たくひなき聲になきつる鶯も
　　ここにすむうきめみる世なりけり

多能の平野は獄にありて無聊にくるしみ、さま／＼の和歌などよみつゝ紙を捻りて文字を製し、糊にてはりつけ返歌を望東尼におくりていふ、

　おのつからなけはそ籠にもかはれぬる
　　大藏谷の鶯のこゑ

入獄中は行厨の底に頭髪をはり、絲にかへて琴を作り彈じていふ、

ひとやのうちの日永さは、ちとせの秋の心地せり、こゝはことなる神の世か、さらに命ものひつべし、もとより獄屋にすまふ身の、わびしといふもおろかなり、かなしといふもあまりあり、たのしといひてやみなまし、

かくしてしばしある程に九重のうちに、この有樣きこえて、罪ゆるすべしと仰下されしをよろこびうたひて、

海山にひそみし龍も時を得て
　けうは雲井に立のほるなり

まことに龍の雲を得たる勢にて、望東尼の山莊に來り訪んとて文をやりぬ。

秋風の立わかるまのなこりとて
　山まつ陰にあすはやとせむ

よべもわたらせたまひし由うけたまはりぬ、けう山里にかへらせ給ふよし、廿七日には大野宮へま入て、それよりすぐに打たち侍らむとおもひおり侍りぬ。さればあすの夜はやどを其山里にて、一夜かたりあかし侍らむ、あなかしこ

國臣

一總禰尼山室

其夜いかなるさはりありけむ、みえざりつるを望東尼もとなく思ひて、國臣ぬしが公より京へつかはさるゝ時、ここに來、すぐに旅立よし、いひおこして、其夜つひに來らざりつれば、

今宵はとまつにおとせていつしかも
　立かへりふくいほのあきかぜ

あくる夜來りけるがいとうれしくて、

うれしさと別おしさのいかなれば
　ひとつこゝろにおもひわたらむ

國臣またこたへてよめる歌

うれしさと別れ惜しさはへたつとも
　おもふ心をいかてへたてむ
あり明の月もろともに立出つる
　けふの旅路はあかるかりけり

望東尼

あり明の月よりそめてあかければ
　日の御ひかりもやかてまよめむ

國臣

數ならぬ身は山風となりてたに
　御ひかりかくす雲をはらはむ

望東尼

一すぢの心つくしの秋かぜに
　いかてむかはむゆふ立のくも
おしからぬ命なかゝれ藤波の
　雲井にかゝる春を見るべく
岩倉におさめし戈も世につれて
　にふく成行ことそかなしき

敷島の歌の中道、ふみかはし、かたりかはす、言の葉草はまた盡ねど、燈あぶら少なくなりて、しばし光をみする山窓の曉方、これを最後の對面とは、うちむかふ、心々にしるよしもなく、あやしくこころの外にぬるゝ袂をわかちかれつゝも、平野は、再會を約し京都に入り、學習院出仕を拜命しつ、しばしある程に世の有樣かはりて昨日までも朝議にかゝはりし公卿は防州へ落行たまへば平野も京都に身をおきかれ、時事の力くばかり運びながら、今又あらぬさまに成ぬるを憤やる方なく公

卿の內の澤卿を奉じて但州生野銀山に義旗を擧んとして三田尻より望東尼におくりし歌に

いく度かすへし命の今日までも
　のこるは神のたすけなるらむ

大君にさゝけまつりしわかいのち
　今こそすつる時は來にけれ

いひやらむことの葉かすはしゝれと
　筆にはえこそつくさゝりけれ

志はよしといへども、時の到らぬほどはいかにせむ、生野にあげし義兵もちり〳〵にうちなされ、平野は豐岡藩の兵にとらへられ、京都六角の獄につながれし、翌年の元治元年七月廿日といふに、三十七のさかり年を、心なき獄吏の手に朝の露に消失ぬる、あはれといふも、あまりある武士のはてを、望東尼はいと〳〵かなしみて、親しき友なる馬場文英のもとに心のかぎりをかきかぞへなげきやりける文に

神無月の御細書大に感じ入拜見らる、誠に〳〵〳〵おほしめし不淺御ことゝも御禮つくしかたく返す〳〵嬉しくそんしらる、先はたひらかにわたり給ふよし、二なくよろこひ入りらる、ことしは寒冷甚しくおはしまし候へば、いよいよ其地はとあけくれ存候事ぞかし、當時御形勢御かけにて大かたの事乍恐察入候て淚とゝもにくりかへし申候、誠に〳〵八月立侍り居待の月影のくもりたりしもうへとこそ侍れ、御文のふし〳〵はおとろき又うれしくかなしく或はいさきよくもさまざまいふはかりなく、こその四月藤長のとられし時とはいかはり乍憚、天朝あやふき御ことどもこそ目もくらみはつるこゝちに拜し奉りぬ、いづくも正義士はかくれ奸人時を得顏になりゆくは、天のみこゝろあやしと心ひとしきともうちより內々申事ぞかし。平野氏のことあけくれ思ひやり侍りたるもこま〳〵御しらせ不淺御かけにて道行おしはかられてなむ、同人こと但州生野にて義兵をあけ十一人はかりをきりたりといふこと、今京師にある喜多岡ぬし（喜多岡勇平時に望東の隣家に住す）の文にきき侍り誠に誠に力をうしなひ黑染の袖しほり申候、さることありては天朝をはしめ奉り、御國許もいよ〳〵くれのやみかとかしこさもわすれ、身のほどもしらずあんじくらし申候、そのうへ中村圓太（無二）といふ人先の頃より上京なりしもとらはれとなりあまたの人していましめたるよし、彼人平野におとらぬ正義士の一人に候へば、ゆく〳〵いかなる天地變化せんかとそらおそろしく存候、右に付ては御國義士もちりゆくかと察し申候ぞかし（中略）三田尼御下向の御七方の御事共かきりなく存奉候（中略）この御時世の形勢御めんたうなから御しらせ奉願候、此度の御書を正義の人に見せ候處大によろこび感心いたし申候、萬事的中いたし候こと多く力を得しといさみ申候、これも一つの御周旋かと存じらる、何かと申上たく候へども、何分〳〵心にまかせぬかなもしにてつくしがたく御よみ分もいかゞと存候へば、よく〳〵御察可被下候、次の御たより待入候、寒冷御いとひ可被成猶又御周旋させ候へかし。あなかしこ

（未完）





家庭

△珊瑚に關する知識の變遷

理學士　飯塚啓

珊瑚を裝飾の用に供するは我國のみならず西洋にても頗る古き時代より始まりたる事にして從て此のものゝ博物學上の位置に關しても亦頗る古き時代より人の注意を惹たものらしく彼のセヲフラスタスやプリニー等の人々も珊瑚は植物なりと考へたのである而して其後西暦一千七百年に至りてトルヌフヲルト氏は此說に少しく修正を加へ珊瑚は海中に生育する或種の植物の生產物であるとしたのである之に次てマアシリー氏は實に珊瑚の起原を確め得たりとしたのである即ち氏は珊瑚の花を發見したりと揚言したのである氏は此時に於て其著書中に其花の圖を擧げ且つ之に關する詳細の記事を載せたのである故に此時代に於ては珊瑚は植物なりとして誰れ一人之を疑ふものなきのみならずレヲムール氏の如きは言葉を極めて其大發見を稱贊したのである

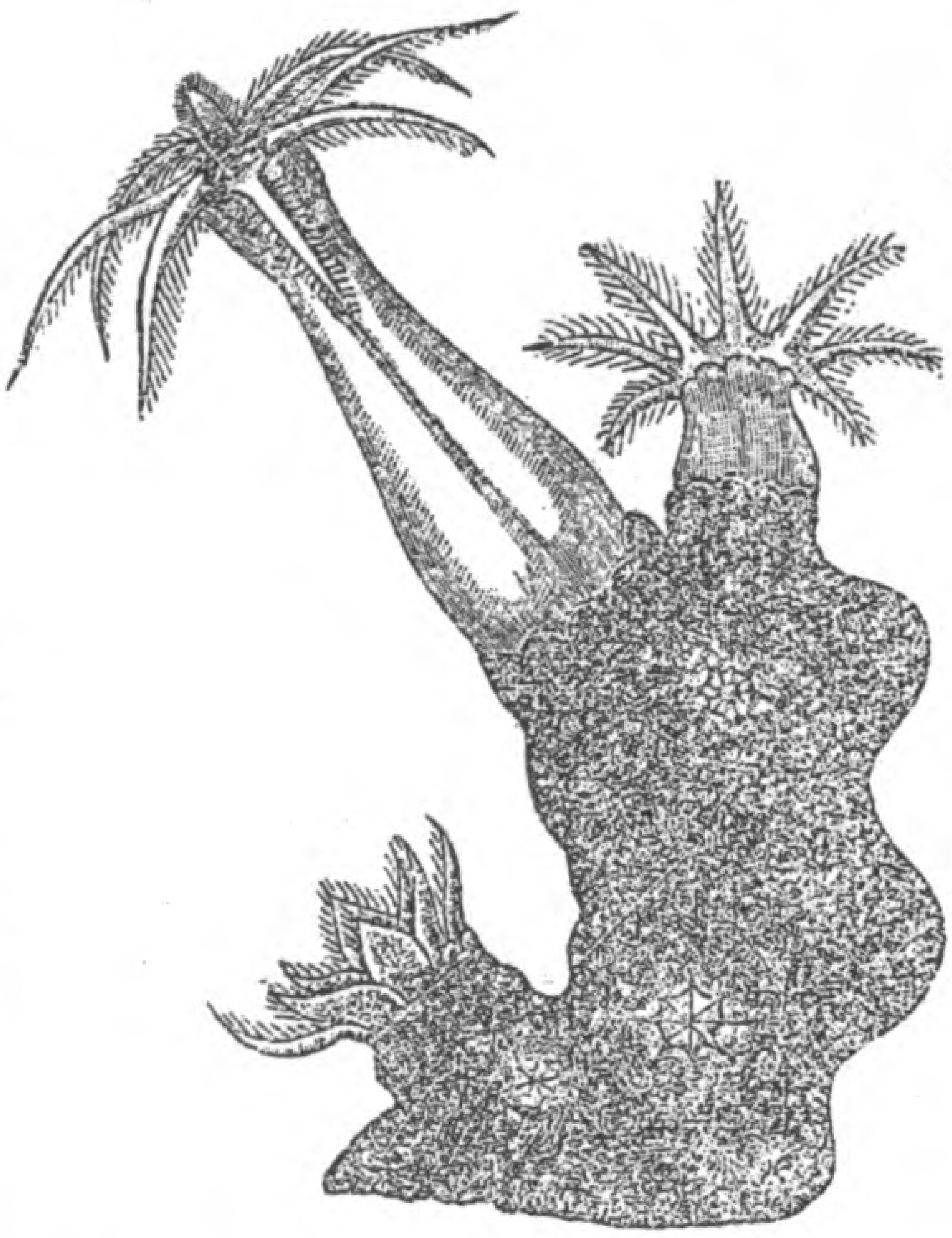
然し此の如き順調も永遠に之を維持することを得ずして其内に一個の變調を挿入するの不幸を見る場合は到着したのであるしかも其事たるやマアシリー氏の一門下生の發言する所と成つたのである

西暦一千六百九十四年佛國マルセールに於てペーサ子ルは生れたり氏は醫學と博物學とを修めたる一學生であつたが巴理の理科學校より珊瑚の生體に就て研究す可きの命を受けて一千七百二十三年にマルセール附近に於て其觀察を始めたのである而して其後更に政府の命を蒙り亞弗利加の北岸に渡りて其研究を續けたのである此くして長日月を費して熱心に研究したる結果として彼のマアシリー氏の所謂珊瑚の花なるものは實に生活せる動物體であることを確め得たのである從て吾人が裝飾の用に供する珊瑚なるものは植物でもなく又植物の生產物でもなく全く一種の小動物の連合體（即ち群體）が共同に作りたる骨格とも稱す可きものであることを明言したのである此れ珊瑚を動物性であるとしたものゝ嚆矢である今其曰ふ所を摘記すれば次の如くである

「余は珊瑚を取りて之を海水を盛れる器中に置きしに

所謂珊瑚植物の花と稱せられしは其實は眞の動物にしてイソギンチヤクに似たる小生物躰なりき余は此等の小動物が觸手を動かすを見て喜びを禁ずる能はざりき猶ほ其珊瑚を入れたる器を少しく温めしに此等の小動物躰は次第に開展するを見たり即ち嘗てマアシリー氏並に余が花冠なりと思考せしものは實に珊瑚虫の觸手にして其蕚なりと思ひしものは實に珊瑚虫の躰なりしなり

ペーサネル氏の此發見は實に從來唱道せられたる諸説を悉く排斥し得可きの價値を有せしものである併しながら其當時の學者間には一人として此説に同意するものなくレヲムール氏の如きは極力之が反對を試み冷評をさえ下すに至たのである而してジユツサヲ氏の如きは尚ほ珊瑚は植物なりとの説を主張し容易に此の新説に降服す可くも見えざりしなり之に於てかペーサネル氏は其事業に對する世の冷酷なる態度に厭き遂に後來の研究事業を捨てたるのみならず博物學を捨て社會を捨てゝアンチルスに退き外科醫を以て其餘生を送るに至れり而して氏の新發見に關する論文は遂に出版せられずして停みたり眞に惜む可きの事ならずや此論文は一千七百四十四年に脱稿して後ち巴里の博物館に藏められたるなり而して玆に附記せざる可からざることはレヲムール氏及びジユツサヲ氏も亦終に珊瑚は動物なりとの説に降伏しペーサネル氏の發見と其推理力とに服するに至りしことなり



珊瑚の一枝を示す

ペーサネル氏がアンヂルスに退きて其餘命を送りつゝあるの時に當て氏が學術上の事業は巴里に於て其聲價をあげたのである併し此の榮譽は彼に取りては何物をも價せぬのであつた而して其後レヲムール氏は此等の骨格を作る所の動物躰を呼てポリプ（珊瑚虫）と云ひ其生産物即ち骨格を珊瑚と唱へたのである以上述べた所を約言すれば珊瑚の動物性なることを發見せしはペーサネル氏にして之を社會に紹介したるはレヲムール氏なり而して其以後は裝飾用として貴重する所の珊瑚の動物性なることを

疑ふものなきに至れる次第である
其後西暦一千八百六十年に至りてラカズドウチエー氏は佛國政府の命により珊瑚の生物學的研究に從事し同一千八百六十四年に至り珊瑚に關する一書を公にしたり氏の觀察の多數なること及び其精密なることは實にペーサヲル氏の後繼者として恥ぢざる所にして其記する所を見るに生活せる珊瑚躰の一枝は實に最初の一個躰より芽出して増殖したるものにして數多の小動物（即ち珊瑚虫）の集合躰なり而して此等の各個躰は皆共同の組織によりて相連絡して以て共同の生活を營むものである又此等の集合躰(即ち群躰)は其始めは卵子にして卵子は孵化して幼動物を生ず此幼動物は暫時水中を游泳するの後ち適好なる場所を選で之に附着し次第に發育して更に出芽して終に珊瑚の一群躰を構成するのである斯くして樹技状の外觀を呈するのである
今其一枝を取りて檢するに二部分より成ることを知る即ち其一は中軸を形成する部分にして堅くして脆し此れ普通裝飾の用に供せらるゝ所である其二は此堅脆なる部分の外圍をなす所の柔軟なる外皮にして珊瑚虫の群躰である此の外皮部の構造は種類によりて差異あり桃色珊瑚にありては二層より成り其内層は細き脈管の中軸に並行して走れるものより成り外層は網状をなせる脈管より成る此等の二層は所々に於て內外相交通す各珊瑚虫躰の相交通するも此等の脈管によるのである而して珊瑚虫躰に二種の形状あり其一は前圖に示せる如く其開展せる時は長き圓筒状を呈し透明無色にして其上端に口を開き口の周邊には八個の羽状をなせる觸手を有するものである而して他の一種は前者に比すれば其形小にして外皮の平面に開口し觸手を有せざるものである此等の各個躰は上記の如く脈管によりて互に相通ずるものである
序ながら本邦に産する一二の珊瑚に就て述べて此篇を終らんとする
桃色珊瑚　此珊瑚は本邦産の珊瑚中にて色彩の美なると「木目」の鮮明なるとによりて珍重せらるゝものである其生長は甚だ盛であつて高さ及び幅約三尺に達し其根部に於ては直徑略二寸重量大凡六貫目のものありて珊瑚類中最大なる種類なり其枝は一平面状に分岐すれども多少は後方に向ひ反り返るあり又枝は往々相癒着し細き枝の部分にありては密に分岐するものにして九州西南海及び四國紀伊の南海に産す
赤珊瑚　此れは裝飾品としては前種に及ばさるも其

産額に於ては本邦産珊瑚中第一位を占め一ヶ年の産額一千乃至三千貫目と云ふ枝は一平面上に分岐し短くして棘状をなし小枝は枝の前面或は側面にあり軸は赤色なり九州西南海より土佐海に産す

其他房州沖伊豆大島近海等に産するものあり外國産には地中海の桃色珊瑚を最上とするものにして我國にて古渡珊瑚或は伊太利珊瑚と稱するものである而して此漁業に從事するものは重に伊太利人にして年々二萬乃至五萬二千貫目此代金二百乃至三百五十萬圓の收獲ありと云ふ其他ハワイ島亞弗利加の西北海岸マデイラ島又亞弗利加の東岸モーリシアス島近海にも珊瑚を産するのである

現今本邦産珊瑚の産額の大部分は伊太利に輸出せられ清國之に次ぎ内地に於て賣却せらるゝ數量は極めて僅少である今試に諸國への輸出額の比較を擧ぐれば左表の如くである



最近東京女學生風俗（其七）

明治卅五年珊瑚輸出國別表

	價額	數量
伊太利	二九五、三二一円	三六、三七二斤
支那	一一五、三三三	一三、三三八
香港	三五、三五〇	二、六三三
英國	、一六五	、〇〇二
朝鮮	、〇七	、〇〇二

明治三十五年に於ける珊瑚の輸出總額は四十三萬六千百四十六圓（四萬一千三百二十六斤）にして又同年に於て外國より本邦へ珊瑚の總額は四千三百六十八圓（三百九十七斤）であ而して此く本邦に珊瑚を輸する國も亦主として伊太利である

近年は本邦産桃色珊瑚の上等品は時として伊太利より再び本邦に逆送せらるゝことがあるとは一寸意外なことである

珊瑚の商買上品種の區別は商人各自多少の差異があるが今三井物産合名會社に於ける區別法を擧ぐれば從來十等に區別したるものにして其内の特別上等と云ふ珊瑚は一斤の價格八十五圓乃至三百圓次位の一等は一斤の價格六十圓二等は四十圓それから五等が十五圓で末位の十等が一斤三圓であるとのこと

大約右の如く等級を分つは主として色彩、其大さ、小枝の多少、生枯、腐蝕の度等によるものである而して赤珊瑚は色彩の變化少く且つ腐蝕の度を外面より識別するを得るを以て之を區別すること比較的容易なりと雖も桃色珊瑚は色彩の變化頗る多く且つ腐蝕の度は外面より窺ひ知ること能はざるものあるにより其價格を定むること容易ならずとす白珊瑚は普通二三等に分ち一斤の價金三四十錢より二圓位迄なりと云ふ

本邦に於ける珊瑚の用途は主として婦人の頭髮の裝飾、念球、印籠煙草入等の緒締等にあるもの〻如し又珊瑚の細工は大阪府を以て第一とし高知縣之に次ぎ長崎鹿兒島等にても亦之をなす

(完)

◎上代の男女の交際に就いて

湖月

茲に上代といふのは、太古から平安朝までをいふのである、わが國の男女の交際は太古程自由なやうに思はれる、古い程男女の間に墻壁が設けられてない、そのかはり、後世から評したならば弊害もあるといひませうが、また一方から見れば、大變面白く愉快な點もあるやうに考へられる、元來男女といつても、其間に嚴然たる區劃を立つべきものではない、その區劃の極めて少く、面白く男女交際したのは、わが國の太古である、彼の歌垣などの風俗を今から想像しても、嘸愉快らしくあつたやうに思はれる、春花秋月の極めて麗しい時候に多くの男女打揃うて、或は歌ひ、或は吟じ、或は躍り、或は携へて、野山に、あこがれ、川邊を逍遙することなどの愉快さは、後世の人々には、とても想像だに及ばぬことであらう、かやうに、天眞に爛漫に、無邪氣に、遊んでこそ、愉快もあり、興味もあり、またよく活動することも出來る、太古の人々が一躰に長命だといふのは、蓋し、かやうなことは與りて

力あることでもあらう、かういふやうに男女相集ひ一所に遊ぶことも、最早や奈良朝の末ごろには、全く絕えてしまつて、男女の交際は極て嚴重になつてくる、これは、いふまでもなく、漢學渡來、佛經渡來の影響である、いひかへれば、支那思想の輸入せられた爲である、彼の國では男女七歲にして席を同じうせずといふやうなことは、男女間の道義である、それが、わが國に輸入せられたのだ、其の影響を蒙つた結果、太古から行はれた、歌垣は、最早や、このごろには絕えてしまつた、男女相集ひ相携へて、光風霽月に嘯くやうのことは、昔の夢と消えてしまつた、それとも極下等社會の人間には、どうであつたか、或は依然むかしの通り、さやうな遊びごとは、行はれて居つたかも知りませんが、所謂上流社會の人々には、かやうな男女相寄り相唱ふなどいふ遊びことは全く絕えてしまつた次第で、女は深窓の許に獨りくよ〳〵琴を彈じ、男は月夜に笛を鳴らして僅かに男女思を通はすといふ位の事に止まつた、洵に男女の間はさびしい世の中となつた、肝要な用事があつて、是非男女對面しなければならぬにしても、疎い男子ならば、その家の玄關にだに昇るとを許さない、極親しい男子であつても女は、奧深かく引き籠つて簾を垂れるとか、几帳を立て添へるとか、或は障子(今の唐紙)一重を隔て、物越しに話しするといふ具合で女の顔ばせはとても見ることは出來ないといふとである、甚だしきに至りては、兄弟といつても違母兄弟姉妹になると、女は男に顔を合することは恥としたのである、だから男女相互に知らんと欲するの必要があつても、唯僅かに人傳に知る



最近東京女學生風俗(其八)

よりいたし方はなかつたのである、隨分究窟な世の中であつたやうに思はれる、それだから緣を結ぶにしても男女相互に知らぬ人と結婚するといふことも當時の社會にはあつたやうに思はれる、今日の所謂見合ひなどいふことは、平安朝には、なかつたのである、媒妁人が双方の家に出入して、心ざま、容貌、等のよしあしを能く見聞きして嫁なる女と婿なる男とが相應したところで、文のやりとりをさせ、歌の贈答ありて、手蹟の巧拙、歌の善惡如何を見て、よければ始めて婚姻が成立するといふ始末である、それだから當時の人には男でも女でも、歌を詠み文も作り手習もしたのである、猶この事についての詳しい事は當時の物語ものなどで御覽になればよく當時の有樣がわかります、かやうなわけで隨分極端にまで男女の間はむつかしくなつたのである、面白く眺め見渡す花もこのころは面影位しか見ることが出來ないといふことである、これも必竟するに支那思想の影響である、元來純粹の大和民族思想は實に平和な無邪氣な、ものである、決して理屈といふことはない、のだ、それだから面白い時には大に笑ひ、悲しい時には大に泣くといふのである、つまり天眞爛熳の四字は以てわが國大和民族の思想を代表することが出來たのである、それが、支那の文明を輸入し印度の佛敎などを崇拜すると同時に固有の大和民族思想が一變して、理屈の民となつたことが明かである、かやうなことは男女の間にも區別をつけることになつたので男女といへば別物の如き感を抱くやうになつた勿論男と女とは相違の點はいろ〳〵ありませうけれども、交際して徃く上にさう區別をつけべきものでないやうに思はれる、吾人は平安朝の男女間の墻壁を開放して、太古大和民族に行はれた天眞爛熳な而も無邪氣な平和の男女交際を羨望して止まざるものである

△元祿模樣　元祿風の大柄模樣が女子の衣裳に流行するの兆が大に顯はれて來た、戰勝の餘響として丁度自然の勢ひである、女子の服裝の華美なことを非難する聲も一方に起りつゝある樣である。併しながら靑春能く幾時ぞ、花の盛は宜しく爛熳の美を恣にすべしてある、服裝に美を凝らすことは强て、責むべきことてはあるまい。色を撰び模樣を好みて種々意匠を凝らすと云ふことは、決してそれを以て直ちに奢侈と云ふことゝ同一視すべきてはない。人間多少の風流がなくてはならぬ、それ〳〵思ひ〳〵に好きな趣向を試みること決して罪てはあるまい、ヘテもよし、ツミもよし、唯だ世をして單調ならしむるなくんば幸てある。（「光風」壹號）

論文

日本女子大學教授鹽井文學士選

天

○英雄ナポレオン

靜岡　たか子

拔山葢世の英雄、驚天動地の豪傑を尋ねたらば、實に箒で掃きたい位あるよ。然し、英雄中の眞の英雄、豪傑中の眞の豪傑と云つたら、やはりないものだよ。さあ、そこで、此の世界と云ふ、大きな舞臺の上で躍る豪傑中、わしのすきな人も澤山あるが、わしの理想の英傑といつたら、一人しかないよ。誰れぞ。それは外でもない。微々たる一小士官から起つて、位もない孤島の島守に終つた、つまらぬと人は云へ、自分には理想の英傑、ナポレオンボナパルト其の人である。わしは、彼の肖像を見るたびに、其の非凡の風貌に驚くよ。鋭い鼻、きつと結んだ口、人を射る兩眼、その寫眞を見てすら、氣おくれがする。まして、其の人に接したら、どんなだらう。あゝ、世は亂れ亂れて毎日毎晩、血なまぐさいなまぬるい風が吹き、罪なくて殺された人の靈魂は、天地間に充滿して、實に物凄かつた時よ。砲兵の一士官ナポレオンは立つた。立つて後の彼れ、其の活動は實に勇かつた。猛虎の勢で、昨日東を攻めたと思ふと、怒濤の勢で、今日は西の國々を手下にした。廣くもないが、あの歐羅巴、さりとて、中々せまくもない彼の國々を、一まるめにした其の掌の大きさ、實に驚くよ。掌のやうに膽も望も亦大きい。彼れをして今すこしやらせたらば、きつと世界を握つたであらうに、惜しい事をしたよ、あゝ。戰へば勝ち、攻むれば取る猛將も、一度の敗軍は、もう一生を浮ぶ瀨のないものにした。あゝ思へば思へばにつくいはネルソンだよ、エルリントンだよ。けれどもだねー、彼が世界を握つては又面白くない。櫻花の昨日パッと咲いて、今日ハラハラと散るのがよいではないか。英雄も昨年ズンと高く、今年スーと低い其間の消息に、あゝ云ひしらぬ趣かあるではないか。何にしても、彼は非凡だよ。……これぞ己が鄉の老先生と仰がるゝ白髯居士の君が、落花の下に立ちての御物語。

春寒うして感慨深し。

(雨評) 言ひまはしに妙味あり。春寒うしての一句、結び得て妙いふばかりなし。天とす。

地

○軍神なる哉廣瀨中佐

四 備 を み な へ し

君に奉じ國に報ゆ、中佐の念只是れ耳。我れは武士としての中佐を愛す。七生報國、一死志堅、再期成効、含笑上船。想望すべし、中佐當時の風采を。人よく大言壯語し得るも、果して行の之に恥づるなきを得るは、幾許ぞや。而して、君は此の心を以て、花と散れり。げに譽ある其の最期、門出の時、沈着の中にも、勇氣凜然として、今回は深く港内に入り、敵と談話して歸らんと笑語せられたりし面影や、今いづこ。寡婦たらしむる如んば娶らざるに如かずと、何ぞそれ其潔きよ。我れは丈夫としての中佐を慕ふ。曰ふ勿れ、これ冷胸の人と。知らずや、其の幼時、亡き母をしひて泣く可憐の弟を、涙ながらに脊負ひて慰められしを。我れは泣く、可憐なる當時の中佐を思ひては。其の身すでに海軍に投じ、後、露國に留學中、親愛なる祖母の君を喪ひし時、如何計り悲歎せられしぞ。夜さへ泣き明して、終に眼病を得られたりしにあらずや。女々しと思ふ勿れ、これ人情の至美。宜なり、砲彈雨と注ぐ虎穴の地に、一の兵士をもとめて、沈みゆく船を去り能はざりし眞情の切なるもの。

品行方正、各國語に通じ、詩歌を嗜む。我れは文人としての中佐を欽す。身、親なく子なくホームなし。然も、獨り寂寞を辿るものにあらず。羨望す、君が心の慰籍をもとむるに、しかく高潔なりしを。

死後面色變ぜん事を恐れ、洗面に溫湯を用ゐられざりし中佐の用意、我は德者としての中佐を欽す。好哉、佳香薰ずるが襯衣。よしや其の香は主と共に海底に葬られんも、千載の下、歷史はなほ昔を語らんかな。

(雨評) 面白く整ひたり。地とす。

人

○我が國旗

千葉縣上總國山武郡成東町中學のほとり　若 緑

歐米諸國の人は、往々我が國旗を目して、單に白地に

赤球を印せるものに過ぎずとなす。我が國旗の赤球は旭日天に昇らんとするを示すものにして、「日の本」てふ我が國名を表はせるものたるや、論を俟たずと雖も我れ〳〵日本人より之を觀れば、我が日章旗は、實に是れ以上の意味を含むもの也。旭日を環ぐれる白地は、日本の純潔無垢を示すものに非ずして何ぞや、中央なる赤球は、愛國の一念に燃ゆるが如き我が國民胸底の熱血を示すものに非ずして、何ぞや。又た此の旗面の大部分を占むる白色は[illegible]平和の意を表彰するもの也、即ち知るべし、紛糾絶え間なき東洋の天地に、平和を授くるは、日本の天職也。堅實にして寸毫の狂ひなき赤球は、日本國民の武力と勇氣を表彰するもの也。吾人は自から爭端を起すを好まず、極めて平和を愛するものなりと雖も、時局の發展上、已むを得ずむば、則ち干戈を執つて、他國と相見ゆるを辭せざるもの也。



見ずや、國旗の白色面上、一點の汚點を存せざるを。我が國史も、正に斯くの如し。古來曾て些の汚瀆をも被りたると無し、將來に於ても亦た然らん。見ずや、赤球の色は濃にして、少しも他の色を混ぜざるを。我が國民の心情も正に斯くの如し。其奮激する所は、殉國奉公の念にあり。吾人胸裡の燃ゆるが如き熱誠は天皇陛下の爲めに忠義を竭すの念にあらざるはなし。我が日章旗が、單に赤白二色より成れるが如く、國民の心情も、亦た單純也。即ち、慾望といひ、趣味といひ、事業といひ、何づれも單純ならざるはなし。白扇倒まに懸る富嶽の比類なきが如く、日章旗は、遙かに之を望むも截然として、決して他の國旗と見誤らるゝことあるなし。今や、日本は、形より云へば彈丸黑子の一小國たり。しかも、宇內文明諸國の環視の中心となる。地理上より云へば、

渺たる一小邦なり。しかも、其の榮譽名聲は世界各國の識認する所となる。等しく東方に存立する小邦を以て、他の東洋諸國と同一視せらるゝと無く、偉大なる國民、強力なる國民として、嶄然頭角を顯はせり。噫、闘うて勝たざるなく、攻めて拔かざるなく、連戰壘上に翻々たる我が日章旗、極東の最大文明と光榮を代表せる我が日章旗、吾人は須らく滿腔の誠意を以て有ゆる尊敬を之に捧げて、可なり。

(雨評)筆少しくまだしきところあれど、其の論旨は充分にきこえたり。人とす。

秀逸

◎絶叫(女學生に變りて)

三河　霞溪女史

冤罪……冤罪、妾等は實に社會より言ふ可らざる冤罪を受けてあり。されど、婦女子の身の可弱さ、その冤を雪ぐによしなきを、如何にせん。干すよしもなき濕衣に、旦夕の涙に暮るゝを、如何にせん。されど、一寸の虫にも五分の魂とかや、妾婦女子と言へど、などか默して永刧冤罪に苦しむべき。

世人は妾等を墮落せりと言ふ。妾等誠に墮落せるか。勿論女學生は天下に多し、一人の墮落せる者なしとは言ふ可らず。されど、世人は一視不變の眼を以てせり。曰く、彼等女學生なる者は、緞茶袴に依つて、威儀をつくろひ、紫メレンスの包によりて、人の目を誤魔化せど、彼れ等の間に於ける風紀の頽廢は、男學生の其れよりも甚しく、身學生にして、然も婦女にして、貞操淑儀の何たるを知らず、倫理道德の何たるを知らず身を色慾界の餓鬼となし、學識なき市井の娘も愕き呆るべき醜行痴態を演じ、唯肉慾の隷となりて荒亡その極に達せる墮落の底の鬼畜なりと。あゝ、妾等又涙なき能はざるなり。

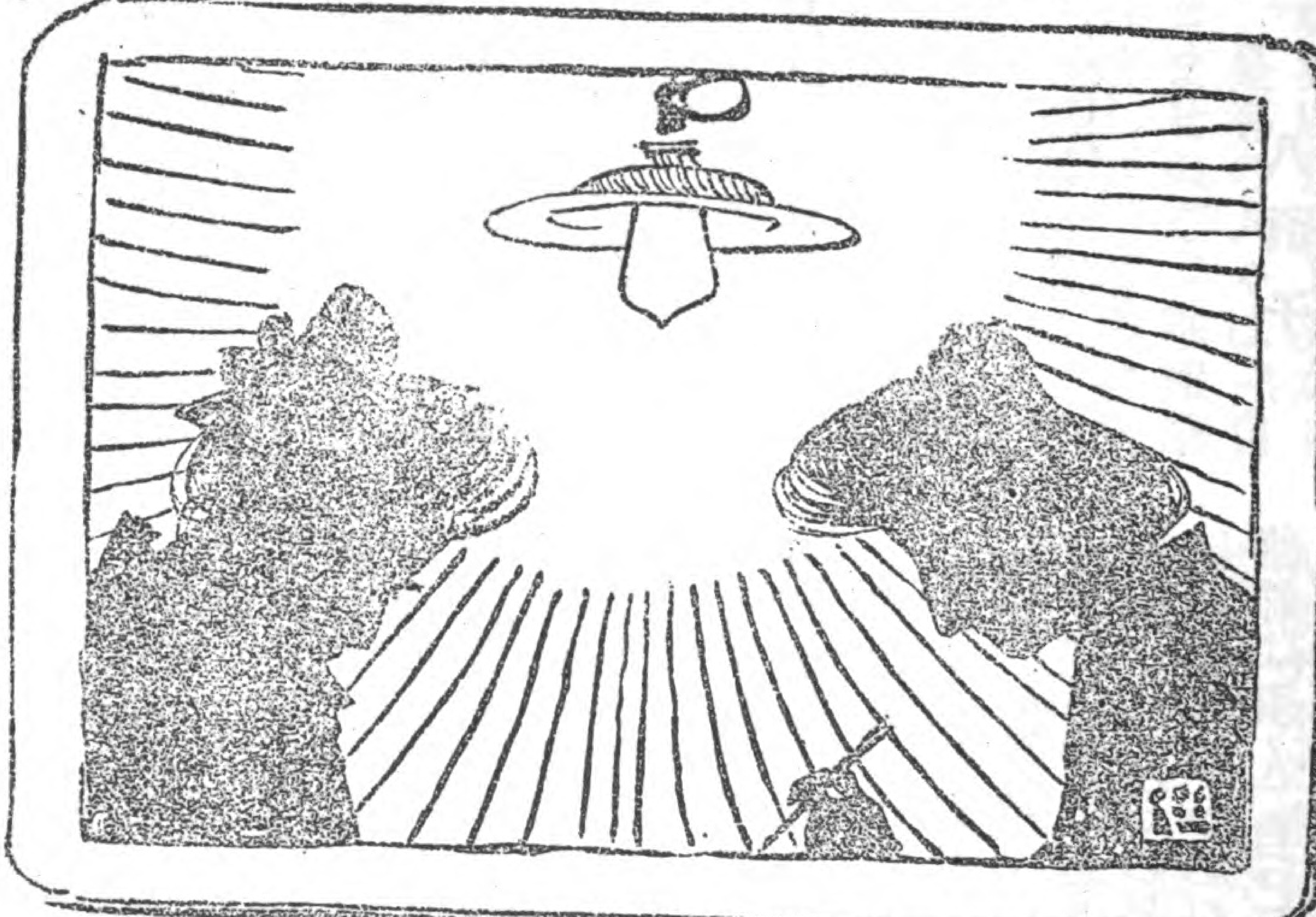
妾等もと父母あり同胞あり、しかも、希望あり所信あるもの。何を苦しんでか、身を墮落腐敗の極に沈めて一生の目的を誤り、人格を墜すを好まんや。唯修學習業に餘念なきものを。誤解なるかな、冤罪なるかな、社會は之を一樣に墮落視して、常に擯斥嘲罵を加へんとす。

されど、社會は、よし妾等中一二の墮落者ありとも、此を責め叱するの資格ありや。冀くは妾等が其の始め墮落の淵に望む因由を稽へよ、妾等は自信の爲め抱負の爲め父母の膝下を辭し、總ての知己に別れ、涙を揮つて鄕土を捨て、他鄕の孤客となれり。然も、其の地に驕奢豪侈、人は虛誇の念に驅られ、輕佻浮薄一時的の阿諛に流れ、淫靡の風上下に瀰漫し、宛然溷厠の如く汚穢の極に陷れる所なるを。妾等、處女として、世

問的智識なく、浮世の荒風に觸れざるもの、此の如き醜状を以て圍繞せられたるに於て何ぞ純潔無垢なる精神に大影響を受くるなきを得んや。而も、虎狼の如き男子は、巧に其の寂寞なる孤客の境遇を察して、之を籠絡掌弄して、遂に溷濁汚穢の習俗に化せしむるなり。誰れか是れを以て妾等が自ら好んで茲に至れるとなすものぞ。實に其の墮落は、一に妾等に依つてなされずして、社會の爲め男子の爲めに墮落の底に沈められしなり。社會風紀の頽廢と男子の敗行とによりて、腐敗の淵に陷されたるなり。

嗚呼、社會は自ら、他を死地に陷れて、而して、其の死地に陷れるを罵る者なり。其の無法や、愕くべき哉。世の男子は、自ら妾等を墮落の底に沈ましめて、而して、妾等の墮落の底に沈めるを責むる者なり。餘りに暴戾放肆ならずや。無法無躰ならずや。社會、男子は、此くの如くにして尚妾等を責むるを得る、何等特殊の理由を有するか。噫、社會上下に瀰漫する亡國の醜風を奈何。實に憐むべきは、妾等ならずや。哀れ、世の識者よ、此の寃罪に苦しめる妾等が爲めに、一掬の涙を注ぎ給はずや。

（兩評）一掬の涙、評者も決して惜しまざるところなり。然りといへども、共に泣くのみにてはかひなし。評者はこゝに筆を加へて世の女子の、强固なる意思を以て、自から其の寃罪を雪がれん事を希望す。



○當世男女學生書齋

能登　池野いさみ子

風のまに〳〵片々と、窓より舞ひ込みたる樣に見ゆれども、其の實、詩人ぶッて殊更に散らししものならん机の上に緋桃の二三片、すでに高襟式なり。朱塗りの本箱が三つ四つ、堂々と取り並べられしは、書齋といふ名の申し譯けかと見えし。本箱となん、いかめしく銘うつてあれど、大方は空なるべし。よしや全然空にはあらざるも、藏むる處は、詩集の二三冊なるべし。小說の五六冊なるべし。数學の本一冊なきは、必然なり。物理の本一冊なきは受け合ひなり。さりとは、慨はしき限りならずや。主の放蕩でも語りだしさうな、机の側に開き放し

の雜誌とやらがある故に、おそる〳〵覗ひ進らせば、こはいかに、玉の如き海老茶式部を釣らんとのお心得か、當選になりたる自己の文章の嬉しくも書かれ居る處なるぞ恐ろしき。而も不潔極る部屋なり。夏ならばともかく、此の頃はさ程に塵も立たざるに、紅塵寸餘と言ッては、ちと大げさなれど、障子の骨白うして雪の如し。加之、尺八、帽子、正服、齒磨等の數々、だらしもなくて、狹苦るし。

こは、女なれば、羽織袴、本箱、机、ヴァイオリン、手風琴など、規則よく並べられたれど、衣服の絹地なるは、餘りに華奢ならずや、本箱に隙なく滿されたる書物の悉く戀愛小說なるは、學生の本務を忘れたるにあらずや。床しく見る可き遠州流の生花の、何となく品格の落ちて見ゆるは、そもいかなる譯にや。本箱の奧に秘め居る十數通の手紙の、大方は男文字なりとは餘りに巫山戲たる話ならずや。机上に見ゆる五六冊の西洋詩集は男學生を生擒にするお心懸けか。あはれ、御身よ、學校より持ち來たりし風呂敷包みの、未だ其儘なるにあらずや。

（同評）今少し婉曲に言はば一層面白からんと存じ候。

◎公開狀

上總　林　八須子

春趣、敍事文、地賞　松翠女史投（少國民）
田舍の春、仝、秀逸　名倉貫子投（新思潮及ビ婦女文藝）
梅を見る記、右仝　都筑靜子投（少年文集）
夕のにほひ、新詩人賞　内藤みゆき投（英才詞苑秋卷）
將軍の…短歌、人賞　右同人投（朝報揭載）
深山の溪流、新詩秀逸　翠溪女史投（秀才詞林　靑年界）
波、新體詩　田中きよ子投（少年世界）

右は女子文壇四號の剽竊詩文です。内藤樣のは少し燒直してすが、他は皆丸寫してす。私とても、他の悪事を指摘して、快く思ふものではないですが、敢て此に公開するは、偏に諸姉の反省を希望する微衷に外なりませぬ。幸に御諒察を願ひます、扨て、右の表に依て推論しますれば、左の諸篇も無論當選を無効とすべきです。

『妾が友、論文秀逸、松翠女史、沈吟、新詩、同人、』
『日誌の一節、抒情文秀逸、新征衣、詩秀逸、米搗男、はがき文天賞、風車、仝上秀逸、水枯れて…浪にぬれ…短歌秀逸、以上都筑靜子投。』
『露、詩秀逸、名倉貫子、』『黃昏に…短歌、田中きよ』

今更喋々する迄もなく、本誌の使命や抱負は、和氣靄々の中に女子の品性を陶汰し、思想を高潔ならしむるに外ならぬと思ひます。しかしますれば、之が投書家諸姉は須く「自己品性の修養」を首腦に刻み置かねばなりませぬ。然るに、記者先輩初め、讀者諸姉の、かねて充分忠告致しましたにも係らず、今又恬として剽竊

文を投じましたのは、前記の諸人（男女不明）です。私の寡聞でも、斯の通りですから、眼界廣き天上界から見たらば、幾何あるか知れませぬ。是等の人々は、「自己品性の修養」などは、念頭に置きませぬて、唯報酬を得やうとするは、明白です。呆れました。勞力に對する報酬なら、必然的ですが、斯る不正な所爲は、神人ともに容しませぬ。又、よしやその當時を僞瞞して自己心中に一時の滿足を感じたとしても、その快感が筆誅せられ後指せらるゝ時の不快に比して、何れですか。苟も目に一丁字ある者は、勿論此の差別位は出來る筈と思はれます。噫、手には爛熳たる樂園の花を指し乍ら、悲しや、足は暗黑の穢土を蹈んで居るとは、何と情無い事ではありませぬか。私が此に斯く開狀を公にするのは、聖き悔悟を希ふ微衷に外なりませぬ、御諒察下さいませ。

（雨評）眞に情無い事に候

◎文論

埼玉　渡邊きく子

世の中にありとしあるもの、いづれかあやあらざらんあやはおのづからのものなり。雲のたなびける、霞のにほへるは、天のあやなり。山のそばたてる、海のたひらなるは、地のあやなり。鳥虫うごめき、こゑのあやをなし、花もみぢさきこぼれて、いろのあやをなし人は大小の事をはかり、功を立て身のあやをなし、或はいさましき勢を振ひ、奇しき策をめぐらして、國のあやをなし、或は高き家門に、金銀を積み貯へして、家のあやをなし、或は妙なる術をさとり、めでたき物を造り出でゝ、世のあやをなしつゝ、すべて此の世にあるもの、みなあやならざるはなし。こゝに、筆をとり文を書きて、あやなす人あり。そのあや、いといみじ、明かなる鏡のえてらさぬものを、細やかにかき出だし、深きさとりもて、はかり難きものを、つばらに書きあらはし、かたきものももろくすべく、長きものも短かくすべし。そのおくがを極むれば、神をも驚かすべく、人をも泣かすべし、千世萬世の後にものこすべく、百里千さとの遠きにも傳へやるべし。そのくしびに妙なる事は、えてそはかりしられね。まことの文は、かくの如きものなり。されば、千人萬人の中に勝れたるものゝ、いきの限りつとめ、いそしますば、よくする事は難かるべし。世のつね人の、のぞみ企つ可き事かは。文かく人は、このことわりをさとりて、善くつとめ、よくいそしむべき事にこそ。

（雨評）論旨はきこえたり。後半の辯のもの足らず力なきををしむ。

新體詩

東京女子高等師範教授尾上文學士選

地

◎希望

愛知縣中島郡豐田村字西溝口平野嘉重方　平野俊子

誘はゞさそへ汝が手に、　さひひゆかゝるわが身かは
サタンよわれにくろがねの、　槌よりかたき希望あり、
危ぶめばこそ恐れあれ、　恐るればこそなやみあれ、
われは恐れじ危ぶまじ、　われに希望のあらむ程。

稍、理に落たれど落筆健雅

人

◎朧夜

金澤市玄藝町壹番丁三　大地波子

朧月夜を我ひとり　逍遥ひ出てし春の野べ
微に聞ゆる笛の音の　あゝ妙なるよその調べ
思はず輿にうち乘りて　音のする方に歩みたり。
今を盛りとさくら花　亂るゝ岡のはなの下
小さき御堂の中よりぞ　確かに音はもれ來なる
神の御遊か朧夜の　花に興ある笛のすさびよ。

神韻、とこしへに盡きず

秀逸

◎あけぼの

越後　内藤ゆき子

とこ美しき天つ神　詩の光を地にしくと
金の矢銀の矢萬條の　亂れまばゆき曙や

◎すみれ

とこやはらかき春姫の　み胸にあれし詩の靈と
地にやさしうも萌えいでて　にほひほのめく花菫

高雅の筆、

◎猪名川

大阪府　しぐれ子

昨日や今日の春雨の　猪名の川嵩增しにけり
岸の柳の絮ながく　水の面にたるゝまで
垂れし柳はたえす間に　流るゝ水になびけども

水は無心にゆられつゝ　川下遠く流れ行く

一掬無限の詩情を含む

◎知るや君　　和泉　天堀美浪子

輝き亘る日の影に、
　向へる花を見ずや君
日の東に出でませば、
　花は東に向ふなり
日のまた西に行きませば
　花また西に送るなり
あゝ日の神よ日廻りの
　花の心を知るやいな

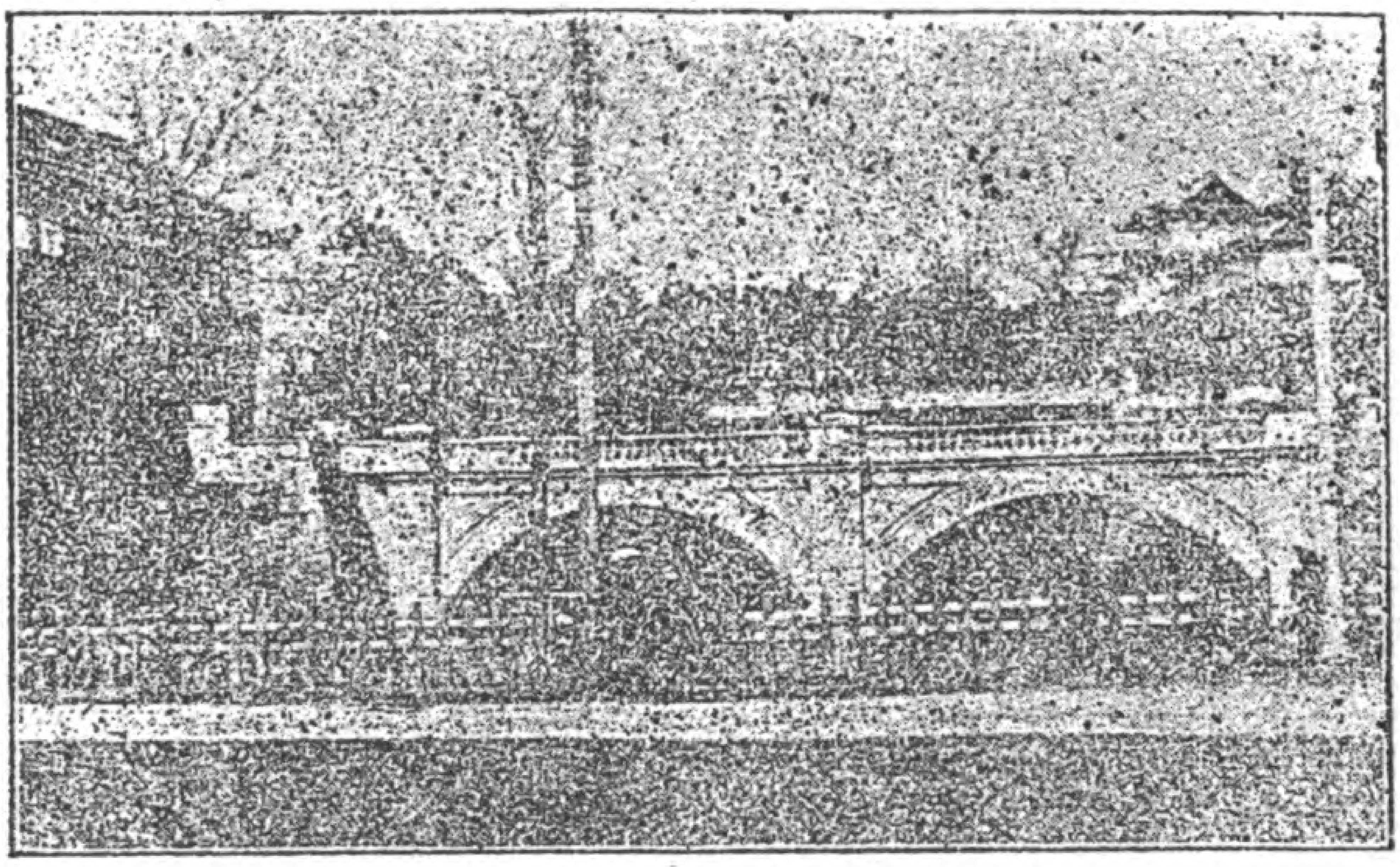
輝きわたる我が君を
　慕へる我れを知るや君
君樂めば我れは笑み
　君悲しめば我は泣く
あゝ我が君よわがこふる、
　深き思ひを知るやいな

蓋し西詩の面影あり

◎印旛沼の暮春　千葉縣　新竹女史

くれなゐ匂ふ夕ばえの、　空ゆく雲をうつし見て
流れもいでず波もなく、　とこ平和の湖の面
朝五彩の花うけて、　夕に沈む波の色
かへぬ劫初の水底に、　藏しゝ春は幾何ぞ
山脈影をたゞよわす、　岸べの彩波うすらけば
浪は音なきねをたてゝ、　鐘や湖心の底になる
夢かさゝやく明星の、　啓示の光かゞやけば
きくは浮世のわれながら、　浪に奇しきひゞきあり
夢よ現よこゝだくの、　跡なき霞覆ひては
水心なく影失せて、　殘るはわれと峰の松影

造句斬新、一家の風を成す



宮城二重橋

◎曉の光　河内　よし子女

東の空にたゞよへる、　靄の裳を曳きまして、
みけしの光明美くしく、　たち出で給ふ曉の神。
夜すがら露をくだしけむ、　聖き啓示のあか星は、
雲井や高きせばしまの、　碧き帷りに影きえぬ。

わきくる雲の色榮えて、　黄や紫になびきつゝ、
開けさてもる清き氣に、　夢より覺めぬ萬象ぼ。
贊美の歌を口ずさみ、　勇む小鳥にさそはれて、
彩仰祟みる人の子の、　美妙の思ひそもいかに。
看ずや綠の匂ひ濃き、　樹々に吹きいる曉風の、
葉ずゑを搖ぐその上に、　神秘の影の灰めくを。
白き花の扉ほころべる、　香に疑りなせるかず／＼の
露さゝやきて零れゆく、　そこ新らしき生命あり。
あゝ平和の曉の色、　幸よ希望よ歡喜よ、
それのめぐみを垂れ給ふ、　自然のたくみぞ尊とけれ。

新韻、掬すべく味ふべし、何等の才筆、端睨すべからず

○白ゆり

和歌山　小川敏代

浮世の塵を遠ざかる、　四邊靜けき谷川に、
己が姿をうつしつゝ、　咲く白ゆりや岩の上に、
深き香を馨らせて、

可憐の態、題意にかなふ

○枕の松風

鎌倉　時子

小田原なる別莊に滯在中の兄妹をおもひやりて、

小雨そぼふる春の夜半　軒端に落つる玉水の
音も靜けきまどのうち　歌に繪筆に餘念なく
ふくるを知らでおはすらん　いとこのしげに兄妹は。

雨の名殘りの露の玉　ゆだ消えやらぬ松林
落ちくる雫はらひつゝ　くまでも川手にかきわけて
松露ほりやおはすらん　いとたのしげに兄妹は。

空はかすみにこめられて　沖邊はるかに白帆ゆく
大海原をながめつゝ　そゞろありきの濱づたひ
あかすやいます此夕べ　いとたのしげに兄妹は。

夕日の影のうつくしく　紫匂ふ田の面に
色香をめでゝ花すみれ　こゝにかしこにつみためて
家つとにもと思すらめ　いとたのしげに兄妹は。

このうるはしき兄妹を　むねにゑがきて今こゝに
一人ほゝゑむねやのうち　いつしか夜は更けゆきて
松風おつる枕邊に　のこる火影の末あはき。

律を成せる消息、受けし人は萬石を感謝を捧げつらむ

○里の入日

常陸　かつら女史

白梅ちりて緋桃さく　十戸の小村たそがれて
青麥原のあひくに　黄金の浪はよせよする。
彼方此方の賤か屋に　夕食の烟立ちのぼり
樂しき團欒を包みたる　平和の靄のいと厚し。

黄金の浪の寄るところ
限りある世に限なりき
平和靄の閉つところ
詩の趣きは此處かとぞ。

和氣洋々、溢るゝが如き田園趣味

○雛祭

京都　岩村芙蓉子

飾れる雛の棚のもと、
　前に供へし草の餅
取つては崩すをさな子は、
　今日の祝の雛の主
天使の如き顔はせや、
　罪なき所作に打興じ
老も若きもまどゐして、
　酌みかわしぬる桃の酒
笑ひどよめくもろ聲は、
　徴妙の樂と聞ゆなれ
いともたのしき此一間
　うつす偶九重の
春面白き雛まつり、
　白桃緋桃八重櫻
集ふ少女の春衣の、
　花の姿ぞ麗はしき。

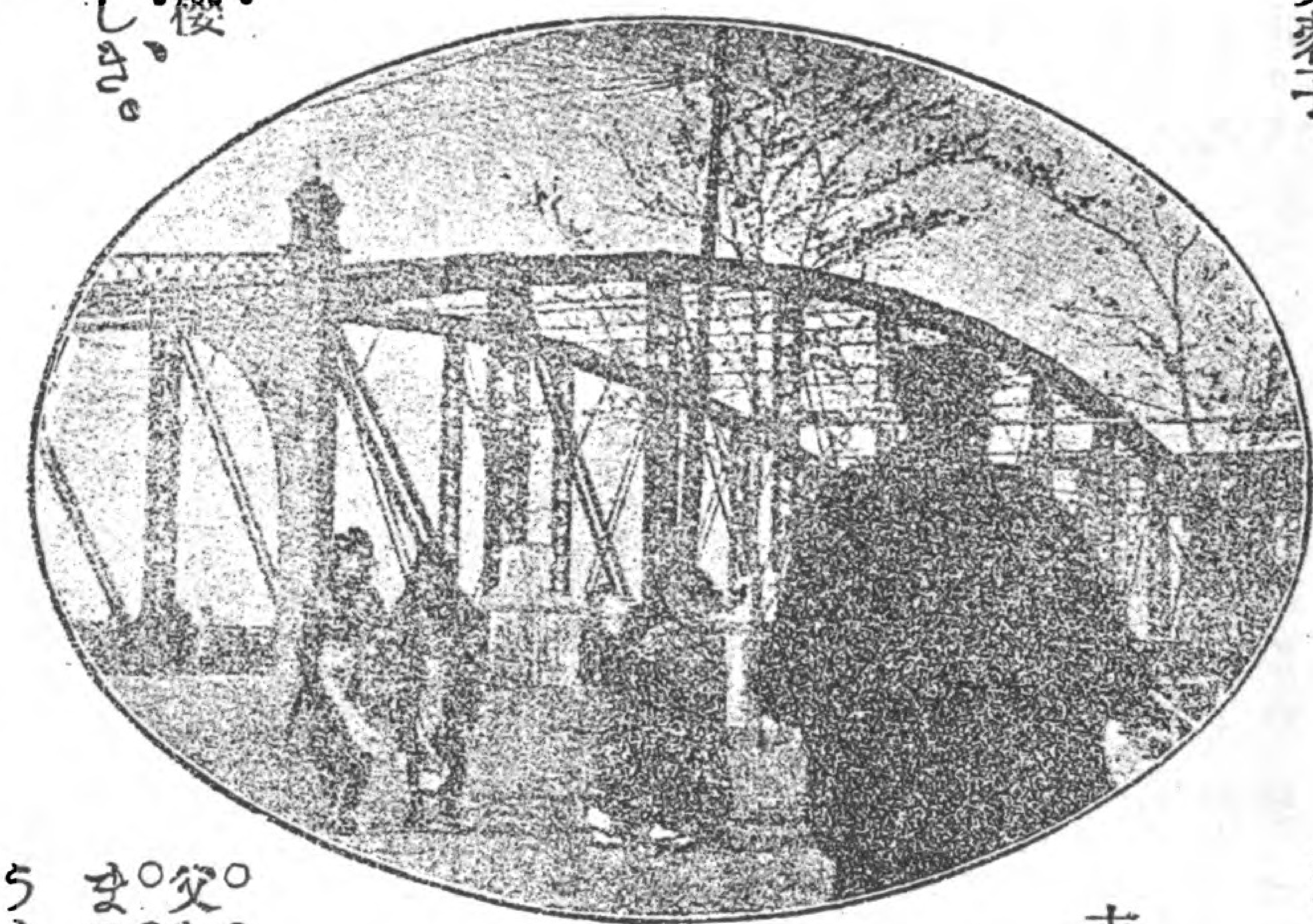
詩も亦美くし

○花菖蒲

横濱　小峰その子

塵の此世のさゞやきか、
濁水の中を美しく、
葉並亂れずそが上に、
蕾みしなれよ花菖蒲。
雨の一日の御惠を、
翌朝の色香にほの見せて、
憂ひの子等の振袖と、
競ふて咲くや花菖蒲。
末は、榮ある美の國の、
杖と生れし稚男の、
母の乳房をさぐるとき、
太刀とやならん花菖蒲

新しからんと努めし痕見ゆ、たのもしき事なり



新設兩國橋

○まことの愛

をみなへし

恩愛の情、
哺育の惠、
我は泣きぬ、
思ひ出ては。
ちゝよ母よ、
とはに若かれ、
我はいのる、
あさに暮に。
父をおきて、
母をおきて、
まことの愛を、
誰にかもとめむ。
うらぶれて、
果なき世に、
ともは泣きぬ、
悶えもだえて。
吹きすさむ、
戀の魔かぜ、

あはれ親しき、友はたをれぬ。
父をおきて、母をおきて、
まことの愛を、たれにかもとめむ。

質にまことの愛、必ずしも戀と言はず

◎朧月夜　　越後　あさひ

牛追ふ童が笛の音も、
昇る月影うちかすみ、
まだ浦若き乙女子は、
拂ひもやらずうつぶきて、
月の光にいつくしと、

いつしか絶へて山の端を、
夜の神眠る柳かげ、
顔をかすむるほつれげを、
何思ふらんなりなりは、
玉岸見つゝひとり泣く。

◎かりがね　　筑前　楢崎はる子

菊より落つる花びらは
時雨に染むる紅葉は
星はあしたに冷やかに
風にしたがふ桐の葉の
み空の海にうらぶれの

汝がついばむにまかせたり
汝がかざすにまかせたり
露は夕にいと白し
枝に分かれて散る如く
天津雁金たちかへりなく

◎蝶　　能登　池野いさみ子

菫の花の紫は、
小草に結ぶ白露は、
紅きは燃ゆる戀と咲き、
朝は風の暖く、
まひとぶ姿はれやかに、
優しき神の夢のせて、

なれがくつけにまかすなり、
汝が啄むにまかすなり。
白きは聖き詩と咲く、
夕は十重に霞むなり。
化粧の羽根を片々と、
永久にやすけく現れ蝶々。

◎菫　　伊豫　佐野こずえ

黄金の袂ふりかざし
舞ひ行く蝶の羽衣を
せまき葉かげに匂ひつゝ

花より花にあこがれて
呼び止むすべもあらざるか
春は來つれどこゝのみは

れむれる蝶もなかりけり
深き思ひにしづめるか

すみれの花は長しへに
いつ來て見てもうなだれて。

◎春の川　　霞渓女史

岸に彳む乙女子が
蝴蝶は輕く舞ひ立ちて
流れの水は嬉しげに
花を靜にさゝげつつ

蝴蝶になげしつぼ菫
菫は水に落ちにけり
二たび三たび囁きて
何處ともなく流れ行く

◎春宵思　　麹町　重田春子

月もおぼろの花盛り、
門を流るゝさゝ川の、
惱みの小胸をとおさへ、
かをる霞の薄絹に、
またゝく星の光りにも、
袂に聖き愛の言、
運命に迷ふ人の子の、
おぼろの月を仰ぎつゝ、
春の小悠に身をもたせ、
おぼろ流るゝいさゝ川、
うれひの岸に泣く我を、
ゆるき流れに言傳てぬ。
愛に泣く手に今流す、
さゝふれ浮ぶ水の上、

風もそゞろの春の宵、
岸の小草に足投げて、
神に『救助』の歌を誦す。
つゝむ『啓示』は深きぞと、
思ひ亂るゝ弱き子の、
さて文がらをいかにせん。
闇を照らすの影うすき、
もろ手をくみて惡多き、
君泣きまさん此の夕。
そのさゝやきはひくけれど、
慰むるべき力ある、
やがては過ぎん君が門、
花の一ひら打ちのせし、
言問ひ見ませ君よ君。

◎春の夕　　鳥取　上山千重子

入相つぐる、鐘の聲、
男蝶女蝶の、影うせて、
嗚呼平和なる、この夕。
一群二むれ、歸り來る、
麥笛吹いて、興多く、

花より花に、ひゞく時、
菜の花三里、暮のいろ、
やがて牛追ふ、わらんべの、
菅笠斜め、夕月や、
これや平和の春の歌。

◎野遊び　　茨城　石崎秀子

よろこびさけぶ弟を

ともない出て長閑なる

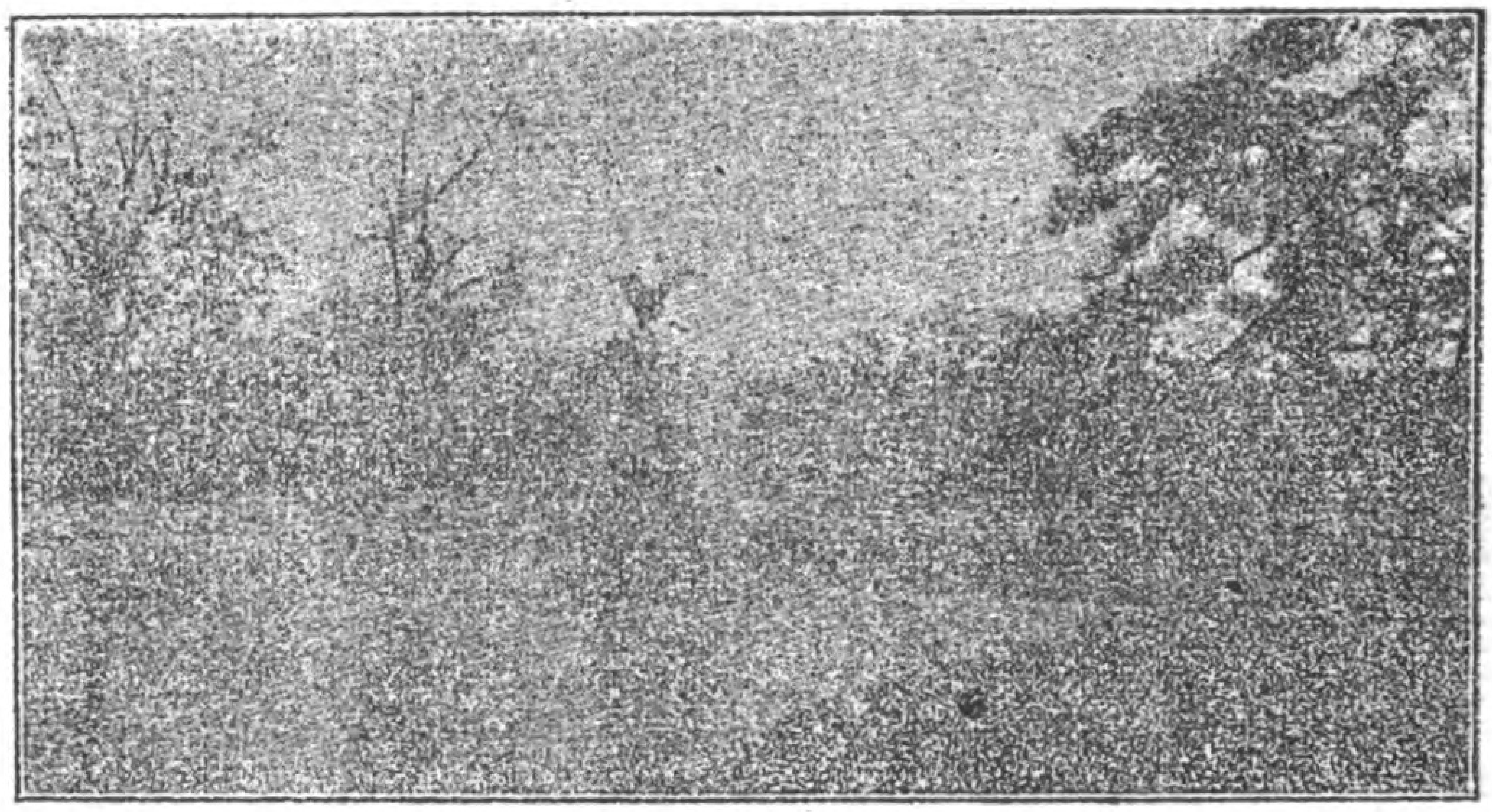
春の野道をたどり行く　ゆく／＼花は多くして
なく鶯の聲きよし　なり／＼たてる青柳は
なびく煙りにさもにたり　我等は手を取りあゆみつゝ
あるは菫の花を摘み　あるはこてふを追ひかけて

柳のこかげ花のもと　つたひ／＼て我むれは
いつか野川のほとりなる　はしのもとまでたとり來ぬ
こゝの景色の美しさ　たとへんものもなかりけり
花の中行く川水は　天のかはらの心地して
あはれやさしき弟は　はしのたもとにたゝずみて
たゞ花にのみ見えりたり　あはれやさしき此姿
又も我等はあゆみ行く　花はます／＼多くして
野邊はいよ／＼長閑なり　いづくにまてかわけ行かん

麹町　榊原千重子

◎自然

かゞやき初むる天つ星　影二つ三つあらはれぬ
塵のこの世を照すべく　汚れし人のこゝろにも
尚き希望をあたふべく　今ぞ下界をてらしぬる
あゝなづかしの星の影　あゝ靜なる夜のさまや
時に微風のひとそよぎ　ひゞく微妙のことの聲
軒の松が枝ほしてりて　其一こゑは此ここにあり



日比谷公園噴水池

◎牧場の春

備前　松本茂登子

春雨一たび注ぎては　牧場に青き草萠えて
三寸高しつく／＼し。　甘き柔の草に飽き
瞳かはゆき小羊の
春の日浴びて眠るかな

◎白百合

京都　花菫子

おとろかもとに生るれど　淺茅が原に育てども
浮世の風にしみもせて　淸くも咲ける白百合の花
杣人知らぬ山中に　おぼつかなくも生ひ出て
高き香をくもらせ　德と操を保ちつゝ
見ろ人もなき盛衰を　恨みだにせぬ百合の花
山に咲きては山にはて　園に咲きては園にはて
人の愛づとて誇りなく　淸く此世を送りては
又と言葉の春に入る　天津乙女の面影に
似たるもあるか白百合の花

◎子守うた

羽後　鈴木しゅん

妾の坊やはれんねして　どんなよい夢見るのやら
只すや／＼と細息の　妾の脊中にかすかなる
妾の坊やは今おきて　どんなゆめをば見たのやら
あなたこなたを見まはして　母あよ母あよと泣き出しぬ

◎友に送る

備後　伊藤はな子

彌生の春の末つかた　盡きぬ名殘を惜しみつゝ
別れてこゝに二年の　月日は早も暮れにけり
たとへば君は美くしき　春の女神の寵享けて
紅に匂ふ文園に　樂しく遊ぶ稚兒のごと
我れは塵世の果敢なの子　文の園生の花も見ず
たゞ田園を友として　無爲に死に入る果敢なさよ

◎父の墓

秋田　浦井松子

嗚呼したはしや父君よ　別れし時はたらちねの

その面影も露しらで
しきびの露に袖ぬれて
居まし處と旋りあふ
來しかひもなき苔衣
うすれかゝれる奥つきの
眠りますらん夢ならで
風に亂れて影もなく
思ひはいとゞ増す鏡
無常を告ぐる山寺の
峯の松風音すごし

◎櫻花

滿洲の野に露營して、
結び絆れたる我が友に、
封じ込めたる櫻花、
幾海山を隔てたる、
やさしき君の手に觸れむ、
色は變りそ櫻花、
歌にも詩にも汝れが身を、
幾年月を磨の野に、
君凱旋の其の日まで、

◎追懷

別れし時はしかすがに、
今ははかなき思出を、
春は暮れゆく大利根の、
打ちつれかへる雁がねや、
無終の旅の人の子が、
袂すれあふかいなでの、
さはれ一夜のさむしろに、
さびしさかこつ吾世にも、
詩集に挿む一ひらの、
虹一時の七彩も、

父の御影をしたふ身は
乾くいとまもなきたまの
深き小路をふみ別けて
置れし年に文字さへ
土の碑に只一人
手向の花の白蓮も
あゝしたはしの父君と
涙の雨に袖ぬれて
鐘の音幽かにひゞきつゝ

福岡　池永喜代子

春の夢さへ砲の音に
内地の春を知らせむと
嗚呼汝れが身の奬まし
戰の庭に旅立て
よしや日數は積るとも
大和武夫の心ぞと
例へに引かぬ人やある
御國のために出征ませし
色は變りそ櫻花

武州　武笠すみれ子

名殘の袖も絞りきを、
何にか寄せむすべもがな。
川邊にひとりさすらへば、
影は雲井に遠くして。
百年すぎぬ世の宿に、
えにしをなどてかくなやむ。
ひめたる胸の鍵とけば、
興は湧きぬと夢みしを。
花にも春は戀しきに、
とはに歸消ゆべしや。

思ひに堪へて眺めやる、
かの夕雲に身をのせて、

◎秘言

低く囁やく里川の、
秘めし思ひを忍ぶれば、
落花亂るゝ野にたちて、
小さき胸にうつしては、
あゝ闇の世をさすらひて、
空行く鳥にいくたびか、
されどもさめぬ夢の影、
冷たき思ひ知るまでは、

◎相思

笛とり出でゝ息をこむるも、
岩にうつなみ松をふくかぜ、
千々に思ひのみだるゝに、
青葉ゆかしく只就なみの、
うしほあびにしなつのやすみは、
笛に相思の音はこもれども、

◎野路の春雨

春吹く風にさそはれて、
紫白のうすき濃き、
やさしき姿美はしく、
乙女はいとゞ樂しげに、
摘みて餘念もなきまゝに、
やがて霞は立ちまさり、
つみし菫に袖濡へば、
翅拂つて立ち去りぬ、

◎磯邊の思ひ

日ねもすの思ひに耽り、
松の彈く琴のしらべを、

溟渤はるか六百里、
君がほとりに飛ばなんか。

大阪　露香女史

ゆるき流れにたゝづみて、
あゝ我心くしきかな。
ふと見とめたる魔の影を、
いつまで戀ゆる心かや。
惡魔の影を追ひし時、
希望の啓示を聞にしよ。
黒髮霜と化し果てゝ、
胸の魔影や消ゆるまじ。

岐阜　傍島成子

賴む小琴の調べは絶えて、
あはれ夕日は西に落ちたり、
磯の高殿、我れきて見れば、
音のみなり昨日も今日も。
はやな三年のむかしとすぎぬ。
戀しの君は如何にせしやな。

福岡　片岡じつ

かをる霞を辿りつゝ、
菫咲く野に出でにけり、
心靜にすみれつむ、
いとも嬉しく微笑めり、
日は西山にかたむきて、
しと／＼と降る野路の春雨、
戯れゐたる白き蝶、
乙女は惜しと見送りぬ、

德島　久保串子

松ならぶ磯邊さまよひ、
友として思ひに沈む。

澄み渡る海のかゞみは、
さゝ蜑のよする汀は、
漁子の船唄きけば、
砂洗ふ波音たかく〳〵、
今にして海面ながめ、
われは斯く小さき望に、

○水とならばや

水とならばやさゝ川の、
やさしきかげを、やどすべく、
水とならばやさゝ川の、
自然の楽を、かなづべく、
水とならばやさゝ川の、
少女の脛を、洗ふべく、
水とならばやさゝ川の、
くしき白沙と湊るべく、

○落花

うすき絹もてつゝみしと、
光かすけく眺むれば、
ひら〳〵袖をはらふなり、
をしむ心のゝるがごと。

○菫のために

若草萌ゆる河堤、
草苅る童心せよ、
愴き紫よと思へるに、
か弱き花は觸れて落ちなん、

○流所感

晨に花の香をうかべ、
行きてかへらぬさゝ川や、
夫にも似たる身なればか、
清き流の源は、

眉山の蔭をうかべつゝ、
とことはに玉藻ぞ匂ふ。
『我は獵師となつたるからは』
楫を取る音よかすめり。
おもはゆき心地こそすれ、
うつゝ世をなどて泣きけむ。

佐世保　横山柳子

春は岸邊の、つぼすみれ、
夏は滴たるみとりかげ、
秋は田毎にたゞよひて、
冬は谷間の岩かげに、
みづとならばや、

靜岡市　櫻子

見る春の夜のおぼろ月、
風なきにちる櫻花、
一片毎にもろ人の、

河内　松元みどり

そこに一むれ菫咲く、
汝か飼ふ羊踏むさへも、
鋭き鎌を觸れしめな、

神奈川　中村清子

夕に月のかげやとし、
水のこしかた行末の、
ながめて水に惑あり、
情も繋きもりなれや、

したゞりいてし昨日より、
明日あだつみに注ぎなば、

○春野

雲雀

春をしめます佐保姫の、
かすみの衣重ねきて、
雲雀の歌ものどかなり。

梅の月

愛の女神のおもかげか、
なかばほゝゑむ梅が枝に、
桃源の春ににたるかな。

野邊の夕暮

流れ靜けき里川に、
靜けき空にたなびきて、
そひらに夕日落ちにけり。

○青簾

風は涼しくたれかれて、
こゝにかしこに似た家の、
青き簾を打たれて、
灯ともすかけに見かへれば、

○行く春

其の暖き春風の
榮華の夢に遊びしを
其長閑なる春風の
平和唱ひし鶯も
其清らけき春風の
袖ふりかへす少女子も

今日もことなく過ぎしかど、
よるべなぎさに涙とくだけん、

下野　秋山のぶ子

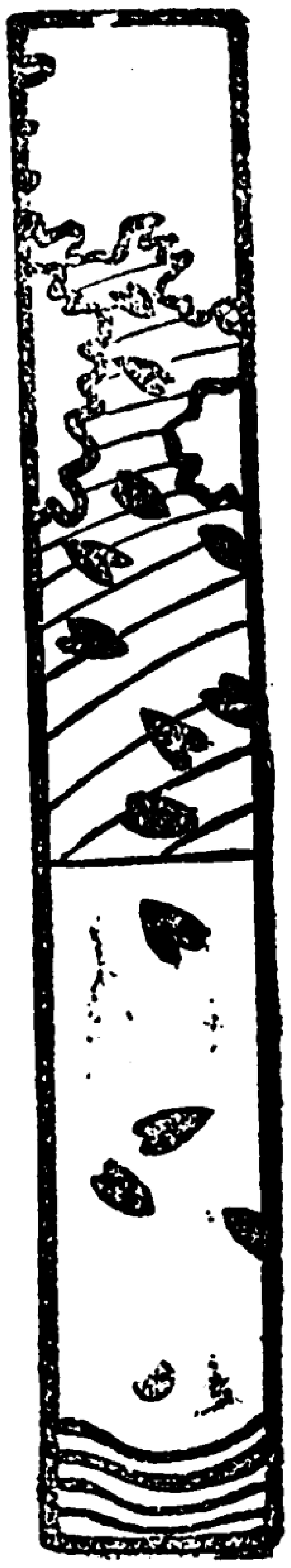
大御心のひろければ、
神の御こゑをつたふなる、
平和の神のたまものか、
おぼろに匂ふ月かげは、
映るは天の彩雲が、
馬ひき歸るうない子の、

武藏　伊東仲子

川端辿りわけゆくは、
多く並べるはし二階、
三味や太皷の賑はひを、
若き女の影ばかり。

越中國　野山菊子

すみれの床にねむりつゝ
胡蝶やあはれ今いづこ
送る梅が香さえ〴〵と
今は老いたり其の聲も
櫻花吹く岡の上に
世の荒波にやがて今



敍事文

日本女子大學教授盟井文學士選

天

○落花片々

三河西鴨郡石ヶ瀬
澤田忠三郎方　澤田霞溪

光鈍き春の夕日、紫匂ふ山の眉に隱れて、夕映美くしう、雲の褥を紅に彩りつゝ、家路急ぐ牛飼童の、手綱は角にあづけしまゝ、背上吹きしきる、草笛の音、細う幽に響きて、夜の帷は漸々に擴ごり行けり。花に酒に狂ひ舞へる人の世に、獨り山寺の夕の寂しう暮れて行くよ。荒れ朽ちにし古寺の、訪ふ人もなき庭の離に年老りにし八重櫻の一株、何時の世誰れの手植なりけん、春の女神の情にも洩れて、雪か霞か、げに麗はしう咲き出でたるよ。しづ心なく散りかゝる花の下には年若き雛僧一人、箒もて停立むなむめり。

幽につつめる薄絹の雲のとぼそに、大粒なる新星五つ六つ、神々しくまたたきそめぬ。

さても、清灑に、はた幽美なる春の夕を、如何なる憂の若人か、花の木蔭に泣きつくすなる。

本堂には、早夕べの勤行初まりぬ、ほの暗き燈明の灯影、障子をもれて、枯蓮に閉ぢし池の面に落ちつ、ボクボクと響く木魚の音に、交る讀經の聲低う、いたく皺枯れて勢なきは、あはれ經讀む僧の老いたるか。

鐘一ッなりぬ。

幽かなる聲は、如何なる響を胸に傳へしぞ。其の時よ、雛僧の涙はい佛いやまさりぬる。

聞けば、雛僧は孤子なりとか、竹馬遊びに餘念なき、まだ裏若き此の年頃を、殊勝にも佛の道を行ひすまして、あらぬ行ひに無慘の死を遂けし父母の追善に怠りなしとかや。

さあれ、浮世の浪知らぬ片山里にも、親に離れし孤子の、如何に旦夕に心を碎くならむ、まして今宵、此の寂しき夕をや。

本堂の木魚の音、ッと止みて、燈明の灯は、夕と消えぬ、されど、雛僧の身は動かざりき。孤影寂しう、ほの暗き樹下にたゝずみて、雪の如き落花を仰げる、その眞珠の瞳よりあふれて、蒼白き頰を走る涙の一雫の

げに美くしき星の露にや似たる。
また一滴、そは音なう土に砕けぬ。

『これ、良善、又しても泣き居るかよ、』そは師の僧の聲なりき。今し、夕べの勤行卒へて、椽先に立ち出でし、鬚も白く髯も長き、墨染の衣きたる、六十路あまりの老僧一人ゆう〳〵と花の梢をさし上る月を仰ぎしが、書院の柱に脊をもたせ眼を閉ぢぬ。

『ハイ……

と後は得言はずに、唇細かくふるへぬ、ハラ〳〵とこぼれしは、梢の露か。

老僧は、つと面をそむけぬ。ほの白き月の影は、六十餘年の年頃の友の、深く彫める額の年浪を照らしぬ。

忍び音細き雛僧のほとり、心ありてか、梢の花の幾片こぼれ來て、青褪めし頬を掠めて、色あせし墨染の袖に散り行く。



み空の月のいと高きよ。

（雨評）綿密の錬、苦心の文、敬すべし。天とす。

地

○春の夕暮

大分縣中津京町 宮田秋子

『横たふ木の根、つまづく岩根。山路はけしや。はやしと云ひて越えずはいかで、里には出でん。』

武ちやん、今日はほんとに面白かつたね。

でも、少々むつかしかつたよ。

『荒浪高し。潮風早し。海路の苦し。苦しと云ひて、越えずばいかで、港に入らん。』

長い春の日のお日樣は、いつか山の端に、半ば顔を出してゐる。

暮れ近くなつたので、美ちやんと武ちやんは、今日學

校で習つた歌を唄ひつゝ、旗を片手に、家へとたどるのである。

後より、脚絆に草鞋掛の人、風呂敷を肩にして、道を尋ねたので、武ちやんは、紅葉のやうな愛らしい手で西の方をさしたが、幾度も禮いうて、旅人は遠い〳〵棚引いた霞の中に消えてしまつた。暮色段々にせまつて、鳥は塒に歸り、農夫は鍬を肩にして、山家に歸り去つた。田家より烟も立ち始めた。

山寺の鐘は盛んに鳴り渡つてゐる。

美ちやん、急がう。

愛らしき聲は、武ちやんが發した。次いて、二人は急ぎだした。

「學びの道も辛苦は多し、辛苦にたへて勉强せずば、學業いかで、成る時あらん。」

夕暮の風はさつと吹き來つて、二人のもつて居る旗をひるがへし去つた。

（雨評）讀み去つて、誠に愛らしく面白く感じ申して候。地とす。

人

○春の一日

大阪東區東高津南ノ町　田中常子

流れ十里の堤、暗き所は柳の緑なり。明かなる所は、山櫻今を盛りと咲き亂れたるなり。げに長閑なる春の日とて、帽章とり〳〵なる學生らが、ボートいく十となく競ひ漕ぎ出でぬ。瑠璃の如き、湖の如き川面、さすかに白波さわきて、かのやさしく、おとなしく浮きて流るゝ花片、ただ、かより、かくより、より集ひつゝ、あるは高く、あるは低くなりて流れ行くなり。折りしも、川風や吹きし、靜けき櫻の梢より、花びら、さながら吹雪の如く、蝶のむれ飛ぶが如く、横ざまにボートの中に、撰手の小手の上に、白波の中に、ひら〳〵と狂ひ散る樣、げに繪にも曾て見ざる光景、ただ恍惚として見惚るゝに、春の女神のもてなし、いづくまでも妙に巧みに、いつのまに流れ來れる筏師の、しづかに棹さして、見れば、紅き花片、白き花片、あまた筏の上に散り亂れたり。噫、水上にも桃や櫻の咲く所あるらむか。「大井川流れを下る筏師も長閑に見ゆる花の下蔭」と歌ひし歌の其まゝの光景、今こゝにゑがかれて、一層の感にうたれ、心はぼんやりと、いづ方にか飛び去りぬ。折りから、美妙の聲、わが心を持ち來りたらむが如く、天空より傳りぬ。うろたへつ、見返れば、打ち揃ひたる、ふり分け髮の女の子ら三四人

天女の如く、やさしげなる春の歌、ヴワイオリンの音の如き聲色もて、歌ひつゝ、手をとり合ひて、かの櫻ちる芝生の堤の方へと廻るなりけり。堤の後手は、ひろき〳〵麥田にして、今尺餘に生ひのび、畦道には、れんげ草花莚の如く咲きみちたり。雲雀の歌は、霞の裡に、いと幽かに、又朗かに聞えぬ。目に入るもの、都べて繪なり。耳に聞ゆるもの、なべて歌なり。あゝ、春の日のいかに人の心を慰め洗ふよ。いかに人の命をのぶるよ。わか心、春の心となりぬ。わが命、十年をのびぬ。

（雨評）うるはしき春の一日に候かな。人とす。

秀逸

○友の墓を訪ふ

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

瓶にさし殘つた白椿に、極遲咲きの紅梅を取り添へて、友のおくつきにと、今にも降り出しさうな空合を、洋傘にあやぶみつゝ、來たのであつた。さて、我が家より、僅か三丁にたるや足らずのこゝの御寺、赤門をくゞりて、先づ門番の寺男に阿迦擔桶を借りた、そして蛙が三つ四つおよいでゐる古井戸て、危く水を汲だのであつた。ふと顔を打つ一粒の雨さてはと空を仰げば、薄墨の一刷毛、西より東、順次廣かつて、果てはたゞボーと黑ずんでゐる。堂の後ろで、頻りに雨蛙の聲がしてゐた。淋しい墓場道を、左右に迂廻し、新しい小さな墓の前に着いた。アゝ、是



熊谷直彦君筆

れが、常子さまの花の姿を埋めた紀念の石片・と思へば、うたゝ我が頬に熱い涕が數行下るを、禁じ得なかつた。やがて、あたりをきれいに掃除して、花筒に携へた花をば、配合よくさしはさみ、閼迦の水を手向けさてぬかつきたる我れを、マー常子さんはなんと御覽じたろー。思へば〳〵、三年の昔、寄宿舍の窓にもたれつゝ、互に語りつゞけた希望は、それよ、星のごと月のごと、前途にかゞやきて居たのであつた。アヽ、それを、今は……今は……。雨は糸のやうに降り出した、風も吹きはじめた。そして、バサリ〳〵と藪の笹が、ものすごい音をたてゝゐる。折りから、さきに手向けたる椿一りん、バタリと我が足もとに落ちた。

（雨評）淋しげなる悲しげなる情も最も見えたり。唯だ結末の今少しく工夫の足らぬををしむ。

○里の朝

伊豫國　土居優香

四隣寂として聲なく、見下す村は、霞の中に深くとぢられて、家々の夢や、今暖なり。かなたの野中のひともと柳、萠えぞめし緑の糸の、今朝は淡くけぶりて、下を流るゝせゝらぎと、何をかささやくらん、やさしげに水の面に袖をなびかしつ。折しも、山寺の鐘の音、かすみの奥より洩れ來て、餘韻は遠くかすかに、野末の菜の花畑に、消ゆると見れば、やがて東の山の端、紅彩をはなち、うららかなる春の日はいでぬ、立ちこめし霞は、くれなゐ深く、一重〳〵と消え行きて、一本やなぎに、名殘の薄くからめるよ。星の家々に、鷄鳴きて、雨戸くる音、釣瓶はねる音、やうやく忙しくなり行けば、をちこちの軒に朝飼の煙細う……白う……、棚引き渡る。ねむげなる牛の聲、せはしげなる馬のいなゝき、をちこちに聞えて、かなたの森蔭、こなたの野に、畑かぶりせし人の動き出づれば、菜の花かげに眠りゐし小蝶も、夢さめて翅かるげに二つ三つ。かくて今日も一日を舞ひに暮らさんとす。

（雨評）新しきところなきををしむ。

○夕暮の堤

小石川　翠

今しも、夕陽は待乳山の杜に入らんとして、名殘淡く大川の水面に漂ひ、塒に急く晩鳥の二三羽、空低く哀に鳴き渡る、此處夕暮の黑堤。

一頻りは多くの人を醉はせたる滿地の櫻花も、あはれ昨日の嵐に梢を去つて、殘る若葉に名殘を留めつ。今、大きなる一本の櫻樹の下に佇み、深き物思ひに沈んで此の暮れ行く空を仰ぎ居たりし娘は、ホツト嘆息を漏しぬ。

想へば、丁度去年の今頃、櫻花も早や散り失せて、木の葉隱れに郭公の泣く頃なりし、兄上と只二人、明日は征途に上らるゝと云ふ前の日の夕、オヽ、此の樹蔭こそ、其の時二人が盡きせぬ思ひに、夜の更くるも知らず語りあかしゝ塲所なるよ。我出征の後は、未だ年端もゆかぬそなたのみにて、老いたる母の口にこそは遉がに男々しく宣へど、さぞや淋しく思召さん、尙又蒲柳の身にしあれば、我れに代り、一入心して勞り參らせよ。と兄上の仰せられしお言葉の、今もなほ耳に殘れと、アヽ、今その母は散る花と共に敢なくも消え果てゝ、事へまつる人もなし。定めて今頃兄上のその計に接し、廣き滿洲の荒野の奥に、征衣の袖を絞り給へるならん。死ぬる際に、兄上の名を繰り返し〳〵呼ばれしことをきゝまさば、如何ばかり嘆き悲み給はん。されど、人の命數は定めあるものにて、いかに惜みたりとて、散りたる花は復咲くべき時もあれど、一度逝きたる人の再びかへるべくもなければ、亡きあとを弔ふこそ寧ろ亡き人への心盡しかと思ひ斷念たれば、兄上も徒らに悲しむ事なく、天晴の御功名なされ、冥土の母上樣をお慰めなさるゝ樣……。

娘は、はふり落つる涙の顏を上げ、あらぬ方を眺むるなり。折柄、そよぐ微風は、葦の葉末を搖つて、川面を渡り、ほつれし鬢の毛を、なよ〳〵と靡かしぬ。日は全く落ちて、待乳山より一帶の向岸は、夕靄の中におぼろにかすみ、遠く微かに消え行く艫聲と、亦一入の哀れを添へ、春の夜の墨堤いと靜寂なり。

（兩評）今一入の苦心を待つ文なり。

○花月の夜

福岡縣　中村貞子

朧に霞む春の月は、今し庭の櫻の梢にかゝれり。薄衣もて包まれたらん如き空には、星影夢よりも淡く、木々の梢は、月光を浴びて、地上に影を薄墨色に描きつ。よべの雨に稍色あせし櫻は、白雲團々たるが如く、銀の如く光り、又は綿の如く和かに、あるかなきかの春の夜風に誘はれて、ほのかに得ならぬ香の、打薫りくる、いとおかし。

たが家にすさぶ横笛にかあらん、朗かなる音の響き渡りぬ。いと妙に、ゆかしさいはん方なく、月は朧なれども、心は淸くすみ渡りぬ。

咲き匂ふ花の梢に、月更けて、
笛の音さゆる、春の朧夜。

…………

夜更くるまゝに、笛の音もいつしかたえて、今はた天に聲なく、地に音なし。折りから、霞をもれくる遠山寺の鐘の音一つ。又續く二つ。一しきりふる花吹雪。

（雨評）文は整ひたれど、新しきふしなく、且つもの足らぬををしむ。

○あはれなるもの

神奈川縣　小野雪枝女史

朝まだきより鈴の音に、母のあたゝかき懐に乳房手まさぐりて眠むる子供の夢さまして、家ごとの新聞函に一葉づゝなげいれゆく幼き新聞賣。唖。かたひ。女の辻車ひきたる。いとあはれなり。俥挽くをのこ、晝夜轅を握りて足を空に走らせ、辛くして得たるあしは、高利貸に奪はれ、米屋に取られ、妻子をだに安く養ふことを得ぬ、いとあはれなり。渡守、ほそき棹をたよりにして飛鳥川の淵瀬かはりやすき浮世をわたる、いとあはれなり。盲、花の色、錦の綾、美き繪、妙なる景色、皆生れながらにして知らぬなり。さても世を過すらんよと、目あきたる人はおぼゆるを、まいて、其身はいかならん、雨の夜も、風の夜も、たゞ杖一本を柱にて、危く立ちよろぼひつゝ、吹きならす笛竹の、あなあはれともきく人やなかるらし、呼ぶ聲もなくて更け渡れば、つぶやきつゝかへるを、大路の犬のこと〱しうほえたる、いかにわびしからんとあはれなり。棄子またあはれなり。ふすま重ねても寒き霜夜に、人の軒につゞれの衣一枚まとひて泣き居る、あはれいとほしの子や、おのが母の面影をも知らず、見る人たれかれのわかちなく親と思ふめり。されど、其子をすてし親こそ、子ゆゑの闇路にまよひけんと思へば、また猶あはれなり。

遠寺の鐘の音。春ともいはて一夜のあらしに見所なくなりたる庭櫻。夏のくれがたたえ〲になく蜩。秋近き螢のかげ。いとあはれなり。

（雨評）あはれなる者。同感と申すより外に取り立てゝ申すべき事候はず候。

○歌のさま〲

紀伊　木村秀子

一　床しさうな歌

「天に進み行く、旅路を導く、主の手にひかれて……」小暗い墓地から、高く、低く、澄みきつた、清い聲の讃美歌の一節は、手に取るやうに聞えた。何人が歌ふわざであらうよ。地下に安眠する幾多の魂は、この美の聲て、如何ばかり慰められるだらう。

二　樂しさうな歌

「火銃の響遠ざかる、あとには虫も聲たてず……」松原の間を、朝のいき吹きながら、揃ひも揃つて、十

一二歳の小女が五人、同じ海老茶袴に、同じ毛糸編みの辨當袋、同じ下け髮、リボンは白紅色々、小さな足をそろはして砂をふみにじり橋を越える時は、わざと音立てゝ。段々白壁の校舍は松の間から見えてきた。

三 眞理ある歌

「大工するちふて親怨みなすな……親は大工の種生まぬ……」

朝霧深く立ち詰めた、石ころ道を、米積んで、鑛山へ行く馬子の唄ふ聲。

四 世にわすれられた歌

「紀州の灘の夕風に、雄々しくなびく其の旗は……」

和歌の入江から、一艇のボートは、勇ましく波を碎いて出て來り、沖へ〳〵と縫うて行く。太陽はまだ登らないが、雲の色、水のは今まさに戰場に上らむとする八個の快兒と、太陽をあはせて迎へるやうてある。最大の悲哀と謂れた、土耳古軍艦沈沒の歌を、雄々しくオールの音にそろへて歌うて行く聲は、餘韻遠く流れて、何處となく消えて行く。あゝ、世にわすれられた歌は、活きて海上の快兒に歌はれるのてある。

五 悲しさうな歌

「紡績職工が人間ならば……蝶とんぼも鳥の中……」

高い、高い、硝子窓から、なゝめに日光がさしこんでそれが一本の心矢を引いたやうに、綿屑が煙りと舞ひ上り舞ひ下つて、ちりとなつて居る下で、やつれた顔の小女は、悲しさうな聲で唄ひ出した。あゝ、彼の胸の中はどんなだらう。

（雨評）歌のさまゝゝ、なほたづれて、今一層の工夫を加へて書いて見たまへ。面白からむ。

○蟬の物語

愛知縣 平野俊

ミンミン〳〵……如何に樂しい事だろう。見渡す限り、野も山も青々と繁り合つて、見るから心地のよい此夏の景色、短く太く世を渡るとは、眞に私の身の上を言うた言葉だ、それに相違はあるまい。滴らむばかりの此の綠の枝に、天つ小女の羽衣に似た美しい、輕い、着心のよい羽袖を、梢吹く風に飜し、有らん限りの聲をはり上げて、夏の長い日をいとも短く歌ふ心地のよさ。夏は五月蠅いとか暑いとか、色々の愚痴を、人とやらがこぼすと聞いたが、何故に夏は五月蠅いのてあらう。其時こそは、今日を限りに、一つ面白く愉快に出來得るだけの妙音を絞り、爲し得るだけの節を弄して、歌つてやろう。

アラ、又向かうの水田で、聞きたくもない、土蛙奴、此の身の上が羨ましいとみえる。大きな口を開いて、水にあぶあぶしながら、分かりもせぬ駄文句、聞きたくもない。まゝよ、一つ美い聲で、彼奴が魂をひしい

て呉れよう、ミン〳〵〳〵ミン〳〵〳〵。樂しい此の夏、心地のよい此の風、山の景色、野の有樣、それさへあるに、時折此の蔭にあどけない子供の集ひ來て、廻らぬ舌で『青葉しげれる』なんか歌つてそれとなく私の歌に合はして呉れる、それが面白い。アラまた向うから今日も子供の帽子がちらほら見え出した。いざ、一と節、奧の手の秘曲を、ミン〳〵〳〵ミン〳〵〳〵。

（兩評）一寸おもしろし。

○春夜別れの一曲を聞く

和歌山縣　三輪好子

乙女の目にも似たらん春の夜の朧月、晴れたる空より淡き光もて隈なく下界を照せり。幾多の小星の光も、少女の微笑にも似てゆかしく、夜目にもそれと知らるゝ咲き亂れたる老櫻の一株、得ならぬ香を送り來たる。時々春風に誘はれてか、チラ〳〵と散るや春夜の花吹雪、此れも佐保姬の惠みなるかや。折りしも、カラコロと聞ゆる二人の下駄音、はては、益々近く、互に睦み語ふ青春の男女の姿も顯はれぬ。男は銀笛、女は月琴を携へたり。噫、そも此の二人、青春燃ゆる戀を月下に歌はんとてか、妾は老櫻の木陰に隱れぬ。二人の音樂を聞かまほしとて…………

*　*　*　*

「貴君、どーか、所が變はりましたから、もー一曲やつて頂戴ね。」

「もーやめましよう、春さん。」

「そんなこと言はずに、もー一曲でよいのですから。」

「……」男は無言、やをら天を仰いで、朧にかすむ月影を眺めて、戀か怨みか、ハラ〳〵と落しゝ數滴の涙。そを目早く認めし女、その身も堪へざるかの樣、聲も曇りて「貴君又思ひだしましたの。妾はもーあきらめて居りますのに、又貴君の……だが致方ありませんわ。是非に、貴君は出征へ行かねばなりませぬお躰ですもの……」と、女も紅涙に咽ぶ樣なりき。やゝ暫くして、男は「春さん、恕し玉へよ。もーこんな女々しい樣は見せませぬ、決心しました、僕も日本の軍人です……」と言ひ終つて、もとの快活に復しぬ。

「…………」

「春さん、貴孃との合奏も今宵限りですからね、別れの一曲をやりましよか」と言ひ終るや、一管の銀笛を取りあげぬ。「はい、では、別れの一曲を」と語尾は漸々低く、これも手にせる月琴を取りあげぬ。

あな快く堪へ難きは音樂の音よ、男には入神の妙あり女には出藍の譽れあるか、戞々の聲、喨々の音和しては、一揚一抑、曲一曲、進むにつれて、妾は魂魄高く飛んで、神の世界にあるかと怪みぬ……。されど、あゝされど、如何にせん、別れの悲曲。玲珠玉盤に墜つ

る響きありとも、中にこもれる、悲怨の音、恰も鶯の語露深きに音も曇るが如く、江流漲り落ちて浪月に凝りたるが如く、哀雁雲に咽せんで聲忽ち止むが如く、姿は思はず二人の淸き戀ひを思ひ浮べて、悲哀の念限りなく、涙の瀧津瀬と下るも知らざりき。やがて、一曲奏し終るや、箏を止め笛を置いて、嗚咽の音かすかに聞えぬ。四隣寂莫、朧の月も雲間に隱れぬ。チラ〳〵と散りひく花片三片二片、落ちて聲なし。

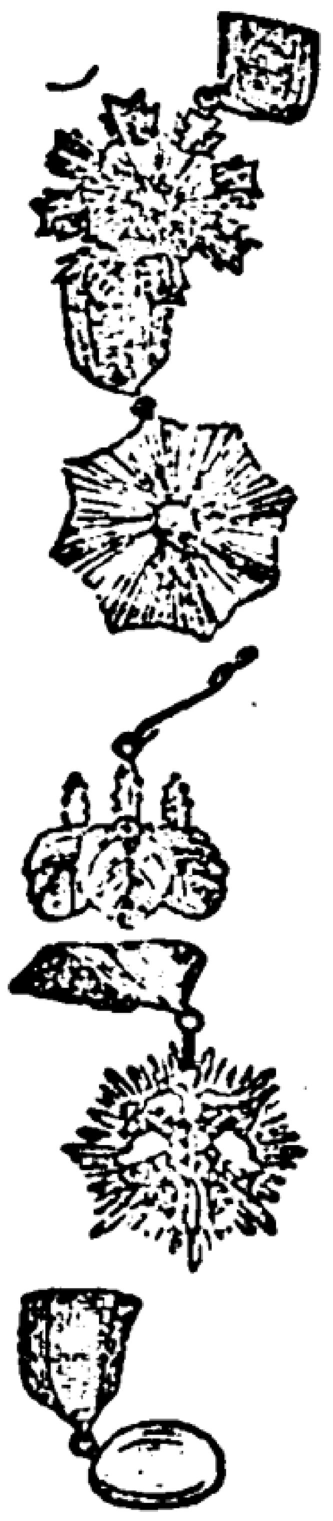
（雨評）會話の筆未だし〳〵。

○山里の夏の朝

能登國　杉下ふみを

見よ、山里の夏の朝。東雲の空すが〳〵しう明けはなれたるに、薄く霞める山の端には、鎌にも似たる半月の影、短衣にとり殘されし風情、いとをかしく、草葉の露に名殘を見せたる、何にかたとへん。庭の生垣など早咲の朝顔のところ狹きまでまつはりて、こゝに一ひら、かしこに二ひら、四ひら三ひらばかり、紅となく靑となく。色とり〳〵に匂ひ出でたる。杜若やう〳〵咲き出でたるが、鏡の如き池の面に、ゆかりの色に打ち匂ひたる、顏よ草の名にそむかずなん。打ち見やる彼方の畔道には、馬を引く翁、牛を追ふ童、鍬を肩にせる乙女など、みなをかしき裝して、朝の野邊の耕に趣くあり。田には稻の葉のみどり、風にそよぎて、いみじう麗はしく、畠には芋の葉末の雫の銀玉、ころころと朝風に動いて、いひしらずをかしに、「眼に見ゆるもの皆涼し夏の朝」と、今更のやうに、くりかへし〳〵口誦したるは、我ながらをかしうなん。折りしも、いなゝく駒の足音に驚きふりむけば、手拭頰冠りして、村の太郎作爺が、馬を引きて、山へ行くなり。「お早う御座います」と一禮して行きぬ。あゝ爺よ、老の身にさぞ辛らからん。妻なく子なき不幸の身、あゝあはれの爺よ。聞く、彼れは妻に別れてより、たゞ一人の子を賴み、力にせし甲斐なくて、間もなく日淸戰爭に召集せられ、威海衛とかに戰死せしとか。彼れが歎くも無理なきなり。それより十餘年の長の月日を、只歎きつゝ獨り淋しう暮すとか。

（雨評）太郎作爺の身上をのべたるは、何の必要ありてか。文の統一を害したり。且つ、これにて結びては、まとまりも惡し。



短歌

佐々木信綱選

天

折にふれて

やるせなき身の悲しさに人しれず
　君が寫繪出し見るかな

越後長岡千手町杉本平吉方　若葉女子

〔評〕調とゝのひて感も深ければ

地

◎

恥かしやこの年こしにめぐりあひて
　花園小路いづちさくべき

府下南多摩郡鶴川村小野路　眞藤杜宇子

〔評〕上の句のいひざまとゝのはぬふしあれど着想のすぐれたれば

人

折にふれて

姫君の琴ひき給ふ桃の宴に
　若き益良夫たちとりて舞ふ

北海道　すみれ女

〔評〕面白し

秀逸

◎

唐人の燕の巣とると攀ぢ上る
　くしき巖に蘭のはな咲く

武陽　伊東うばら子

〔評〕着想面白し

◎

知るならば我につたへよ雁がねよ
　いまはのきはの母のみことば

上毛　松村秀子

〔評〕情切なり

◎

征く人をおくる歌の宴今はてゝ
　雨になりぬる紅梅のやど

神戸　吉田しほ子

わかれ

静かなる小川の流二方に
　別れて後はいつか逢ふべき

和歌山縣　小川敏代

旅の歌の中に　群馬縣　氷島芳江

廣野原あゆみつかれて草にいねて
若葉の上の富士を見る哉

筑前　花田うらの

○

行く春を鶯老いて雨ふりて
なとや淋しき君が住む里

〔評〕四の句未だし

梅　備後　伊藤はな子

業なりて今日故郷に歸り來れば
笑みて迎ふる紅梅の花

明智光秀　大阪府　しくれ子

小栗栖の野邊のあらしにはかなくも
ちりてあとなき桔梗の花

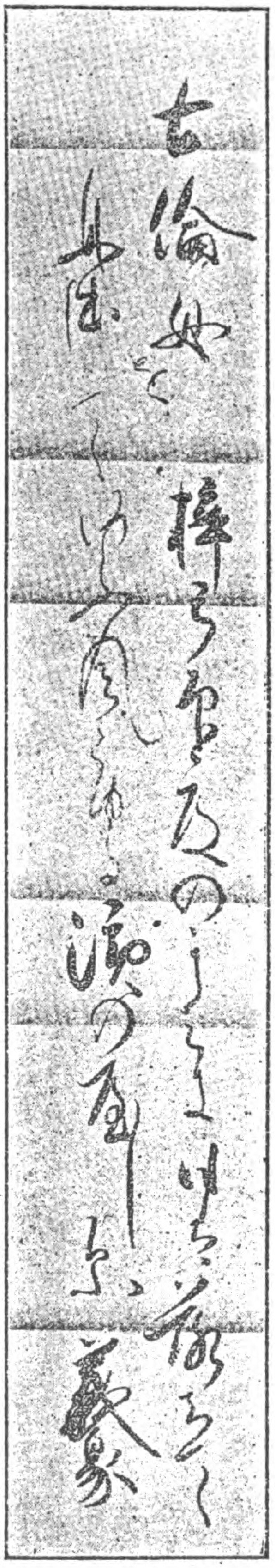
廣島縣　中村しのゝめ

○

友は失せて只一人遊ぶ柳かげ
水と語りぬ雲とおもひぬ

〔評〕二の句未だし

新竹　越中　田中きよ子



池邊義象君筆

見る毎に庭の若竹生ひ延て
窓すきにけり軒過ぎにけり

〔評〕下の句面白し

下野　松本ふくの

○

亡き友の柩を送くる小籔道
夕風寒むくねむの花散る

遊學の友に　上毛　今井八百子

云ひつくし語りつくしぬ今はたゞ
云はじ語らじ君さきくませ

○　伊豆國　古見梅雨子

逍遥に螺鈿の小箱ひろひけり
祇園の宵の白梅月夜

大隅國　神村糸子

○

戀人のいます隣の櫻花末たのもしく咲き匂ふ哉

亡き父を思ひて　上總　あらいと

亡き父のうゑにし桃を折たれと送りとゝけん道知らずして

春の夕　大阪市　板橋薫子

綠の野紫の山たそがれてかなたの森に夕鴉啼く

春雨　鹿児島　雪枝

賤の男が駒ひき歸る夕間暮山のすそのに春雨のふる
○　香川縣　井上綾子
川添の麥生の中に吾れ立てば雲井に高くひばり鳴なり
春雨　福岡縣　中村清香
亡き母のめでし椿の花ちりて思ひ出多し春雨の窓
○　下總國　中島露子
二つ三つ花の殘れる葉櫻になく鶯のこゑぞさびしき
○　埼玉縣　中村春水子
わが夫は歸らぬ旅に赴きて誰れもわが身を慰むる人なき
關花　上總　北田女史
今も猶人をとめて逢坂の關もるものは櫻也けり
○　上毛　渡邊ふみ子
荒波にゆられて君よねがはくば輝けよとは明星のごと
柳　福岡縣　池永喜代子
春風に柳の糸のなよやかにこれぞ女の心なるらむ
鶯　筑後　竹下露子
霧ふかき谷より出でし鶯の野邊の霞に又やむせばん
○　武州　武笠すみれ子
湖の邊の朝の風に興やりてさまよひ居れば杜鵑なく
○　岩代國　大中小牧
朝ちりしこの紅梅に君います鎌倉の春の忍ばるゝ哉
○　群馬縣　吉田きみ子
情ある君の一言忘れかねてまた相見しようたゝねの夢に
お見送り　越後　渡邊きん子
笹舟の一つたしかに又一つ君ゐますみ舟に添へ行きぬ
○　上毛　江葉冝由子
いたづらに花はちり失せ香もきえて小雨そぼふるころとはなりぬ
○　青森縣　工藤靜江
夕まぐれ小川の岸に佇めばリボン掠めて螢飛び交ふ
○　千葉縣　海野政子
利根川の清き流れに月宿り筑波おろしにさゝ波ぞたつ
○　大阪　田中常子
櫻ちる闇生の芝に詩集とりて春の歌おもふ君は十八
冬籠　秋田縣　浦井松子
やみわびて身は大磯に冬籠枕にかよふ白波の音
折にふれて　熊本　秀子
緑川清き流れに花うかめとび行く水に竿の音する
○　長野市　富田小芳
風かをるおぼろの月にあくがれてくるとしもなき花の下路
春　茨城　鈴木たい子
春の野をひねもす花にあこがれてすみれの床にてふのねむれる
○　兵庫　梅子女史
あだし野の露とわが脊はきえましぬ花さく春をいかに見てまじ
折にふれて　長崎縣　嬉野鎰子
思はじと思へど尚も思はるゝ世にも幸なきおのが身なれば
○　和歌山　鈴木白梅
煙たちて暮れゆくむらのあぜみちを順禮の子のひとりぬひゆく
○　越後國　佐藤英佐緒子
満州の野に起臥する君やいかならむ花野に遊びわれそゞろ想ふ
夕映の川　赤阪　高瀬淡子
響き來る鐘の遠音を四へ四へ乘せて流るか夕映の川
螢　備後國　池田しとみ
夏草の花ほの白きせゝらぎに光りながして螢飛びとぶ
やさしの友　備前　大島千歳子
ふるさとの友のおこせし玉章にそへて嬉しき初わらひ哉
五月雨　下谷區　さつき子
武夫の假寢の枕夢さめて五月雨しげく馬のいなゝく
○　栃木縣　秋山のぶ子
水の面に富士の高根の影たちて彩雲まよふ曙の空
○　能登國　杉下ふみを
里の子がまゝ事たえて御社の軒ばさびしく五月雨のふる
○　埼玉縣　渡邊きく子

古里のふりし昔の宿とへばすむ月ばかり其儘にして
花折　千葉縣　島海つる子
いかにせむ姉が爲にと折つるを花賜はれと里の子は云ふ
○　千葉　翠子
何となく桃の小枝に結ひつけぬひゝなの君にまゐらする歌
○　上毛　中島曙女史
うつくしとながめし櫻そよ風にあたら花をばちらしぬるかな
○　名古屋　花外女史
おもふどち二人が植し庭櫻今年初めて花咲きにけり
山家夕　埼玉縣　新井靜子
炭竈の烟しづかに日はくれて薪とる子の今かへるなり
枯野　備後　池田蔀子
風すさふ枯野のはてに月いでゝやせたる狐餌をあさる見ゆ
○　若狹國　井上紅露
白銀の劍を按じ野に立てば戎衣の袖に月ひやゝけき
少女子　富山縣　安川桂花
少女子が花のおもわを眺めては心のうさもちりそめてけり
野遊　神田　武村たつ子
うら〳〵と晴れ渡りたる野邊に出てゝ手折るもうれし梅の一枝
露の霞　鳥取市　天野清子
朝日かげうららに匂ふ森のかげ露をふくめる鳥の歌かな
梅の花のちれるを見て　奈良　山田みれ子
しらぬほとをなきてれかひし鶯のこゝろつくしも仇となりけり
○　長野　大日方きく
霞帳り春のみ神が快樂の宴大野に侍る三千の花
○　酒田　常代
神となりて皇御國を守らむと云ひし言葉の未だ消えぬに
○　磐城　矢吹ちか子
我やども春やきつると思ふまで軒の白梅咲き匂ひぬる
○　埼玉縣　野口白雨子
木母寺の鐘聲に聞えけり隅田川上る大船小船

人待　丹後　志楽わい子
待てど〳〵友は來らずさ夜ふけて小窓さびしく春雨ぞふる
○　金澤市　大地波子
虚無僧の歌口しめてふきやらず牡丹さく門ひるしずかなり
おりにふれて　岐阜縣　彷島度子
壁は落ち門かたむけるふるてらに老いたる僧の一人り粥を煑る
待櫻　大阪市　露香女史
ものゝふにたぐへし櫻まづ咲かておもひぞおゝき夕ぐれの窓
○　名古屋　鈴木しげ子
乳母の背に片言ながら蝴蝶呼ぶ稚子の笑顏に櫻花ちる
山寺　豐後　矢野靜香
のどかなる桃の山寺そゞろする衣はもとより墨染の袖
○　山口縣　川上卓子
から人の軒につらなる日の御旗花見るよりもたのもしきかな
○　群馬縣　田村そう
なんとなう朧月夜にあくがれて歩むともなく君が門まで
春雨　大阪府　しくれ子
うくひすの聲の朝の霜とけて風あたゝかに春雨ぞふる
○　群馬縣　田所きよし
春雨に四方の野原の色はえて此處や彼處に花ぞ咲きぬる
○　靜岡市　櫻子
うら〳〵とかすみにつゞく春の海に島がくれ行く船の帆白き
折にふれて　群馬縣　千翠女史
をさなどち夫よ妻よと花かげに遊び暮らしゝむかし戀しも
○　淡路　紅桃女史
はらからの藁打つ音の響したえて賤が軒端に夕雨ふる
櫻　埼玉縣　新井琴子
名に高き關所の跡は荒れ果てゝ老木の櫻今盛りなり
小春日　埼玉縣　漆原まき
ほの〴〵と立ちそめにける小春日にまづ待たるゝは山櫻花
○　下總　小島芳子女子

短歌

月きよみ天の河原のかさゝぎに女神聲よく鈴振ならす
藤　岩代　八雲なつ
桃さくらおよばぬ色の床しきは園生に匂ふ花のふぢなみ
折りにふれて　佐世保　横山柳子
花によひはなに浮かれて今日もまたなすこともなく日は暮れにけり
雨　德島市　久保卓子
ちまき餅激く少女の聲たえて軒端の菖蒲雨にかをりぬ
わかれ　新潟縣　翠夢女史
花かげに君は語らずわれ言はず今宵かぎりと握る手冷たき
二つの蝶　越後　內藤雪子
睦じう二つの蝶の音づれて庭のすみれに何かたるらむ
○　信濃國　桂はな子
身に染みて隨喜の涙あふれけり高き御僧の法聞きし夜に
花　尾道市　小林御法
ゆめさめぬ柴の折戸をおしあけてながむる雲は櫻なりけり
折にふれて　播磨國　藤原久子
朝毎に出征にし夫の幸祈る鎭守の森に鶯のなく
○　京都市　原田國子
讀みさしの雜誌は妹にうばはれて思ひいやます春の夕雨
折にふれて　三河　榊てい子
鋤鍬にわれははげまん今はまたゆきげの原に脊やいさむらん
○　備前　松本もと
古寺の堂の丹塗の色褪せて夕さびしく花のこぼるゝ
○　千葉縣　小川梅芳女
はなれやに繰糸ひく音ふけて夜半の奥庭白ばらのちる
○　兵庫縣　藤原桂子
姫百合を瓶にはさみて友と二人歌謡し居れば鳩かへり來ぬ
牡丹　横濱市　小峰園子
舞ひの手にすげなく折りて唐子等が捨てし牡丹に夕日つめたき
○　紀伊　木村秀子
君のため赤き心をあらはして旅順に散りし花の武士
風の夜の月　岩代　たかやす
燈火消いて文机拂ふ風の夜にさし入る月ぞ文たとれとや
○　下總　小島芳子
萬歳に別れし舟は影見えずたゞずむ少女に思ひて多き
山茶花　宮城縣　つる代
朝まだき雯戸開れば白妙の雪重げなり庭の山茶花
○　鹿兒島　竹之內澄子
新らしう千草花野の雨はれて襟うす寒う富士仰ぎ見る
春野　巣鴨　田中舞月子
春姫の白衣さらすとあけがたの花の春野につどふを見たり
○　紀伊國　三輪好子
櫻花見しは昨日と思ひしに葉櫻涼し夏の夕暮
○　板橋　田中登志子
よきにとて母のなさけに打れたる罪の子そゞろよみがへらせな
孝子　松江市　綿貫白すみれ
櫻花ちからなく散る夕くれ路くすり片手にいそく少女子
春の夜の海　姫路　松下槇惠
いくさふれますとは折れて烟うすく月もおぼろにかすむ海つら
紅葉　甲府市　青木敏子
一葉ちり二葉亂れて紅葉の少女の袖にふりつかゝりつ
晩春　東京府　佐藤つゆ子
雪失せて山暖かく咲く花に訪ふ人もなく春は暮れけり
寫眞に添へて　河內　松元みどり
許しませいつか否みしわれは今お情知りていとなづかしきに
旅中作　神奈川　中村清子
なづかしき花の故さとふりすてゝ旅路の今宵君をゆめ見る
春海　小倉　露香
はる〳〵と波路の末もうち霞みかもめもれむる春の海原
○　茨城縣　木村蓮子
春雨に散りしさくらの下かげに思ひにしづむたをやめぞある
○　上毛　松村秀子

明日も亦とちぎりかはして少女子のわかれしあとにすみれひともと
伊豫 佐野こずゑ

蝶

青空につゞける春の野を廣みかなたこなたに蝴蝶まひ舞ふ
伊豫 土居優香

○

神さびし庭も小暗く苔むしてひともと清く百合の花咲く
久留米 露子

○

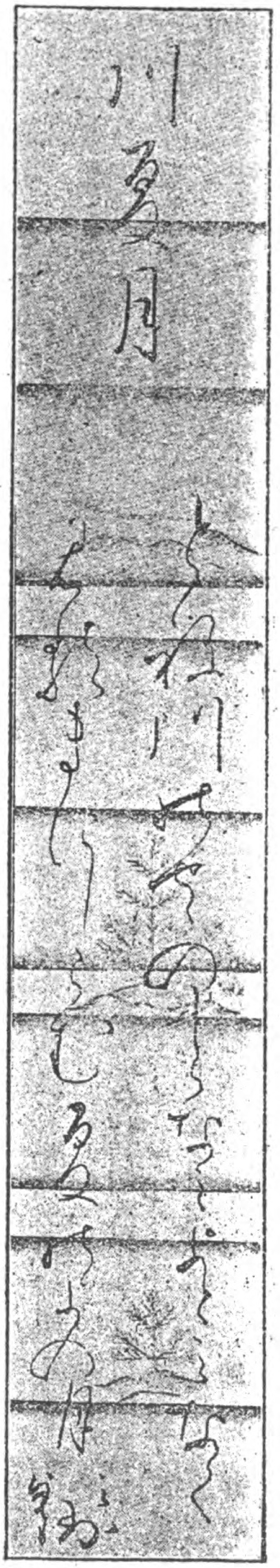
今更に思出て悲し朧月夜古りしひゝなに桃の花散る
河内國 よしこ女

○

そゞろにも戀の扉の鍵をそてうらぶ夢の魂歸りこず
丹波 波多野しげ子

○

たそがれを松の木蔭に辿り行く山路寂かに秋の雨ふる
長崎 福池國子



伊能外記君筆

○

今は早や形見となりぬますらをの影はとゞめぬ床の姿見
神戸 青山文子

○

いかにせん人の噂は大井川もらさじとこそ思ひたりしが
加賀國 野田山春子

○

斥候がめがきはやむる江のほとり洲の声白く月いりのころ
伊豆 加藤溜子

暮春

嘆きにをろがむ櫻散ると見えて山田の里のはる暮てゆく
常陸 かつら女史

偶感

花はちり水は流るゝ徒然に亡き兄おもふ春の暮かな
大阪市 今出淡花

○

武士三千斃れし方に脈なきて入日淋しき小山田の里
金澤市 山上小夜子

水鶏

一筋の野川の邊月さえてあし間がくれに水鶏なくなり
福岡縣 樽崎春子

古寺の月

軒くちて見るかげもなき古寺の音せぬ鐘に月の影さす
麹町區 小原雪枝

折りにふれて

大空に月もありまた星もあり地に住むわれに歌なからめや
栃木縣 中村照子

思兄

兄君の討死せしをなげく夕暮鐘高く只花の散る
武藏 小島濵子

○

死の宮の扉つめたき夕暮を北の御空に銀星失せぬ
麹町 森久保とし子

○

さ湯浴みて鏡の前に梳る我黒髪の長くもあるかな
埼玉縣 山下さと子

○

梅散りて櫻も失せて桃もなく七戸の村は春行かんとす
愛知縣 平野俊子

○

詩人が幽思に耽ける花の朝欄干寒う春の夜あけぬ
群馬縣 小暮とよ

○

たはぶれに詠みし昔の戀のうた思ひみだれて讀むにえたえぬ
群馬縣 萩原てい子

○

夕風の音もさびしく身にしみてなき人しのぶ秋は來にけり
澎湖島 わい女

前哨勤務

くれ行か近きあたりに露營してたち探り見む露のはなかげ
伯耆 伊藤春子

○

もや淡き夕野の小みちたどりきて君がり訪へばかりなき渡る

○　靑森　高橋たま子

紫に紅に飛ぶ夕榮の雲を寫すに我か詩拙き

○　德島市　岩田澄子

出征せし夫を祈りて棚の上にみ餉み酒供ふ里の家刀自

○　福井縣　高柴小靜

白梅は詩の男神の紅梅は戀の女神のおはします花

折にふれて　播磨　藤原梅子

子は征きて媼只ひとり家守る峠の茶屋に櫻花さく

奥都城にて　兵庫縣　丸岡その子

雨しばしかしこの山に日は落ちて吹く風寒う鐘の聲きく

○　三河　霞溪女史

我がせこの失せぬと夢みし其の夕東の空の若星消えぬ

田舍春夕　神奈川　小野雪枝子

部落ものどかに童牛ひきて菜の花かくれ歸りゆく見ゆ

歸雁　丹波　月岡鈴子

のどかなる春を見すてゝゆく雁は霞ふる里のいかにこひしき

時鳥　韓國　光壽雪野

露深く月の桂の高くすむときこゝと告げける時鳥哉

春雨　千葉縣　美智子女史

少女子が悶えに堪えて忍ぶ宵あみ戸まばらに春の雨降る

○　下野　吉岡春江

故郷に言傳たのむ雁よ六十路の母に恙なしとぞ

○　山口縣　友重あい子

みちもせに咲き亂れたる山櫻急ぐ旅さへ心ひかれつ

○　和歌山　竹中つれ子

盛りなる櫻の花をながむれば老も忘するる心地こそすれ

○　遠江　大石よし子

戀知らぬ女の子にも似たる哉朝月に見る白百合の花

○　越後　あさひ

こゝかしこ夕餉の烟たなびきて柳しづかに暮るゝ野邊かな

小羊　大阪市　田中萩雨子

罪の子が祈禱の犠牲ともたんにはあまりきよき神の小羊

春思　麴町　重田春子

我とても情は知れり月かすむ花の夕を思ひなきにあらず

散る花　土佐　浦濱子

夕風に一花散りぬまたちりぬ友とながむる窓の紅梅

○　群馬縣　須藤佐和

去年の春花の木かげに語らひし其のかたらひし友は世に亡き

○　横濱市　寺田光子

いたづれの母の枕べ去りかれて都にも上らず春くれんとす

師の恩　下谷　江口はる子

千歳ふともいかで忘れん朝夕のそこひも知らぬ君がめぐみを

鈴　三河國　中村とは子

神垣の櫻幾本咲きいてゝ樂殿のあたり鈴の音かすむ

白梅　福岡縣　野口多津子

兄君の愛でたまへし白梅は花は咲けども問ふ人もなし

○　備前　松本もと女

くしき夢さめて淋しき閨の灯に軍に居ます夫をしぞ思ふ

水邊柳　麴町　榊原千重子

風ふけば小川のきしの糸柳まゆつくるらん水かゞみにて

雨夜閑談　横濱　岡千代子

まとゐして古事かたる夜の雨のもるとしもなく袖の濡れける

○　上總國　桂華若綠

夜の都人音たえて瓦斯燈の影さゆるあたり犬のれぶれる

柳風隨　長崎縣　廣瀨ひで

月影のかすむと思しは青やきのふく春風になびくなりけり

春の野　富山　有澤みわ女史

若駒の風立てゝ行く春の野に夢破られて蝶々の飛ぶ

所感　群馬縣　荻野優子

はげみなば如何なるわざもなりぬらん牛も千里のたとへこそあれ

○　栃木縣　秋山のぶ子

風ぬるき蓮の床にうなゐ子のかざせる花に蝶のれむれる
おぼろ月　志摩國　小林君代
今日の記もそこ／＼にして窓あくれば庭のさくらに月おぼろなり
花　鳥取市　上山千重子
吉野山見あかぬうちにたそがれて花の女神の影をしぞ思ふ
折にふれて　越後　土田哲子
君がめてし山吹の花咲きいてゝなみだせきくるこのゆふまぐれ
○　廣島　織林壽芽
音もなく岸邊を洗ふさゞ波の靜けく見ゆる春の里川
○　越後國　米山春子
繪日傘に蝶のもつるゝ土手つゞき緋桃白桃川添への村
○　越後　渡邊かれ子
緑なる此の世の若葉慕うてか卯の花月夜星ながれ來る
月前梅　群馬縣　石井とく子
咲匂ふ梅の木末に影さしておぼろ／＼の春の夜の月
益荒夫の魂　福岡縣　田島道子
國の爲め潔れの花と散りはてし武夫の魂は白雲の奥
霞　信濃　池田己代子
百鳥のなくつゝみが岡にきてみれば千曲のほとりかすみ立ちけり
浮草　伊豆國　尾崎あい
今日はしもこなたに咲ける浮草も明日は何處の岸にさくらん
春の歌　筑後國　大島菊子
水の音聲の哀れを調べつゝ人惱み行く斑染の山
○　千葉縣　安西きく子
水車しづかにめぐる小山田の藁屋の背戸に緋桃花さく
○　群馬縣　金庭春子
なき兄の形見の笛の音きよく吹くは小川の柳がくれに
寒夜出征の君を思ひて　美濃國　臼井しげ子
埋火の閨もる風のいやさむし銃持つ宵の子いかにやあらむ
夕の落花　靜岡　やなぎ子
木の下につなく小牛の影うすく日もたそかれて花の雨ふる

○　京都　英　壽子
花びらを拾ひ集めて少女子がまゝごとすなり花の下路
○　群馬縣　萩原ゆう子
主やたれ花に浮れて吹笛のふしおもしろし里の夕ぐれ
○　大分縣　宮田秋子
折りてよと我れにせまりし妹のおも影やどす姫ゆりの花
○　能登　池野いさみ子
うら／＼と霞二十町の紫野さてもいかなる秘密こもれる
五月雨　赤坂　園田てつ子
五月雨のふり暮したる山里は栗の花散る聲ばかりして
○　札幌　白鳥りう子
名殘なく五月雨はれし池のおもに燕一二羽低う飛ぶなり
○　京橋　岡崎千枝子
上の水にうきて流るゝさくら花春はいづこをさしてゆくらむ
○　下總國　榎本しづ子
春うらゝ鮎子さばしる小流れの水上三里人の戀しき
○　千葉縣　すみれ女史
薄霧に翅のせては塔に入り塔を去りては野に出てし夢
○　宮城縣　大槻八洲子
下界の花に遊び忘れし天童の白羽ひろへり菫野の朝
○　久留米　石井みつ子
雨ほそし白桃ちると日記に書きぬ旅には寒き夕ぐれの窓
菫　神戸　宮本瀧子
手折らんと妹が溺れし川のべに咲きてし菫總ばするかな
雪中松　下野　平野とめ
白妙のころも裝ひし姫小松今朝一入の眺めなりけり
おくれて出征せんとする人にかはりてよめる　羽後國　鈴木しゅん
おくれてゝよしやゆくともほこらなむいさほは人にさきかけをして
○　栃木　秀子
身に痾胸に憂ひのあることよひなき夫戀ふる春雨のまど

○　武州　すみれ子
たゝかひの神やかしこに荒れまさむ血よりも紅き夕榮の空

○　信濃　宮澤浪子
霧ふかくたてこめてけり旅人の胸おとろかす木曾のかけ橋

秋風　備後國　池田仙翠子
腰に佩く劍の鞘鳴りすさまじき人を刺せよとや秋の風吹く

○　陸奥　芳枝女史
菜の花の朧々に暮れそめて蝴蝶三つ四つ霞むあなたへ

○　渡島　伊達とき子
ふるさとの日本ごゝろの山ざくらなみ木のうちに一本の花

戰國の女　大分縣　矢野靜香
花に狂ふ蝶まねますな國の爲劍とるべき意氣あれや女

○　越後國　内藤ゆき子
舟人のみの笠すがた歌によろし夕虹淡き利根の大川

春風　富山縣　大瀬菊枝
春風に駒いなゝきて若武者の鎧の袖に花散りかゝる

春月　群馬縣　荻原かなめ
更ゆきぬ花も今はと眠るらん夢より淡し朧夜の月

霞　東京　近野小枝子
たづさへし若菜のかごもわかぬまでかすみこめたり日暮の里

桃　上毛　花岡福子
水車めぐる音さへ靜かにて桃咲くあたり家鴨群れてなく

折りにふれて　上毛　花の屋女史
金絲雀の新巣にこもる晝日和しきりに散りぬ連翹の花

梅　茨城縣　生田目ふぢ子
嬉しくも梅の小路に迷ひ兒空には月の影も霞みて

○　札幌　ゆかり女
弘徽殿誰ぞやの咎ありやいな細どのにわれ忍ぶ朧夜

わかれ　美作國　秀芳女史
みいくさに召し出されて勇みゆく兄の門出は泣かじと思へど

春雨　千葉縣　栗原よし子
炭焼きのゆふべの烟低くして我が行く袖に春雨のふる

亡妹　群馬縣　金井深雪子
世をしらず花を手折りしわがいもははら〳〵散りし花ともろとも

○　徳島　住友登喜子
咲きにほふ花野の一里かけり行く騎兵見えずなりて春雨けぶる

出征の兄の許え　奈良縣　坂上りん子
身はたとへ異郷の露と消ゆるとて譽をあげよ千代の後まで

雁　兵庫縣　白旗清子
蘆間ゆく舟の白帆に夕日さして田の面にうつるかりの一つら

○　北信　中山かへで
君と二人語りし庭に梅さきてそゞろに偲ぶ湘洲の空

かなりや　長門　梅田糸子
春雨の晴れしあしたを花咲きてかごのかなりや春の譜うたふ

雛　伊豫　土居優香
ともし火のかげのほのかにゆらめきてひゝなの面に花ちりかゝる

○　廣島縣　渡邊喜市
うらぶれの身をもたらせておぼしまにおもひておほき秋の雲みる

五月雨　千葉縣　服部恒子
ほのくらき燈火消えてひとりねの枕に通ふ五月雨の音

折にふれて　埼玉縣　中村紅葩子
霞わけて島づたひゆく舟の眞帆うつくしき夕映の色

○　越後　齋藤周子
兄君が手うゑの櫻さゝげつゝあにのてがらを神に祈らん

春怨　岩代國　ひとり女
散る花は神の手向けよに袖にうけて思に沈む春の夕ぐれ

山川　越後　若葉女史
せゝらぎの岸のさ百合のかけおちて流も匂ふ山かげの水

はかなき夢の醒めしとき　丹波國　波多野しげ子
亡き母と共に語りし夢さめて枕邊ちかくこほろぎの鳴く

抒情文

日本女子大學教授鹽井文學士選

天

○月波根（わがふるさと）

千葉縣山武郡千代田村　山田沖子

あはれなつかしき哉、ふるさとの山と川と。

僅かばかりなるちよろ〳〵水の、夏草がくれ、流れゆくだに、いとおかしきを、月は東に、日は西山のひくきに落ちつ、ひろき野の風すこしありて、何鳥にやあらん、忽と聲こうと鳴いてゆきぬ。

あゝ歸らむかな、父母おはするころも手の常陸の國二なみのお月波のふもとに。

住の江、高砂、なるみ潟、不二の高嶺、浮島が原、清見が關、大磯小磯の浦わ〳〵、紫匂ふ武藏野の原、鹽がまの和らぎたる朝げしき、象潟の蜑が苫屋の夕げしき、佐野の渡、木曾の懸橋、かけてだに、世のうきことを思はざらば、うるはしのけしきに、心のどけき日ねもす夜もすがら、いかばかりか樂しからまし。

白帆ゆきかふ霞が浦のさゞ波の上に、紫匂ふ美はしの山。山のふもとに鍬を友なる、ちゝのみの父上、ははそはの母君、ふた方にだに從がひて、デムテアの女神がふところに、塵のちまたをのがれむかな。

静かにむせぶさゞ波ひろき霞が浦。

あしたは白帆まじり、限り知られぬみどりの蘆の葉末に、「お早う」といひ顔なる、春のはじめの月波の山。ゆふべはかげ多かりしこのもかのも、いつか落葉して月ひとりさやかなる、秋の暮つ方の月波の山。花ちる夕、青葉そよぐ晨、落栗窓をたゝく夜半、櫻はな咲く日の本に、かしこの入江こゝの峠、をかしの眺めは澤なめれど、霞が浦と月波嶺と、ふたつを友として、父母に從はむか、いづこに何のねがひかあらむ。さても小草の上に憩ふ時、鍬の柄に蜻蛉とまりて、鎮守の森に入日の斜めならむには。あゝ……

（雨評）心も詞も優美にしてやさしく、誠に其の人がらのゆかしく忍ばるゝものあり。天とす。

地

○はなれ雲

三州碧海郡大濱町　都筑桔梗子

星明りに影を亂して、一聲二聲、友を呼ぶは、たゞにねざめ勝ちたる濱千鳥のみにもあらざるべし。風寒き旦、狐なく夜半、いづれか友を思はざらめや、たゞ奥深くたれこめて、讀書に日を送り玉ふかの君のすさびになりし一卷の詩集にキッスして、主なき香をばめづるは、おのが日々のつとめそや曰はまし。けふしも亂れがちに、心の底ふかく、かの君のうつし繪とり出でゝ、あたゝかき音聲を聞かんと瞑目すれば髣髴としてうかび來るは何か、あゝ君の面影。思へば、我れとかの君との中は、血をすゝり合いてもなほあきたらぬ心地せらるるを、一片の雁信、意みつべくもあらず。ゆけばかへり、送れば來る。なくて一日を經ぬれば、心淋しく悶えて、あたら罪を郵丁に皈するも、おかしからずや。

夫れよ、かの友と我とは、九とせの昔より、學びの園に打ちつれて、かくはしきにほひに、人生の楷段の二三をふみつ、我れ暇あればかれを訪ひ、しからざればかれより來り、纒綿離れざる水に於ける魚の如しと、かつて母の君をしてほゝえましめしこともありき。雨の日、風の日、かつて我れは此のつとめを欲かざりき。かの君とても、これに異ならざりき。かくすること四年、天は何の思ふ處ありてか、この温かき交を絶つて、我れをして山河十里、東播の山中にさらすはしめぬ。

否、しかせざるべからざる命令を下しつ。

よし行かん、君さきくあれや！これや訣別の涙にしめりし一言の葉にて、落ちてしげき木の葉と共に、神無の月のはじめ、飄として我れはこの山深く水靑き處に居を移しつ。日ゆき、月ゆき、年のくるゝは早かりき。

かくて五とせ。

あゝ、この五とせ、早しと云はゞ云へ、われは不滿を以て送りつ迎へつ。

あゝ、この間の春の花に、夏の凉に、秋の月に、寒い雪に、もし君ありせば、いかにたのしかりけれ、いかにうれしかりけむ。

しかも、浮世は此の希望を容れざりき。

五歳徒爾、春秋の落花夢よりも淡くすぎて、思ひ出のをりは、せめてものなぐさめにもと、うつり香ふかき玉章の一たば！

はしなく夢にあうて、うれしと思へば、露の間に空しき水の泡ときえて、殘るはまぼろしのかひなき影。あゝ、山川十里、今これを奈何、はかなし、夢裡の客もし世をして我が心の如くならしむれば、之の山を平にし、この川を埋めて、呼べば應じ、さけべば通ふ心の儘となさんものを！

（雨評）筆に力あり。情に熱あり。地とす。

人

○森蔭

山口縣山口 御堀川向　堀　龍子

何千年前に、神樣が種をまいて、愛の雫をそゝいだのだろう。雪通ふ計りの大木の森枝を交へ葉を重ねて仄暗く、そゞろに肌寒い。下を見れば丈にも近い笹ぐみ等の繁る間の小道には、露もしたゝりさうな青苔が蒸して居る。すぐ後の瀧から流れてくる、玉をとかしたやうな清い冷い清水が、寂とした森中に音響を響かして居る。今日も亦、近所のお友達を誘うて、遊びにきた。遊びは賣屋事と定まつて、鈴ちゃんがだんご屋、雪ちゃんが酒屋、秋ちゃんが家畜屋、そして、私が花屋と云ふ事になつたが、さあ用意が中々忙がしい。彼方此方草花を集めて居ると馬出イ、牛出イ、そら牛が出た、馬が出た、と老松の皮をたゝく音が聞える。茶碗のかげに、清水をたゝへて行くやら、どん栗の緒口でだんごを作るやら、大騒ぎである。漸う用意が調うて、松の根方へ店を開いた。お金はいつもの椿の葉。ご免なさい、おだんごを五つ下さい。ハイ五つ、是でようございます。此の牛は幾らです。ハイ、一錢ですか。おや、るすにお客樣だ。一寸待つて下さい。おや、御出でなさい、お花幾ら差上げませう。ハイ、是れは一錢です。おや〳〵お金を忘れちまつた。一寸もつてきます。一寸お酒を一合下さい。入物がありませぬ、おゝ笹船にしませう〳〵……。いつ何所で覺えたもの



か、商買言葉中々お上手だ。一しきり、忙がしさうに遊んで居たが、やがて飽いたと見えて、其の內の雪ちやんが「かくれんぼ」をせうと云ひ出した。そんならばと、皆んな、蝶々の唱歌を歌つて、廣い處へ馳せ行うとすると、木の根につまづいて、ばつたりまろんだ……夕陽すでに沈んで、窓の內はほの暗い。折りしも、夜風さつと一陣。お〻、夢であつたか。身は今故郷を離れて旅の空、七度春は重ねた。お〻懐しい森、こいしい流れ、今尚清い蔭を作つて居るだろうか、美しい響きを立て〻居るだろうか。噫當年の少女等は今何處に、あのおけしであつた髮は、今頃は、何に結ばれたであろう。

（雨評）面白く出來申し候。入とす。

秀逸

◎胸の小田卷

雲州　綿貫白すみれ

先生御覧遊ばせな、あの紫の雲の美しい事、あら紅に變りました。おや眩い、金色の光が、灰色の雲の間から、一直線に私の額を射ますよ。先生、早く、早く。あの帆かけ舟の小さい事と云つたら、まるで竹に風呂敷でもかけた樣です事、あれ〳〵あの美しい光りの上を、すべて行きます。先生、どこへいらつしやるの、こんな佳い宍道湖の夕色も、御あきになりましたか、どこへ、どこへ、いらつしやるのと御袖につかまつてさめ〴〵と泣いた自分の聲におどろいて、目をひらいて見ると、机の上のランプは、消えさうになつて、峯の松風がさびしさうに、窓を音づれてゐます。あ〻今のは夢であつたか知ら、やつぱり夢でした、それにしても、この汗は……。窓をひらいて見ると、夜は森として、物音もしない。只人を醉せる樣な紅梅が、朧月を浴びて、ションボリと佇んでゐるばかり。先生は今當知らぬ旅の宿で、どうしていらつしやるだらう。もう御休になつたか知ら。それとも、自分と同じ樣に、あの朧月を眺めていらつしやるだらうか。先生が好んでいらつしつた旅泊の唱歌でも歌はうか。歌ふ勇氣も出ないよ。いつだつたら、敎員室で、自分が未來の事について御相談申し上げた時「手を御あぶりなさいつめたいでせう」と云つて、自分の前髮の亂を掻き上げて下すつた。あの時の嬉しかつた事。あ〻、もう敎員室へ行つたつて……。あ〻どうしやう。先生、春霞がどんなに深くつても、私の心は決して隔

てられは、致しませぬ。先生も秋霧がどの樣に濃いからといつて、隔てられ遊ばす樣なことは、決して。そうだ、ほんとにそうだ。あら、あの笛の音、どこからだろー。淸れいな事。私何だか悲しい。何の曲か知ら。

（雨評）先生をおもふの情、やさしくきこえたり。唯だ末段の殊更めきたるををしむ。

○砧

鳥取市　天野淸子

今日しも出征の命は下りぬ。永き永き別れを、只一人の母上に告げまゐらせむとて、打ちしぐれたる雲間の月をよすがに、絕え〳〵なる蟲の聲をふみつゝ、その昔、もすそぬらして、小蟹あさりし思出多き里川のあたりまで、やうやうたどり來れば、露を尋ぬる風の、さと吹くからに、かすかに響く砧の音。あはれ、あの音こそ、正しく、墨繪に似たる鎮守の森蔭の、我が家より洩るるそれな



野口小蘋女史筆

れ。あはれ、え堪へじな。老いませる母上よ。そも、この夜寒を、誰が爲めに衣打ち給ふぞや。忝うて嬉しうて、さては、かなしうて、胸はたゞみだれにみだれぬる。

さら〳〵とゆく水もむせびつ。すだく蟲も我れと共に泣くか。音も細りゆきつ あな!!また一しきり、月に響くその音。ゆるさせ給へや、母上我れも男の子と生れしものを。などて〳〵劍持つ

あはれ、ますら雄は泣かぬものを、この我が手の、あやしうも震ふらむ。

（雨評）面白き境をとり來たられたり。されど、筆はなほ足らぬものあり

○春の海

佐世保　橫山柳子

水清きところ、波しづかなるところ、そこに自然の慰籍を湛へ、そこに永久の平和を守つて居る、たのしきうるはしの春の海づら。

袖ヶ浦をずつとそゞろあるき、自分は今し、臥龍ヶ岩の巖頭に佇立して居るのである。

人生行路の難に泣いて、漸つと悟り得た、不可能。それを土産に、再びこゝに隱遁した自分は、思へば、運命の寵兒ではあるまいか。自分は、彼の醜陋として自營に寸閑ない都人士の、かつて夢想だも及ばぬ自然に抱かれて、そして、平和的生活を送つて居るのである。顧れば限りなく、泉の如く煩悶。そは、自分をして、今日あらしむる一つの試金石であつたのだ。自分は懊惱しつゝ、罪の子とならむよりは、寧ろ、脱越して自然と同化するを、これ希ふのである。世の所謂高名が何だ、富貴が何になろう、畢竟、罪惡の結塊に過ぎないのではないか。……

村のおさとが丸髷すがたはよ——
にあひますぞへどこまでもよ——

さま〴〵の想ひを破つた船唄に、仰げば高き一天空、今し夕榮の色にかゞやいて、水と空と連らなるところ紫紺、紅、黄と、折重つた雲が、恰度滴した繪具のよう。油を流したやうな沖合の方には、烏賊釣船が一つ二つ、ぬるく穩かな船唄に和して、汀をさして歸るのであつた。

あゝ、このたのしき、うるはしの春の海面……

(雨評)今一入の文とや申すべき

○落椿

根岸　加藤瀧月

唐くれなゐの刀をひさげて、わが影のかくるる高粱畑の中を、あたりに心を配りつゝ、駒に嘶さはせさせまじと、靜かに手綱かいくりかいくり進む程に、小高き芝生の丘にたどりつきぬ。夕日まばゆう照らせる新らしき木標にひたれ伏せば、胸はりさくばかりにて、せきくる涙止めもあへず、はら〳〵と春雨の如く、紫匂ふ菫の床にこぼれぬ。

あゝ、我が友よ、あゝ御魂よ、安らねむられよ。必らず君の仇はとるべければ。われも今日の戰ひに、君の跡を追うて、まゐるべし。なにとぞ、三途の川岸にて駒を止めて、憩ひ待ち居給へかし。

頭をもたげて覗へば、故陸軍大尉櫻小路武雄之墓、といと黑ふしるせしも、涙に曇りて、ほの白う拜せられぬ。

折りしも、大小の砲音、殷々として響き渡り、山は崩れ地はさけむばかりなり。味方十萬の武夫の勇ましき吶喊の聲、彼方此方に起り、駒の嘶きも近く遠く、諸處に聞えて、烟は空中に渦巻きつゝ、四方に擴がり、ゆくてはいづこ、白雲に包まれて、見えわかず。

かくては、一刻も猶豫ならじと、軍服の塵をはらひて超ちぬ。

おさらば、さらば、我が友よ、いざさらば。

蘆毛の駒に、ひらりと跨り、一むちあつれば、三つ二つ椿の花の、ぽろ〳〵と鞍をたゝきて。

（雨評）面白き境をとり來たられたり。されど、筆はなほ足らぬふし多し。

○いまはの月

若狹　井上紅露

小濱病院の二號室、次第に弱り行く目を細く開き、硝子窓を越して、茫然畫繪の如き夕暮の庭を見渡せば、緑葉蒼々たる梢に、一片の弦月淋しく懸りて、蕭疎、星光淡として疎也、

あゝ淋しやの今宵よ、

肉落ちて骨稜々たる胸を、兩手もて犇と押へ、ほつと吐息して目を閉ぢしが、悲しき思ひは、涙と共に溢れて、忘れんとして忘れ得ざる也。

何處の寺の鐘なるべき、淋しく響きて、仄かに消えぬ。

あゝ、實に定め難きは、人の運命なる哉。

我れ今、冷き死の神に手を握られて、胸の鼓動はやゝにうすれ行きつゝあれど、一度は漲る青春の血潮を抱きて、學を勉め希望を夢みし事もありしが、あゝ皆幵は夢よ、

思へば、……不幸の子よ、罪の子よ。

恨は綿々として、憂愁の涙、はら〳〵と頬を流れぬ。

夜は寂寞として、月冷やか也。

時に、廊下に草履の音聞えて、白衣神々しき看護婦來りぬ。幵の後に從ひて、憂に沈み給へる母上の姿も見えたり。

幵の折りよ、我れは胸をえぐるが如く覺えて、あなやと思ふ間もなく、唐紅の血潮は、眞白き布の上に迸りぬ。

…………

暫し我は何をも知らざりしが、ふと目をあけて、室内を眺むれば、青き光は窓にさして、白衣の人と母上は我が傍に立てりき。刻々の時計の響きは、我が運命を一秒々々に刻み行く樣也。

あゝ、我れは今や死の界に入らんとしつゝあるよ。

（雨評）これも面白き境をとり來たられたり。されど、筆はなほ足らぬふし多し。

○午後三時三十分（日記による）

四備　をみなへし

奉天撫順の占領をきゝて、

我は今涙の内に筆をとる、嬉しかるべき今日の日に。

思へば慘憺の報よ。○○中尉が名譽の戰死。

あゝうれしきかの報、まがふ方なき石田聯隊、而も戰死の部へ。天は何時迄我に泣けとてか、此の悲報。

思ひ起す、明治三十五年の春を。今はそれさへ涙をさそふたねとなりぬ。當時君はまだ見習士官の身、いかめしき軍服に似もせて、無邪氣にかるた遊びの勝敗を爭ひしは、彼の夕なりき。思へば、其の夜、あゝ彼の時よ、我れは君と相知る初めにして、又實に君と相見るの終なりし。天變地異！、阿修羅王は狂へり。而して、遂に君を奪ひ去りぬ、幽冥界に。あはれ、胡沙吹く風、いかに亡き人の魂を弔ふらん。冴えたる異境の月、いかに亡き人の屍を悼むらん。風は吹いて永久しへに、月は冴えて何時までも。されど、君が爽然たる英姿は、また再び歸らず。

思ひ去り思ひ來りて、我は轉哀惜の感に禁へざるなり。さはれ、一死國に報ゆるは、男兒の本懷。君も潔よく「蓮のかげに」との歌を辭世として……。

あゝ、那れの邊りぞ、君がやどる蓮のかげは。あゝ、それよ、西方十萬億土。西の風吹かんとき、英靈一たび來るを得んか。こゝに、可憐なる少女が、一掬の紅涙を捧ぐるを見るを得べし。

（雨評）なほ練熟せざるふし多し。

○鶯の聲（一巻二號紀伊みどりめ君とわかれの一節）

愛媛　天野八重子

（一）

放ち給ふとや、そは、われをなほ自由の身となさしめん御心にや。日頃の御情厚きに、いとゞ感涙に咽びしに。こはなか〱にうらめしや。人は籠の鳥よとあざけるも、吾れは別にくるしとも思はぬを。犬は三日飼へば、よく三年の恩を知るとか。吾れも小さき鳥なれど、いつかは孃が爲めにつくさむとつとめしを、遂にときを得ずして、今日に至りし、あゝ。

オヽ、日當りよきこの窓、吾れはこゝにあること三年

（二）

樂みなき庭とや、吾れは花もいらず、香りも又なにかせむ。只日々食ふ食物のしるの、孃がおん情のしづくと思へば、それを食する、吾が何よりの樂みなりしなり。吾が友の一人として、かゝるあつき惠みによくせしものなきなり。されば、ある時は友にほこり、友に羨れしを。

さるを、孃よ……、あゝ、かなしきも、いかて御心

にそむくべき。されば、暫時、別れを惜ませ給へや。
さらば、名殘の一曲……。
あゝ、孃よ〳〵、はや窓閉ぢ給ふや。あゝ、暫時〳〵。
あゝ、窓は閉さゝれぬ。
言はぬに胸せまりて、思ふにまかせぬぞ、かなしき。

（三）

はやる思ひを押し靜めば、罪の子三人、『鶯の聲面白し』と。あゝ、わがなやみの聞こえぬにや。あな、賢しの振舞や。

御心根やさしき孃の、如何になやみ給はむ。親愛なる友を失ひ、最愛せられし吾れを放ち給ふ御心根……この夕……あゝ、言ふも涙の。なるものならば、きえ度くこそ思ふぞかし。

オヽ、日は暮れぬ。風なきに、花六つ四つ散り初めぬ。雨は降り出しぬ。

オヽ、今宵の宿を……、あゝ如何にせむ。

（雨評）別に取り立て言ふべきふしなき文と申すまでにて候。

○おもかげ

泉州　美浪子

春雨の音靜かに、睫もあひがたきまゝ、我れは一人燈火をかゝげて、いたく好める詩集を繙き初めぬ。一葉、二葉とよみ行く程に、中より紙片一つあらはれたり。

その面には、水莖のあと美しく、

「譬ふれば御身は蝴蝶我れは花
　むつびむつばん千代も八千代も」

と一首の歌をぞ書きたりける。あゝ、こは、我が妹とも愛でいつくしみし、忘れられぬ露子の君がよみたるなりけり。かく思ひ浮べし刹那、妾は更に悲みを覺えぬ。消え失せたりし昔の夢は、また、さやかに稻妻の如く心にひらめき出でぬ。そも、露子の君と交りを結びしは、それよ、去年の朧月夜の事なりき。それより二人はこよなく親みむつびぬ。人は常に此の歌をうたひ居たりき。げに、露子の君を「花」とせば、妾は「蝴蝶」の如くなりき。三人の親しき友に別れて淋しく悲しかりし妾が心は、君によりて每に慰めと喜びとを得たりし。さあれ、そは、實にはかなき春の夜の夢よりも猶さめ易かりき。何れ遂には秋に逢はであるべき身ならねぞ、あゝ「花」は散ることあまりに早かりき。後に殘されて、今や一人の眞の友なき、哀れの「胡蝶」は、いたく悲しまれつ、

たのみつる花は、空しく散りはてぬ。
あはれ、胡蝶の身を、いかにせむ。

とて、人しれず袂の露をしぼりしと、幾度かありけん。しかるに、今宵、又、この歌を思ひ浮べ、ありし昔のこ

とどもを忍び、思ひ亂れて、果ては人心地もなく臥床の上に倒れぬ。やゝありて、我れに歸りし時、あゝこの上は思ふまじと眼を閉ぢしに、美しき君のおもかげは、明に現れ出てたり。妾はまたもや伏し沈みて、よもすがら春雨の音と共に明かしぬ。

（雨評）蝴蝶と花との譬喩にすがりて情をのべたる趣向は面白し。

○權現が辻

長崎　嬉野益子

あゝ思出は澤なること、權現が辻ならずや、妾は今日も亦、昔戀しきその辻の松が根方にひれ伏して、「君を忍ぶの涙にぞむせぶなり。昔乍らの春風は、涙にぬれし我が頰をなでて、頭上の松風は妙にいみじき自然の音樂をかなづ。あゝ、昔忍べとにや。今はなかなかに涙の種なるぞうたてきや。思へば、うたゝぬの夢なりしか、妾に一人の親しき友ありしが、春のあした夏の日、さては、悲しき秋の夕暮も、共に樂しみ慰めて浮世のうさを、この清き〳〵松風にはらひ、こゝ權現が辻をこそ吾等二人のこよなき樂園とはなしつゝ、かけろふもゆる春の日は、麓の野邊にすみれつみ、君が詩題に參らせつ。あらがねとかす夏の日は、綠したゝる木陰に、ハンモックつるし、すゞしき松風の調べを聞き乍ら、君は詩集、妾バイブル繙きて、共に讃美歌合唱せし折りもありしよ。世は雁が音の物悲しき秋の夕べは、この松が根方に腰打ちかけて、君かみ膝にもたれつゝ、行末越方の事など語り合ひ、早や暮れかゝる大空に、光いみじくかゞやく夕づゝ仰ぎては、希望かゞやく目を見合せ、共に笑みつゝ、かくてむつまじく愛てふ事露しらず、エデンの夢は圓かに、パラダイスの思想は悠久に盡せぬ愛の泉に浴して……嘻夢なれや。今の煩悶と苦惱とは、夢にも味ひし事なかりしに、無情なる浮世の嵐は、この樂園におそひ來て、紫匂ふ菫の花床に平和の夢結ぶ吾等をゆりおこしぬ。思へば、げにそは去年の此の頃なりけるよ。親しき君の誘ひ給ふがまゝに、そよ吹く風に袂まかせて、菫咲く野邊に遊びにしその折りよ、あゝその折りよ、うつむきがちなりし君は、ふと顏あげて「あゝ、世はなどてかくつれなきや……。君、ふたゝび共に手をとりて、この野邊に遊ぶ事かたし。されど、悲しみ給ふなかれ、我れ去るとも、自然は君を慰めん、あゝ優しき清き自然の友あるを……」と云ひつゝ、おゝそれよ今もバイブルの中に愛の形見と大切にひめつるこの菫あゝこの菫を、手づから摘みて給ひし折りよ、如何に悲しかりし。妾は、君が熱血もゆるおん胸に、顏おしあてゝ、心のかぎり泣きに泣きぬ。さてぞ、その夕べさびしうは別れまつりし。思へば、そもはや一とせの夢……。その後、君は學びの業をへて、某の學びやに敎への鞭とりつゝ、亡き兄君が忘れ形見のをさなご養ふべく、あはれや、その生涯を、心にもなきつめた

き散塲の人とはなしはて給ひつと……。悲しき御消息のみ絶えず通ひ來つゝ……さらぬだに露けき我が袖の、昨日今日はくちんばかりになりぬるを、猶も泣けとや、菫ぐさ昔のまゝに咲き出てぬ。見るも、涙の種なれや。去年はほゝ笑みて見し野邊の菫も、あゝ今年は、今年はかはりぬ、悲愁の涙をもて見るべく。仰げば、千代ふる松風も、ありしそのかみのまゝ、妙なる調べをぞかなづる。されど、今はそをさへ聞くにえたへじ。あはれ自然は妾を泣かしむるものを。したはしの君よ、なつかしの君よ、君まさで何を樂しの樂園ぞ。けうとき闇は今はとせまり、思ひにもだゆる身を覆ふ時、あゝゆかしの花なつかしの菫のかをりは、又も風のまに〳〵……。あやうくも立ちあがりて、菫咲く野の花床に打ち臥しぬ、かげろふと共に消えまほしくて。』

縷々とは並べられたれど、さまで感動かず。

○雨の日

備前　松本もと子

蕭々として糸より細き春雨の、燒け殘りたる吾が家に音もなく降り注ぐ、悲しさよ、淋しさよ。

妾、孤々の聲をあげて玆に十五年。思へば、こし方は皆涙の痕。十歳にして、父は冷けき秋風に誘はれて、儚なく黄泉の客となりたまひ、一家の團欒を永くつゞくる能はず。兄は雲遠き東都に、弟は知らぬ他人にやることゝし、妾は母と二人、少しばかりの畑作りて、細う烟をたてたるに、又もや災は吾が家を襲ひぬ。さても、幸うすき。一昨夜半、人の叫ぶ聲に夢さめて、驚き起くれば、火事よ〳〵と只ならぬ聲。はつと胸躍らせて出てみればこはそも如何に、隣の家よりどつと燃え上がる紅の焰。折り惡しく吹き出でし東風に、二間と隔たぬ吾家、何かは以てたまるべき。僅に重要の物品を出たしたるのみにて、見る間に燃え移りぬ。あゝ、最早如何ともする能はざるなり。

五年前、秋雨梧桐の葉を打つ夕、父の遺骸に泣き、今又この雨に燒けたる家跡に泣く。さても、幸うすき身なるかな。吾妻の兄上は、如何に嘆きうて居給ふらむ。

（雨評）悲しさも淋しさも、なほ大に發表の苦心を要する雨の日の感に御座候。

○浮世

福岡　さき子

紫匂ふ彌生の空、今朝ほころびし花の色、あはれ、浮世や夕の雨、定めなの世と知りつれど、五年の莫逆の友絹江樣、あゝ其の絹江樣が、何故に、さは冷かになりましゝぞ。思ひ起せば、こぞのこと、春まだ若きゝさらぎの頃、絹江樣はふと心地すぐれずとて、病の床に打伏し給ひぬ。それより、妾はふみ學ぶ心地もせで、朝な夕なに、絹江樣のみ枕邊にはべり、苦を分ちてみとりせしに、絹江樣は常に妾の手を取りて、姉樣々々と呼び、して涙ながらに申されし言葉、あゝ其の言葉、今はすでに忘れ給ひしか。死しても二人は別れじな、勉むもやむも共にと、固く誓ひし絹江樣、あゝ、其の絹江樣が、何故に心變りし給ひしぞ。

日に月に遷りゆく情なの浮世、知れざるは人心。とは云へ、五とせ以來の友、同じ學びやに、宿舍の窓こそ異れ、共々に行きつ來られつ、起き伏しも、姉樣絹江樣とむつび暮らしゝ間柄なるを、秋いとたけて萩ちる夕、妾ふと風の心地にて打ち伏しゝより、日々に重りゆくただならぬ病狀に醫師の君は眉根をよせ、絹江樣をひと間に呼びて、何やらんさゝやかれしより、絹江樣の御そぶり變らせ給ひて、日に幾度かきてたびし御身が、二度となり、一度となり、はては、きまさぬ日さへ多くなりゆきて、今は、たまにき給ひても、近くも寄らで、怖々と一言二言いひましては、そこ／＼に歸り給ふ。妾の悲しさ、心細さ、さなきだに、いとゞ心弱き身の、日々衰へ行くにつれ、物思ひのみまして、故鄕の空眺めては、父母戀ふる涙にもろ袖をしぼり、身の行く末を案じては、やるせなき悲しさ、病める胸にわき返りて、苦痛堪へやらぬまゝに、あゝあさましや、みの病ひ不治なりとは知らで、一向に、絹江樣をのみかくはお恨み申されて。

瘠せ衰へし軀を、ベツドの上に横たへて、浮世をせばめたるやるせなき心の一筋は、亂れ々々て蕀刺の如く、世の無情と身の因果とをかこつのみにて、なやみにたへず、床をすべり、たぢろく足を廊下の緣にさゝへて、仰げばおぼろけの月、あゝ今はわれ、不治の病ひに罹り居るを覺悟しつゝも、なほ醒めやらぬ心の底より見れば、思ひ起す、菅公の配所の月もかゝりけんと。

○懷しの君

出雲　蝶子

凡そ人の此世に生を受くるや、悲しきことは濱の眞砂の數多けれど、死別と離別に勝る悲しみはなかるべし。想へば、君と妾とは、倶に同じ、松は翠に壁白き、女學の園生に手をとりとられつゝ、希望の花手折る身となりてより三寒暑。時に長閑なる春の野邊には、蝶よ花よと戲れつゝいとも餘念なく暮したりしよ。あるは、千鳥城頭の老松にかかれる秋の明月に嘯いては、倶に隔てなき心の底を打ち明し、いとも樂しく眺めたりしよ。斯く金蘭の交をなしつるに、思ひきや、君、雲漠々たる千鳥城下、水脈々たる碧雲湖畔を辭して、海山遠く隔つる龍華の里に移り給ふ身となり給はむとは。あはれ、親しき我友よ。

君と別れし其の日より、闇夜に燈火を失ひしと云はむか、老人の寄る杖を失ひしと云はむか、さては、魚の水を離れしと云はむか、群れを離れし濱千鳥、それにも似たるか我が心。風の朝、雨の夕、いかに過ぐさせ給ふらむと、深き想ひに沈みつゝ、縕縷の袖絞りしこと、幾度ぞ。暗夜孤燈の下に君がものせし水莖の跡をながむれば、當時の面影髣髴として眼前に現はれて、千行の涙とどめあへず、嗟乎、懷しや。

○枕の塵をよみて

鳥取　天野濟子

人の親の心は、げに闇にあられども、子をおもふ闇にはあやしうも、迷ひこそ入れ。

木がらし荒ぶこよひしも、燈の下に、ひとり讀み明しけるは、これなん十六夜日記の一節、枕の塵にありける。あはれ細川の流れも故なくぞき止められしより、雄々しくも、身をえうなきものとなし果てゝ、はかなき望みをつなぎつゝ、はろ／＼と見もしらぬ海山越えて、幼き子等を、またいつ歸るべしともおもほえぬ九重の都に殘しおきつ、いざよふ月にまかせけむ母その、めぐみの露は、我が袖にも宿りけむ、双の袂のじぼるばかりなるこそあやしけれ。哀れ、昔も今もとは迄もみ親の厚き情は、かはらざりけりな。あゝ、そよゆくりなくあくがれ出てしその夜の月の如……。かう思ひ綴くるに、學びのわざにおくれ勝なる我の、稍々もすれば、望みの光さへ失はむずるけふきのふ、みおやの惠みをおもほえば、冷えし心の又更に熱き血燃えつ、ハラ／＼と又熱き涙のふみを汚すこそうたてけれ。

○幽愁の夕

麹町　重田春子

「最後の別れだ、笑つて送つてくれ、僕の妹だものれ、双手をあげて、勇ましい門出を送つてくれるれ……」とおつしやつたのに、いそいで涙を拂つて仰ぎ見た兄上の御面には、沈痛な色が見えた。堅き／＼決心を以て、その日の午後、新橋停車場を立つた、我れは、出て行く列車の窓に半身のり出して、少尉の軍服勇ましく、にしやかに高く軍帽をおかぶりなすつた兄上を、一滴の涙なしに送つたのてあつた。…… あゝ、併し、それももう一年前。しかも、兄上はもうこの世には居られぬので

ある。戰場で華々しい戰死、否、……あゝ、このちさき胸ははり烈けさうである。悲憤の涙は、瞼もなければとばかり、あふれ出づるのである。新浦の沖に夜は、長けて、萬象眠りに落ちやうとして居る時、低くつきすてた時鐘の音も、スリリユーの響も、寒い靜平な海原に、月光を碎く二條の紫金蛇を、長く〳〵後へに引いて、夜にまぎれて汐路を走つて居た金州丸は、あゝ左舷はるかに、夢の如く、まぼろしの如く、夜霧の幕を一抹の硝煙に染めて、朦朧と浮び出てた敵艦の、近づくにつれて、こゝに悲劇をなすべく餘儀なくされた。……あゝ、將は敵艦に趣いて歸らず、月光冴ゆる甲板上、卒は一齊射擊を行ひ、士官は自刄して斃る、……あはれ金州丸は長しなへに逝いた。

オ、自刄して斃れた士官の中に、兄上は、……永久浮ぶ事なき海底の藻屑となられたのである。何とて泣かずに居られやう、何とて嘆かずに居られやう。角帽姿雄々しかりし兄上は、花の如き文學者として、世に立つべく希望を持つて居られたのであつたのを突然召集せられて、……そしてその途に於て、心ならずも自刄して悲慘な最後……父なく母なく、兄弟姉妹なきこの孤兒を殘して、……あゝ堪へがたい情の子惱みの子、鎌持つ手はふるへて、涙は瀧と流れるのである。……もはや我はかくまい。……さもあらばあれ、どうなりと運命の神よ弄びたまへ。星はしきりにまたゝく、風は急に身に迫る、……あゝ幽愁のこの夕。

◎笛

上毛　渡邊すみれ子

嗚呼、思ひ出多きは、此の笛なるよ。

櫻花爛熳たる春の夕、花を賞しつゝ、隅田堤の散歩の袖、君と共に吹きしは、此の笛なり。

急雨降りて炎熱を洗ひ、涼風徐ろに來る夏の夜、靑空の一方にかゝれる明月を眺めつゝ、君と共に吹きしは、此の笛なり。

秋風衣をはらうて、四邊の秋色無常を告ぐる時、吾が止みがたき望郷の念を、此の笛を吹きて慰められしは、彼の君なり。

六花片々として降り、滿目一白、木々の梢の香なき花をつけたる時、君と共に吹きしは、此の笛なり。

然るに、君は最早なし、嗚呼悲しい哉。

君は去にし年の秋、かりそめの病にかゝられしが、次第に病重なりて、桐の一葉の散ると共、遂に果なくなりたまひしなり。

春や、夏や、秋や、冬は又來るべし。されど、彼の君は永く〳〵、かへらざるなり。

彼の君は、今何所にて、如何なる人と、共に吹き給ふらん、嗚呼、思ひ出多き笛なる哉、嗚呼、涙の笛なる哉。

◎友の兄上逝去に就いて

福岡　片岡じつ

鳥を塒に送りて、響く夕の鐘の音も消えて、淋しく力なく、投げ込まれし端書は、親しき友千代子の君より、兄上逝去の報なりけり。捧げし此の手は忽ち慄へ、夢かと許り思ひしが、夜いと深きに至り伏すれば見ゆる笑みの姿、もだゆれば聞ゆる君が聲。千代子の君と妾とは、學の道の初めより、手に手を取りて睦み相ひ、兄君よりも妹よ二人の妹と愛せられ、妾も兄上と隔てなく、慕ひし者を、去年の春、朧月夜の花蔭に、妾一人を遺こし置き、都に物學ばんと、兄妹は、亦た來ん春の再會を期し西と東に別れしが、春は來たりぬ、花は咲きぬ。月は懸りぬ、其の夜の月。語り給ひし彼の言葉、今尙耳を去らざるを、現幽永劫に別たれて、亡君は此の世の君ならず。悲しきかな、我が胸破れんとす。まして、敬愛の念ひ深き妹君、君が思ひや如何ならん。あゝ、その悶えの朝夕を、同情ては、湧きかへる血潮は、疾くも溢れゆく。噫、死よ、生よ、人の運命、斯くも果敢なきものなるか。

◎三月は來れ三月は來れ

富山　天翠子

嗚呼三月は來たれ。來たれよ、三月。氣暖うして、百花咲き出でて、種々に彩り、垣根の梅は散りたれど、朧月夜はほのぼのと、夢より淡く、櫻ばな、汝の時めく其の頃よ、我れはしも、學舍を立ち出でて、理想の時季に入らんとなすなるを、來たれよ、三月。ア丶、されど、指をり數ふれば、此に三年、なつかしの父母君の許をはなれ、いとしの妹のこしおき、故鄕を出でし其の日より、花は散り靑葉は染めて、月日の小車小止みなく、絃を離れし矢とのみすぎさりつ、此に早、學びの業をなしをへて、たらちねの惠みあまねき父母の許に歸るうれしき、故鄕の樣や如何ならむ。

俳句

巖谷小波選

天

暁の井戸に星見る餘寒かな　三河　露溪女史

評曰　曉の餘寒は常の事なれど一星忽ち井底に現る、天落の奇想とは此事なるべし。非凡々々！

地

紅裏のあせたる戀や衣更　青森市浦町四〇　高橋たま子

評曰　紅裏に戀の色たしかに見えてあせたるに人情の薄きも思はる、人事俳句中の粹なるもの

人

禪寺や椿の落つる夜の音　愛知縣中島郡實田村平野方　平野樂華

評曰　夜の音には禪寺の意確かに聞ゆ、而も椿は動かぬ景物なり、閑寂の趣深し

秀逸

かんこ鳥啼くやこぼるゝ松の花　野州　よし子女史

虹の輪の上に揚りし雲雀かな　伊豆　古見梅雨子

順禮の笠の山茶花しほれけり　福岡　田島道子

兀々の崖に危き躑躅哉　淡路　岡田貞子

佳き人の笛すさぶ夜や朧かな　武藏　中村女史

春の夜の唐崎あたり小雨かな	神田	近野榮子
折かけてあたりの土筆數へけり	越後	渡邊きん子
櫓拍子や潮來出島の春の潮	麹町	高橋つる子
行秋や美人の後の貸家札	豐後	工藤鈴子
山門の甍閑なる乙鳥かな	芝	新井菫溪
行く春や庵は詩の屑歌の屑	加賀	松田てう子
桃さきて軍馬いなゝく堤哉	和歌山	増井英子
雲雀鳴く野邊やあくびの捨て所	豐後	矢野靜香
紅梅や香り冷き明石潟	廣島縣	箕岡君子
山寺や屋根に菜種の花一つ	釜山	光壽雪野
うつくしい鳥の來て居る淸水哉	千葉縣	大川せぬ子
摘草や下駄を求めて小牛道	横濱	小峯その子
春雨や晝しづかなる院の庭	秋田	雪香女
梅に晴れ柳に降れよ春の雨	紀伊	恩田赤松子
屋の上に猫もいれぶる春哉	紀伊	木村八重子
君が代は野末に菊の朝日哉	小樽	梶水仙子
緋牡丹や小犬尾を振る椽の先	東京	萩野雅子
春雨や蛇の目とするゝ只の傘	筑前	小野みどり
ぬれて來た袖に歌よむ初時雨	大分	秋香女史
一つはふ蟻もめだつや白牡丹	千葉縣	小川翠江女
鶯や聲にさえある雨上り	播摩	源井邦子
捕虜兵の日本語可笑し花の下	名古屋	鈴木との子
五月雨や破れ戸の多き間の宿	武州	武笠すみれ子
三尺の庭に咲いたる牡丹かな	伯耆	伊藤春子
辻君に順禮やすむ日永かな	播摩	藤原久子
カイゼルの鬚を掠めて蜻蛉哉	麹町	小島仁子
譏寒く風鈴ならす竹の風	牛込	小島登美子
草に座して雲雀見あぐる童子哉	越後	あさひ
桃咲くや里へは七里五家の莊	越中	有澤みわ子
比良越えて近江のたびや初霞	上総	桂華若緣
野遊の春も三日となりにけり	美濃	碓井邦子
木屋町の雨に濡れつゝ燕かな	上總	安四きく子
追分のふしも日永の細手かな	尾張	平野俊
磯村や軒端〳〵の桃の花	常陸	かつら女史
山里にともしび淡し春のくれ	上毛	渡邊馨女史
春の戀往生院の鐘の音	千葉	風陽惠史
のどかさや人形の乘る笹小舟	仲町	秀子
自轉車もすてゝあるなり花の山	神戸	青山文子
夏山や雲の中より水の音	福岡	楢崎春子
友送つて柳散る江に別れけり	富山	諏訪芳子

消息文

日本女子大學教授鹽井文學士選

天

○友へのかへし

三河西鴨郡石ヶ瀬村澤田忠三郎方　霞渓女史

のたまふ如く、春も漸々深くなり行きて、そゞろに心も長閑にはべるを、明日は櫻が淵へそゞろ歩きの御催しとや。げにはしたなき妾をも、ふりはへて誘ひ玉へるは、こよなう嬉しう承り侍りぬ。願うてもあらぬよきことにて、何をおきても御供はいたし度事に侍れど、あはれや、今朝まだきより、母人風邪の氣はいにて、臥戸にみとりする樣なれば、心許りは飛び立つ如くはべれど、この筆運ぶ暇すら心苦しう覺ふるほどのこと故、いと殘り惜しうは侍れど、こ度はえ罷り出で兼ねてなん。ゆめ惡しうな思ひ玉ひぞ。唯櫻の蔭にて、そゞろ歩きの御有樣、今よりおしはかられて、はてなう羨しうなん。何卒お皈りの程には、蝴蝶の舞や雲雀の謳は、むづかしう侍れど、せめては花の一枝、家土産に惠ませ給ひてよ。先づは明日の日和を祈りながら、草々かしこ。

（雨評）詞すなほにやさしく、心のあるところを盡くして、眞に敬服すべき消息文の筆づかひを得られたりと申すべし。末段の一句、才氣もまた愛すべきものあり。天とす。

地

○能州なる友に

加賀　庵子

夕露白く菫に匂ひし去年の今日、別れがたき友垣が別れの惜しまれて、かたみに晴衣の袖をしぼりし、彼の夕の星影、あはれいかに忍ばせ給ふぞ。苦き御胸よりあふれ出でし「御身御大切に」との君が御一言は、げに千萬の思ひの含まれて、今なほ耳の底にしみ渡り居り候。あゝ思へば、二年の昔に候ひしよ。日映き七月の頃、君と共に淸き薔薇の香もうつる帽をかむりて、かのコートにテニス競ひし折りは、如何に樂しく候はざりしや。さるを、今や、君は日本海の荒浪磯打つ能

州のはてに、吾は手取川の源近き此の山里にと別れはて、語るに友なき今日の身の上、あはれなつかしの花子の君よ、澄み渡る今宵の月を如何に眺めさせ給ふぞ。銀流汀に華を散らす此の幽谷の景も、今はなか〳〵に涙の種なるにも、さぞや洋々たる日本海のながめも、越山併せ得たりと詩はれし能州の景も、如何計り斷腸の思ひせさせ給ふらんとお察し申し候。されど、別れは逢ふの始めとも候へば、又もや共に金城の月に嘯く折りも候はん。共に兼六の園に昔を語るえにしもあるならん。君よひたすらに御身を勞はらせ給ひて、折々の嬉しきお便り聞かせ給ひてよ。さて、封じこめし櫻花一輪、あやなき我窓に獨り麗しく匂ひ出でしものに候。もし御徒然のお慰みにもなりなば、いとゞ嬉しう存じ候。かしこ。

（雨評）筆すなほに整ひて、しかも多少の花あり情あり。地とす。

人

○病中友のもとに

伊豫大洲　土居優香

訪ふ人もなき、此の片田舍も、春の光りのみは、くまなくみちて、立ちこむる霞は紅の色ふかう、野山は花の袷衣となりし、今日此の頃の空。それを、樂しく出であるく術もなう、只いたつきの床によこたはりて、小窓のひまよりながむる身となりし妾を、君よ、あはれと思してよ。

扨も、みもとのあたり、春風は如何に吹き渡りてぞ候ふ、管の根の長き日を、鶯の初音、みそのゝ花の香もたらして、美しき、限りなき、君がみ待の袋を、さこそ淸めてとおぼえ候。あはれ、常ならましかば、ともに文机ならべて、朝な夕な、かたみにはげましつはげまされつ、樂しく敎へ草摘むべきを、幸うすき身は病魔におそはれ、峯の松風小田の蛙の音より外に、語らむ友もなく、人の世の樂しと云ふ春を、花の朝、月の夕、御地の空をのみ眺めて、物ぐるほしう思ひみだるゝのみにて候ふよ。

昨夜、あまり月の淸さに、小窓により、庭の櫻にかすむを眺め、みもとのあたりしのび居り候その折り、峯の嵐にまひ込みし此のわくら葉ひとつ、果敢なき妾の身にたとへ、封じこめ候。春若うして病に散る身を、あはれと思し給ふならば、學びの御閑の折り、此の里のおぼろ月を眺めに出で給はずや。かならず小田の蛙

の聲にのみ泣かせな給ひぞ。

（雨評）心に華にやさしく哀はしきものあり人とす。

秀逸

○菫の花に添へて

筑後國　大島菊子

露々たる連日の春雨晴れにし渺茫たる筑紫平野の夕榮の色、夕陽地平に沒せむとして、金色の雲東へ走り行くを仰ぎ見たる時、熱き涙の双頰を流るゝを覺え候。あゝ此の涙、君ならでやは知る人もなき此の廣野、妾が涙浴びにし菫の花、今は儚き孤兒を慰むる唯一の友にぞ候。夕思ひにかきくれて、遠情堪へ難く候まゝ、筆執りて候よ。別れには、梅咲く頃は御目にかゝらむ必ずと惜しき袂を分ちしより、タイムの歩み止む事なく、咲きし梅ははや散りて、櫻咲く頃とは相成り候。花見る毎に思ひ出でらるゝは、



去年の今頃、君が暖きみ手に相思をかたく握りしめ、三春の行樂に耽りし折りよ。それも、散りて儚き花の夢、花は今年もかはらぬ色香に咲き匂へど、花見る心は去年ならず。み空に唱ふ鳥の聲、去年樂しと聞きにしも、今は春愁うたゝ斷腸の調と聞きなされ、さても見るも聞くもの、怪しうもかはり果てゝ候かな。

あゝ戀しの懷かしのはが友よ、これに卷きこめしは、筑紫廣野に咲きにし菫、君思ふ涙注ぎし花と思へば、楚々愛すべき此優姿、いと哀れにはおぼさずや、あなかしこ。

（雨評）文才はほの見ゆるものあり。

○都の友に寫眞の取かへを頼みて

和歌山縣　小川敏代

日毎御目にかゝりても、猶あかずのみ思はれしを、斯く遠ざかり參らせて、朝夕いとど御懷しさやるかたな

く候。一日の中に二度も三度も、此頃いかに面がはりし給ひつらむ、以前よりの御母樣似にて御はせしか、田舍住居の御心のびらかに、御頬の肉豐かに成らせ給ひしや、然らずば丈高うなり給ふと共に、御撫肩のいよゝ細りて、誰れやらが見立てし枝垂櫻の朝景色おぼゆるやなど、思ひ出でられ申し、數々に戀しう思ひ居られ候。都に御出立遊さるゝ時、如何で一葉はと願ひしものを、今に〳〵と、其のまゝ御惠もなければ、ひがみては故なき御恨みも申され候。時々たまはる御文を、日毎に取り出しては、御言の葉承はる心地に候へど、御面影見ねえば、物足ぬ樣にて、いとゞ雲井の遥かなる思せられ候。御文の言葉の如く、今猶思ひ起せ給ふとならば、何かは御姿を惜ませ給ふべき。御愼深き御心用ひは、さる事なれど、他人ならぬ私に、何故の御隔てぞや。賜はり候とも、此方手箱の中に秘めて、夢々人には見せ候はじ。何卒許し給はれかし。此方の見苦しさをも參らせ候はん。殊にいつくしみ給へとにもあらず、何處に紛れ居らむにも、いささか恨みあるまじく候。早々御返事給はり度、御面影拜まむ日を、いつか〳〵と待ち渡り候。かしこ。

（雨評）整ひ得て難ずべきところなし。

○旅行先より故郷の友へ（繪葉書にて）

遠江　大石よし子

第一信

今宵は靜岡に宿り申して候。

宿は薄紅の花ざかりにて、誠に美くしく候。

清き安倍川の流れは、其の花の隙より白く見え、今、繪の如くに候。淡き吐月の峰は、今、夕靄に包まれて、さながら夢の如くに候。

折り〳〵は飯帆疑乃の聲も聞え申し候。

されど、つれなき妾の一人旅路は、見るもの聞くもの、何となく物淋しき心地せられて、只今は燈火の下にあなた樣の寫眞を眺め居り申候。

旅なれぬ身は、古里のしのばれて、
　夜半の枕につらき夢みる。

第二信

妾は今、朝の富士を眺め居り申し候。こゝは清き流れに足下を刻まるゝ青き堤に候。

淡い朝靄に包まれて、肌寒くまで高く聳え候樣は、筆にも口にもうつくされず候。只今、白千鳥富士を斜めにまひ上り候。

をちこちの里には、雞の聲も聞え、岸には白帆を上ぐる舟歌も聞ゝ申候。

朝の富士、いつまで見てもあちつかず。
安倍川の流れを下る白帆舟、
　かじとる歌の聲淸くして。

今宵は舞坂に宿るべく候。

第三信

磯馴松の間を通りて、今海岸に帆立貝を拾ひ居り申し候。これも舞坂のお土産として、皈郷の後差し上げ申すべく候。

眞帆片帆は今岸を放れて、遠く沖に漂ひ居り申し候。今宵の十時頃までには、名古屋に着すべく候。

（雨評）才氣は見ゆれど、少しく氣取りすぎたる心地するををしむ。

○母を失ひし友の許に

福岡縣　中村清香

御筆の跡もにじみ勝ちなる御しらせの御文あまりの驚きに暫は何事も辨へず、只〻夢心地致し候ひぬ。遂に行く道とは兼て聞き及び候へども、母上様にとは、神ならぬ身の露しらず、一日だにも御枕邊近く御看護申し上げぬ口惜しさ悲しさ、袖のみ潤し申候。いつぞや月朧に花白く、いと面白き夜にて候ひき、母上様には漫ろ歩きかてら私方へ御立ち寄り遊ばされ、〳〵けに庭の眺の麗しき事よ、笛竹の調なさんにはいかばかり」との給ひ、母上様の御笛に我が妻琴合せ参らせしが、之れぞ御名殘の調へとは、いかで。あゝ御笛の音は耳に殘り居り候へども。其の折枝振おかしとめて給はりし櫻は、今猶盛りに咲き居り候。せめて香だに母君の御傍に通ひなばと存じ、一枝差し上げ候まゝ、何卒御供へ下され度候。



都築眞琴君筆

御憂の雲に鎖され給へる父君の御面を見給ひ、幼き御弟妹様に母君は何處にと問ひ尋ねられ給ふ御許様の御胸の中、御察し申上候だに、いとゞ堪へがたく候。さはれ、御許様には、之より後、母君に代りて内助の務を遊ばさるゝ御身、御身損なひ給はぬ様、くれ〴〵も祈り上げ候。實は御伺ひ申し上げ御慰め申すべき筈ながら、涙もろき私故、却りて御悲みを增させ申す樣にてはと、存じ差しひかへ、文して申し上げ候。

（雨評）言ふところは整ひたれど、情のなほ足らぬ心地するををしむ。

○初ひなに友を招く文

山口縣　堀　龍子

すぎつる祝賀會の夜の寒さにこり給ひてか、其の後少しも訪れ給はぬ、いかがはし給ひし。
世はいつ迄も寒くとや候はむ、淋しと宣ひし小柴垣の霰も、早訪れなくて、つくろひもせぬ破れ庭にも昨日今日は桃さへ咲きそろひて候ぞや。「にくき霰よ、武夫の袖」と詠みまし〻君、など霰にはまね給ひつる。
又、例の御良人樣の盆栽の御自慢、梅の遲咲きに、春の來しをも忘れ給ひてか。
朝な夕な花客のゆきかひに、鶯の座もあた〻まりかね候に。
君今宵の月をいかに御覧じまし〻。影は糸の如く少けれど、つきぬく彼の清光。君のみ胸には、早やいかなる詩のきざまれたらんかと、只々うら山しう。
明日は君慕ひまししし三日月。やよひ三日はひな祭なるを。知つて訪れ給はぬは、罪深きぞかし。いて〱、雛の御前に、愛らしき罪人となりて、白酒の責にあひ給はずや。
明日は必ず〱、午后三時迄には、お歌袋の種も御持參ありて。姪も此の頃は障子を力に、立ち上りては座り、座りては立ち上りて、君をば待ちどほしげなる樣に候に、見れども、など、飽かぬ春月夜、長しとかこつも短しと思ふも人の心々に候、君志あらば、例の物にて縮め給ひてよ、然らば華胥の國のみにて、長き恨み申し盡すべく候。
（雨評）まだ練熟せざるふしあり。

○嫁する友のもとに

靜岡　隆子

朝日に匂ふ山櫻笑みそめ候て、何とはなう樂しき此の春、君にはいよいよ橘家にとつがせ給ふよし。あはれ、言の葉のあらん限り御祝ひ申すも、なほ足らぬやう覺え候。ま近くも候ひなば、かけ行き候て、おぐしのお世話、おめしのお世話も致さんものを、かくかけ離れ候ては、それもなりがたく、翼なき身の、今日は一しほうらめしく候よ。
君の御良人は、實業に從事し給ふとか承り候。そは、君がかねてより望み給ひし事に候へば、御兩人手を取り給ひて、愈々益々勉め給ひ、三井岩崎も物かは、外國に名高き、カーネギー、モルガンとやらに肩ならべ給ひて、望みもなく、くすぶり居る此の己が鼻をも、高め給ひてよ。此の文見給ふ折りよ。例のをかしき己を思ひ出でられ給ひ、ほゝゑみ給ひながらも、己が持論の、心の愛をば、夢な忘れ給ひぞ。
青柳の糸の末ながく、御揃ひましまして、榮え給はむ事を、天地の御神々に、まごころこめて祈り奉るにな

む。めでたくかしこ。

（雨評）今少し重々しきふしあらはと存じ候。

○海邊より別れし友の許に

鳥取市　天野清子

宿世なり泣かじと、強ひてゑまれての君が、あゝ、なづかしきみ姿の、やがて霞に消えし時よ。彼の小松に身をよせ、涙の泉も涸れよとこそ、むせびて候ひしか。つらかりし別れや、清子、命の限りは忘れ候まじ。うつら〳〵とけふも、白波くるふ荒磯にくらして、三日月の裏山に懸る頃、ひとり淋しき我が影をふみつゝ、宿に歸り候ひしが、滿ちくる新潮の香は、胸に迫り候故、又彼の巖に身をよせ候。

さても、靜けき夕海のけしきにても候かな。頭もたげておそひ來る浪は、花とくだけ、見渡し遙けき、濱のあなた、すなどれる船か、うすき月の光に見えかくれ候よ。あゝ仰げば、伯耆の方へか、走せゆく雲のむらむら、我が想ひも亦雲の如くに、君があたりにとぶにて候ぞ。

かゝる折、君はいかにしてかおはすらむ。母君や妹の君達と樂しき圓居やし給ふ。さては、例の美しきみ心の流れ出づる歌にやこゝり給へる。よもやこゝに君を忍びて佇む子ありとは、露、しろしめさじな。

ありあふ木ぎれとりて、なつかしき學びやにて共に倶にうたひし須磨の曲を、ましろき砂地に、書きつけながら、そゞろうたひ候に、彼の、君が好み給へるパッととび散る白波の花の所に、至り候ひしに、あらいぶかしや、まことパットとび散る白浪の花は、心なくも曲譜を、かき消しつゝ我を嘲るが如く候。

しばし目をとぢて、想ひを、元暦元年の美しき物語にはせ候ところ、波にゆられ〳〵てこぎゆく船に乘りおくれたるうらわかき上臈も、まぼろしの如。目に見え、どう〳〵と波と松風の奏づる音は、源氏の勢のすはや、近づくかとしも思ひ做され、この淋しき賀露の浦はの、須磨の浦ならぬ恨み、共に語らふ君なきを、いよいよ恨み候ぞや。

あな月は、今し落ちむといたし候。なつかしき海や、岩や、松原に別れをつげて、さらば歸り候はむか。こよひは、燈かきたて、平家をよみ明し候ふべし。さらば……。

（雨評）須磨の曲より、源氏の勢、須磨の浦わ、平家をよむべしなどの趣向は、大に工夫せられたるところに候はんが、少しく拵へものと成り申し候

○磯だより（第一信）

麹町區　重田春子

あゝ、淋しき夕にて候かな。

滿ちし浪は、靜かに岸を洗ひて、松原の影くろう、五

日月の影低う、宵の明星、其もまたゝき著く候。病ありし身の疲れ堪へがたきに、一人欄によりて、只思ひは都にのみ走るを、あはれませ給へな。春も今酣なるに、などかくも寂しきこの里ぞ、この身ぞ。こゝにのみ春は來ぬにや、とうらめしうも思はれて候。おだやかにコバルトをこめし大空、沖よりよせし黑染の夜色、はたすゞろなる濱の風に、幽寂の氣堪へがたき今宵しも、私はヴィオリンに「離れ小島」の一曲を彈きて、……「見渡す限り白浪のこゝは沖なる離れ島……」に至りて、はたと手をやめて、弦を投げ候。さて、止度なき涙の玉の、……あゝ、我ながら何の涙か、え知らず候。只この弱き〳〵病の身をあはれませたまへ。忘れはせらるまじ、そよ、去年の夏、諸芳に二人が名殘りし松の老木、……磯山寺の鐘の音、陰々と今ぞ八時を告げて候。オゝかの松の木によりて、暫し沈默にふけりたり、五日月の影落ちぬ間に疾く、……さらば、その松に至りての默想は、第二信にゆづり申すべく、先は磯だより、一信かくの如くに候。かしこ。

(雨評) 少しく氣取りすぎ、且つ練熟せざるふし多し。

○朝顏に添へて友の許へ

神奈川縣　中村清子

是非に一日はとの仰せに、今朝か明朝かとたゞ心待にまち居り候を、そよとの御音づれもなきは、如何にし給ひけん。園の朝顏既に見比に候。勝れて大なる美しき花咲きたる朝、あゝあゝ今日訪ひ來まさばと、味氣なく思ひしも幾度に候ふらん。父が自慢の狂咲の大輪、他の一鉢は昨日既に綻び初め候へど、こは今朝初めて咲き候。獨眺めはもをしくて、未だお家のが咲き申さざる程を、御目醒の御慰みにもと、かくはとくより御門叩かせ申し候。道の程如何に候やらん。濃き紫は君も好みます所、御心に叶はゞ、且つは御寫生の御料にもとて。

一年に稀なる御休みの事とて、御出で難うおはせんは、さる事ながら、切なる妾が心汲み取り給ひて、一日御車枉げ給はずや。何事も便り無き宅の事とて、珍らしき御もてなしもはべらねど、世を離れたる山里の、風冷たき園の内に、露をふみつゝ綻び出づるけしきを見んも、亦一興と存じ候。願はくは、前日より寫生帖御持參、父が心盡しの程御覧下され度、花も此上なき光榮に候はん。かしこ。

(雨評) これも練熟せざるふしあり。

○そゞろの便

神戸　しほ子

一

兄様、此頃の日和、菫に桃に菜の花に、懷かし優しきみ歌も、多かむと存じ候を。如何でもらさせ給はずや。そはとまれ……兄様、妾はいかにし候べき、昨夜悲しき〳〵夢になかされ申候そは……申し上ぐるも

何とはなしに涙おちこぼれ候よ。

何時か諸共に碓氷の秋を尋ね候時、そが紀念ぞと、色殊に美しきをもち歸り候て、愛讀の書の奥深う秘めおき候ひしは、御存じに候はむ。それを……それを失ひしのにて候。暫時詩を思ひ疲の書齋の窓に倚りて、うとうとと致し候時、金色征矢たばさみたる一寸ばかりの人の恐ろしげなるが、ふと書の中なるかの紅葉をぬきとりし儘かけぬけ候。呀と驚きて、一度は手にその人つかみし樣なれど、其時は何の故ともわかず、汗流れて胸くるしく、涙をそゞろに下り候まゝに、そを拭はんと、ちよと油斷致し候時に、惜や遂に〳〵逃げうせ候とみて、夢はさめ候。まどろみのゆめと、さまで氣にもかけ候はざりしものゝ、其の光景のまざ〳〵と月に映じ候て、餘り怪しかれば、ひそかにかのものありかたしかめ候に、あな！……、美しかりし姿やいづら、影もなくて、細き莖のみ淋しう殘り居候ひし。いかに夢とは申せ、かばかり不思議なる事の、候べきや。其よりは、何となう其の眞なりし樣に思はれて、果敢なく、悲しく、再び碓氷の紅葉手にし候はむも、かの折のは得られまじと存じ候へば、やるせなく候。運命の神のみ前にひれふす空想の子のもだえ、……あはれ、兄樣、いかて慰め給はらずや。

兄樣へ　憂にそみたる妹より

二

此の徒らに煩悶の子に、しばし憂をやらむの歌誦せよとて贈り給はりし紅梅のおし花、よしや百里の道すがら來り候とても、清き香やとはなにおし當て候へば、微かにく香ひ候て、此の花の下に日々御勉强なされ候かと、なつかしう存じ上候。いてや、兄樣の仰せに從ひてと、幾度か首ひねり候へど、歌ならぬ怪しき夢の思ひ出のみ浮び申候。さ候へば、此度の淡紅の花びらこそは、いかてうばゝれまじと、思ひ定め候て、いつか伯母樣より給はりし千代紙に、二重三重、つゝみにつゝみ候て、手文庫の奥にしまひおき候。さはれ、この箱には、小さきかぎなきが、恨みにかゝれば、彼の金色の矢負ひし小さき人にもとられまじと、いさゝか心おちゐ候。兄樣も御安心下され度、御安心下され度候。

いつも〳〵御心切に仰せ下され。しみ〳〵と身にあまる御情、…同胞ならてはと思ひあたり候。返す〳〵も御からだお大事になされ候やう、神かけいのり候。

兄樣へ　今は喜にみちたる妹より

◎雛祭に親しき友へ　佐世保　横山柳子

たゞ何となくたのしき今日に御座候、何はなくとも、お定まりの桃酒に、日頃の交誼を溯增し申し度く、今宵を期してお出で下され度く候。雛さまも行儀たゞしく、整列して、お待ちかれの御樣子に御座候。節子の新蝶々、ほめてお這り下され度く候、かしこ。

◎靜ちやんへの返書　紀州　三輪好子

靜ちやん能く知らして下さいました。嘸ぞ貴孃はおかなしいでしよう。私も悲しいです。靜ちやんからの御通知に接した其時は、夢中で、そこに倒れて泣きました。貴孃のお心もお察し申します。武夫さんが出征なさる丁度十日前の夕方でしたわね、武夫さんと貴孃と私と三人で、あの三笠山の芝生に座して、色々面白い物語りをしましたのは。されど……噫、儚なきは人の世の常です、おあきらめなさい。餘りかなしむは、反て武夫さんの本意でもありますまい。何故なれば、武夫さんは眞の日本の軍人です、忠と義と信とで出來てあつた御躰でした。日頃國家の爲め盡さんなどゝ仰せられて居つたことも、此度は充分お盡しなされたに相違ない。嘸ぞ御本望でしよう。それを私は喜びまする。私共初め生あるものは、一度は晩かれ早かれ必ず死なねばなりません。其死にも名譽の死と犬死とあります。眞に武夫さんのは名譽の死です。古今未曾有の大激戰に參加し、至尊の爲め同胞五千萬の爲め、身を犧牲として戰ひ、遂に異國の曠野に大和櫻となりて散たのです。去れど、其の魂魄は永久に滅することなく、花の都の招魂社内に祭祀せられます。夫れ故、貴孃もお心を强く思し召せ。餘りおなげきになりましては、お躰に障ります。萬一貴孃が御病氣にでもなりましたら、お年よりしお母さんを、どう遊ばします。それこそ武夫さんに對しても、大不孝です。お躰を大切に、能くお母さんに仕へ、充分お家の爲めにお盡しなさい。私も隨分悲しいのです。去れど、今更悔んでも、悲しんでも、致方ありませぬから、日々御回向申し、我が身を謹み、一意忠勇なるの武夫さんの親密なる知人として、武夫さんの名譽を損傷せぬやう心掛くるより外は、ありませぬと思うて居ります。何れ又、近日の内御伺ひ申し、萬々お話しまうし上ます。何卒お母さんへも宜敷申し上げて下さい。先づは取り急ぎ御返事申します。

短篇小説

廣津柳浪選

地

○懺悔

泉州横山の里　天堀美浪子

「いや人の若い時は、種々惡魔に誘惑され易い者で、諸有罪惡は皆不圖した心の迷から起る者です、お前さんも何故夫殺しと云ふ樣な大罪を犯したのか、其事情は知らぬが、もう其罪を懺悔して心に悔改めさへすれば、凡ての罪惡は悉く消滅するのだから、假し其身は此世で牢獄の內で苦んでゐても、未來は樂しい天國に上つて愛深い神樣の膝下に行くことが出來るのです。一旦悔改めた以上は偏に神のお惠を受けて、決して嘆き悲しむ事はないです」

と宛も路頭に迷へる孤兒を導くかの樣、いと親切に言葉優しく諄々と說き聞せてるのは、五十の坂も越したらしく、眞白の髯を生やした監獄の教誨師で、傍に聞て居るのは、痩せこけた顏の色の青ざめ色艶も失せて柿色の囚衣を着けた、二十三四の女囚である。

「どうも有難ふ御座います、私も其お言葉を聞きますれば非常に嬉しくなりまして、恰度闇夜に燈火を見せて貰つた樣に思ひます、……どうか暫く私の身の上をお聞き下さいませ……」と、もう眼には涙である。

「私は木下秋子と申しまして、家には腹違いの姉樣がある限りです、姉は少し弱いですが、私より容貌も美く和歌や生花裁縫なぞも私より餘程お上手で、心だてもなか〳〵優しい方でございました。が私は一時の煩惱の迷から、獨りきりの姉樣を非常に怨みまして、ほんの敵の樣にして居ました、……その事情は、私しの遠緣に松浦と申しまして、父と極懇意な縣廳に務めて居る方がありました、その松浦一郎樣は幼少時から姉樣との許嫁でございました。姉樣は親切で正直な御方だのは私は打て違つて云ふも耻かしい位、荒々しく邪慳に嫉妬心が深ふございまして、十二三の時一郎樣と姉樣との約束を知つてから、二人が交情よくお遊びなさるのが、小供心に羨ましくて堪りませんでした、其の心は段々募つて、どうかして二人の中を裂かせて

自分の思を満足させようと色々の悪事をしました、雖然姉様は變りなく私しを愛して呉れました、其後姉様は十九歳の時私は十七で女學校を卒業しました。一郎様は其の夏いよ〳〵大學を卒業なされば、直ぐに姉様と結婚なさる様に、決まつて居る事を聞きまして、私は忽ち嫉妬の炎で胸が燒れる様な心地がして、二人の間を妨げ様と、一心に少さい胸を痛めましたが、淺果敢な女心から遂に罪もない姉様を呪殺さうと思ひまして……云ふも恐ろしい丑の時參り、……」宛も鋭き刃で其胸を刺されるかのやう、ぶる〳〵と身慄して、確と唇を嚙緊めた、

老牧師は腕を組みながら唯默然！

「人も草木も寢靜まつて森閑とした丑滿時、私はそつと家を出まして氏神様迄十町許りの山道を、恐ろしいとも思ひませず三七日の間通ひました、今から思ひますれば身の毛も慄立つ様ですが、其當時は私の憤つた血、眼は太く光り口も耳の邊まで裂けて、恰度恐ろしい夜叉の様であつたでしやう……」とほつと息を吐いて「其後私の願が叶ひまして靈顯とかゞ現れまして姉様はとう〳〵枕につきました、其の時の私の嬉しさは戰にでも勝た様な心地がしました、が姉様の歎きは甚麼であつたでしやう？姉様は其後永く癒りませんでしたから松浦様から妹の私しをと、云はれましたのを幸に、阿母様に賴で嫁てもらいました、……其時の私の心の邪慳さは鬼か蛇の樣でした、其腐た私の心は肉を挫ぎ骨を抉

お人形　［地賞］　山口縣山口御堀川向　堀龍子



つて尚厭き足らなかつたのでしやう……私は嫁てから一郎樣は何時も御酹ぎ勝でしたが、姉樣は湯治に行かれましてから次第に癒りますに連れて一郎樣は段々御喜びの樣子でございました、それに私しは病て居た肺病は日に重くなりまして、實家へ引取らるゝ樣になりました、そして私は又もや邪慳に嫉怒の心が起りまして、姉樣も憎く〲一郎樣も怨めしくなりまして、一そ死ぬなら一郎樣と二人でと思ひまして一郎樣をば……恐ろしいど毒殺……其後姉樣は氣狂になられましたそうで……さぞ姉樣は私をお怨みなさつたでしやう、私はどゝ極惡非道の大罪人でございます……」

顫へる調子の言葉の末は消へ入るかのやう！熱涙ははら〲と一時に溢れて、其膝に滴るばかり、女囚は胸も裂み腹も寸斷々々に切らるゝ思ひをするのであらう苦しさうに胸を抑へて、とうと大地に泣き伏した。

＊　＊　＊　＊　＊

此の哀れなる罪の子の懺悔を聞き終へて、霑んだ眼でじつと視た白髯の老牧師は、眼を瞬きながら徐ろに聖書を開て、「我が來るは義人を招かん爲めに非ず、罪ある人を招きて悔改めさせんが爲めなり」との基督の教を述べ、如何なる大罪を犯したものも、一度懺悔して悔改むれば、其罪惡は全く消滅して、神樣の救を得る事を、再び慈愛の情を罩めた言葉で說き聞かせた、あゝ之の親切なる老牧師の言葉は彼女に取りては、實に大なる慰みの聲であらう！、迷から迷に闇から闇にと惡魔から誘惑されて彼女は、今や微に希望の光明を認め得て、冬枯れの淋しかつた其心は、忽ち樂しい春に還て、神樣の暖い愛の光がそこに滿ち〲たのである。

彼女は溢るゝ熱涙を拭つて頭を擡げしげ〲と老牧師を見上げた時、青白く瘦こけた其顏には、愉快なる明光の微笑が現れてゐた、彼女が犯した罪に泣くべく眼に一ぱい堪へた涙は、忽ち感謝！喜悅！安心！の涙となつて、たとへ今！「死」の魔の迫る所となつても彼女は泰然として潔く永き眠に就くことを得るであらう

評　短いながら首尾一貫、能く小說の態を成して居る、老牧師も女囚も一個の女性が頭惱中の產物としては才氣、亦容易に得難い、

人

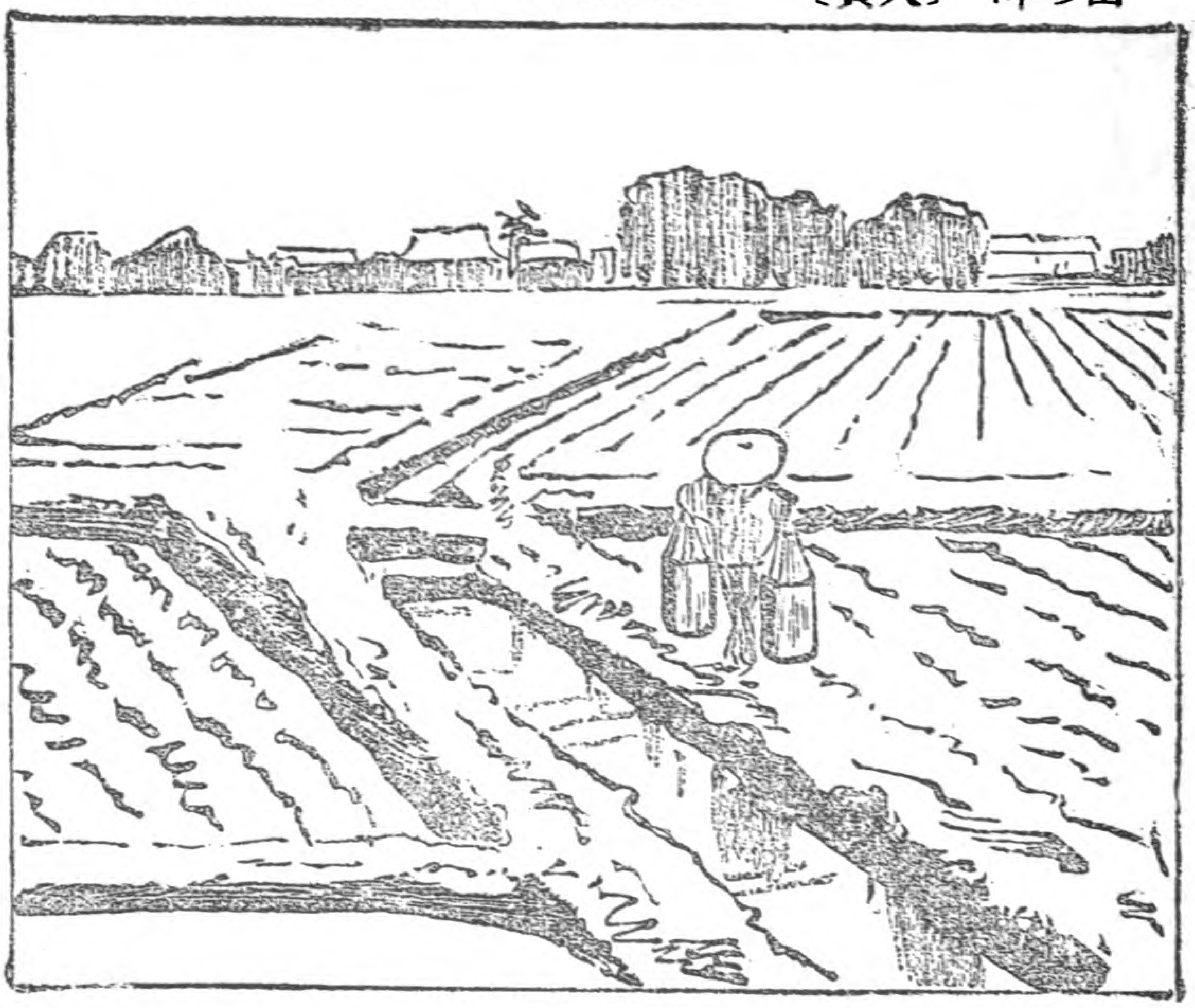
○朧月夜

神田區西小川町二ノ七　大澤隆子

けたゝましく犬の吠える聲。其ははるか向ふの板塀に寄り添へる木立の方で、正しくジョン兄上の愛犬の聲。と私はヴァイオリンの調の手を止め其方指して小走りに進んだ。おぼろ夜の月も霞める櫻花の木蔭に、遠征の兄上を追想しつゝ、其好まれた曲を奏でゝ居たので。

是ぞジョンの不審を抱ける怪物であろ！白雲と斗り匂へる櫻の梢には、一個の黒い影が動いた、と見る間に消えた。さては花盜人？と思つた一刹那、塀外に當り、罵る聲！續いて起つた悲鳴！はて何事？とつかは木戸押開け出て見ると、車夫の辰造が一人の少年を打擲して居るのである。「まあ！どうしたので可愛さうに。其様な手荒い事はお止し」思はず斯う聲をかけると「何を云やあがるんでえ、ベラ棒めえ女のくせに生意氣なッ默りやあがれ」辰造見向もやらず權もほろゝの返答。「辰！何を云ふんです。お止しと云つたらお止しな」此時初めて私を見顧つた辰造女中が來て仲裁したとでも思つたらしい、驚くまい事か。狼狽まい事か私だと知つて「ヤッお孃樣どうも面目次第もごせえません、何卒幾重にもお許し下せえまし」恐る〳〵頭を下げ如何にも恐縮の體、稍あつて「此奴は實に太え餓鬼で御座えます、お庭の花を盜みやあがつたんで：：：」いとゞ口惜し氣にいふ。月光りで能く見ると未だやつと十一か二位、丸顔の何處か愛らしい少年。夜目故しかとは分らぬが、盲縞の着衣は垢染みて居るら

田の畔〔入賞〕　埼玉縣北埼玉郡田ヶ谷村　渡邊きく



しい。「辰此樣な子供が鳥渡いたづらにお花位取つたつて可愛そうな事するもんじやないよ」「へイ其でも昨晩も盗みに參りやしたから餘り癪に障りましたから」と尚いきまく。「汝何處も痛みはしないかえ」「アヽ」少年はうなづいたまゝしく〳〵泣き出す。「お孃樣が優しく有仰やるんで此奴がつけ上りまさあ」辰は少年を憎々し氣に睨みつける。「まあ辰は默つておいで」と制し「お汝の家は何處なの」少年に向つて聞く。「多町五番地」と幽かに答へる。「是から惡戲をしちやあ可けませんよ、もう宜いから早くお歸りなさい、嘸お父樣やお母樣が心配して居るでせうから」「お父樣はねー恰度去年の今頃戰爭に行つたの、其替りにねーお母さんが車を引いて八百屋をして歩いたんだけれど先日赤坊を產んでからまだ寢て居るの、其だから私が學校を退つて花を賣つてやつと食べて居るんだけれど……昨日からお錢を持つて行かないから花屋で呉れないんだもの、惡い事だと思つたけれど此花を盗んだの私はいゝけどお母樣にお飯を食べさせたいと思つて―御免よ姉樣」可憐なる少年の物語り私は、云ひ知らず淚ぐまれた。人事とも思はれず何時か深い思に沈んで居ると、少年はうるんだ眼を上げて「ねえ姉樣！何卒堪忍しておくれよ、私が惡いんだから」只管に賴む。「えゝ其樣な事もう能う御座んすわ、之は餘り少ないけれど……お母樣に何か買つて上げて頂戴」懷中を探り銀貨若干を與へる。「お錢を貰ふと私お母さんに叱れるから」「明日は汝のお家をお訪問してお母樣によくお話しするから叱られはしないよ、持つて入らつしやい」いなむのを漸く取らせた。今迄默つた居た辰造「あゝ小僧乃公が惡かつた、堪辨して呉んねえ」と斗り。さすがにほろりと一雫拳固でなでゝ。

不圖心附けば、ジョンは未だ私の傍に、其茶褐色の大きな耳を垂れ、憂愁を帶びて、蹲まつて居る。

評、少年を必ずしも花賣にする必要はなかつた、只のいたづら小僧でも此小品は全篇の人間が活躍して居たので。

秀逸

○模範家族

小倉　中村麗香

實に其時の私の心鬼といはうか蛇と比へやうか、如何に私が不承知なのを繁が無理に娶つたからとて、繁は私の一人息子、その妻なれば私には娘も同然のお町、

可愛がつてやらねばならぬ筈だのに、其頃は只々お町憎く、二言目には、「乞食にも劣る貧乏人の娘、どうしてこの家を整理して行く事が出來やうか、この家はお前故に汚される、可愛息子の繁には振袖支度のお嫁さんを持たせやうと私は思つていたのに」と明けてもくれてもいひ續け、聞く身になつたらどれ程辛くあつたかそれでもお町はぢいと辛抱して居ました、すると私は是れからは繁に向ひ「お前が撰んだお嫁さんは流石違ふ、夫は大切にするがこの母を何と思つてるか私が何か一言いふと直泣きたがるそしてその泣顏をお前に見せつけるから私がさも無理な事いふやうに思はれ實に合つた話じやない、もう此樣な嫁の世話にはならぬお前がお町を離緣するのが否なら私の方から出て行きませう」と、二人して切にとめるもきかず一月計は親類の家に厄介、いくら迎がきても歸りませんでしたその中ふと風引きが原でどつと床につきました。お町はやつて來て「御病氣におなりなされても猶歸宅なさらぬとは餘り御心强い、御連れ歸り申して御看護申上ねば氣がすまぬ」と私が死んでもかへらぬといふを無理に連れ歸り、それからのお町の心づくし言にもいひ盡せない程、それを邪慳な私はそれ程にも思はず、やれ看護の法が惡い、それ氣がきかぬと惡口雜言ばかり吐いて居りました。

漸次病氣はよくなつて來たが未すつかり癒りきらぬ、ある晩の事、ふと夜中に目が覺めると、井戸で水を汲んではしきりにあびて居る音がするから、窓の戸をあけて外を見ると、丁度師走の霰まぢりの風は肌をきるやうなのに白襦袢一枚になつて水垢離をとつて居る人がある、まあこの樣な夜に御信仰の深い方じや、でも誰の爲にかと、何氣



かきもの ［賞外］ 下谷根岸 太田良子

なく月の光に照らされた顔を見ると、あゝそれは私が常々憎い〳〵と、いぢめまわしたお町であつて、私り病氣を一日も早くよくなるやうにと祈る爲でした。まあ其時の私の驚はどんなでありましたろうか、我しらずぶる〳〵とふるへました。

あゝこの優しい心がけのお町を、何故あんなに憎く思つたろう、我ながら淺ましい。夜もろく〳〵寢まんで看護してくれ、その上にこの寒空に水垢離までとつてつくしてくれるお町の親切。思へば私は其時は今までの罪にこの身が責られ、何とも云へない苦痛を感じ、よし明日は繁とお町の前で之までの罪をこひ、心を改め、二人にやさしくしやうとつく〳〵決心ました

＊　＊　＊　＊　＊

西紫村に於て、むつまじき一家として村の模範とせらるゝ、山田繁が家の女隱居が、秋の夜長に人を集めてのざんげ話、聞く者は、この優しい人にその樣な昔があつたかと只々驚くばかり。

評、結末の一句があつて全篇活動す、此優しい人に其やうな昔があつたかと驚かせるのは如何にもざんげした人らしく、水垢離は少しつくり過ぎた氣味だけれど、兎に角、讀者を感動させるだけの手腕は見えた。

○めでたし

小石川　奈美木ふく子

小石川安藤坂を登り詰めて、傳通院前を左に五六間、夜ながら黒烟濛々と立ち騰る某工場の角を右に折れて左側、幾年月の雨風に曝されて軒傾き柱朽ちて危險げなる門を潜れば、井戸を前にした二階建の家がある、一頻り喧がしかつた井戸端も寂然として、晴れ渡る空には星の光、燦爛と輝いて靜寂なる夜である、只工場の機械の音が夜陰に響く計り。

今此二階の薄暗き燈の下に縞柄も不分明ぬ煎餅蒲團の上、所々腹綿の出た搔卷に包まつて呼吸も苦しげに横鎭男は

「チエ花さん、今謂つた通り僕の病氣は醫師も匙を投げた位で到底恢復ないのだから、這度は歸郷て叔父さんや叔母さんに安心さして下さい‥‥そして好い緣があつたら‥‥」長き話に疲れてか呼吸忙しく、靜かに眼を瞑るのである。

「義兄さん何故其麽情ない事お仰るの、折角上京たものを、御病氣は必然妾が直しますから何卒お側に置いて下さい、お願ひてすから、故郷の方もあゝして來た

春の宵 〔賞外〕

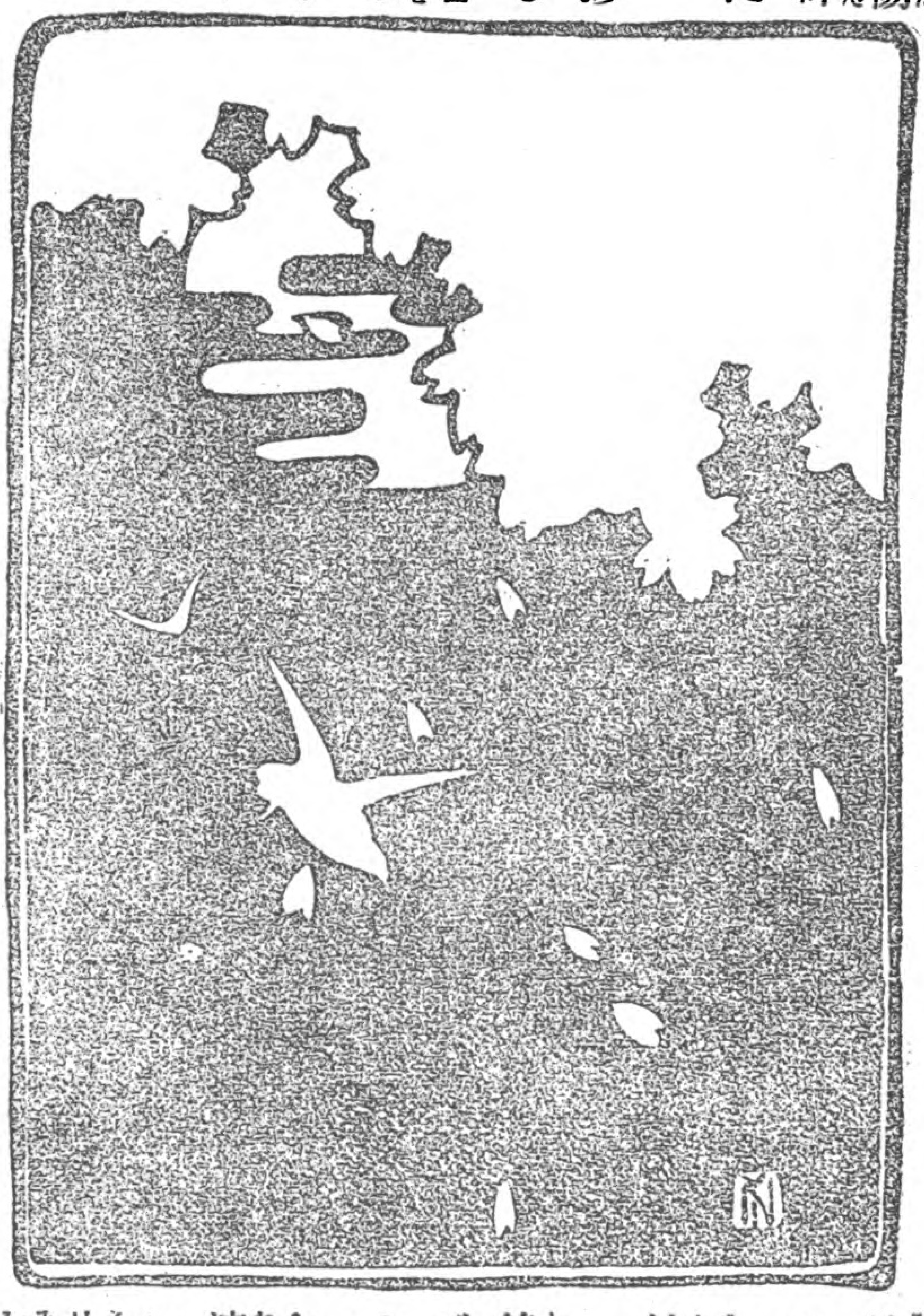
府下南多摩　中島寥葉

ものを、今更歸れやしないわ、」と憫みを乞ふ如く鎭男の寢顏を熟々差覗けばありし昔の俤は更になく、肉瘦せ頰こけて鼻は氣味惡き迄隆く、其同情に富んで暖かき光りを含んだ眼は甚く窪んで潤みを持ち見るから傷はしく、自分の身は粉に碎いても鎭男の病を恢復したいと思つた。

最初は輕き感冒が原因であつたが、北風寒く霜に凍る朝、星を戴いて腰に鈴の音哀れに新聞を配り、自ら求めて學に勵む身の充分の手當をするに餘裕なく不幸にも肺炎と云ふ怖ろしき病に迄陷つたのである。

鎭男は微かに眼を開いて、苦しき呼吸の下から

「花さん、もう僕は悉皆希望を捨てました、殘念だが……今迄の苦勞は皆水の泡……花さん察して下さい!!」



「未だ其麼ことお仰るの、恢復りますよ、確固!!」と氣強くは謂つたものゝ言ひ知らぬ悲しさを覺えた。

「イヤ!」鎭男は何か謂ふとしたが生憎咳がこみあげて沈默つて了つた。

外は凩吹き荒むで暴れ狂ひ一頻り障子に烈しき音を立て、折柄工場の血を絞るような汽笛一聲!

* * * *

鎭男の家は可成の資產家であつたが父の代になつて打續く不仕合せに少なからぬ田畑も終に人手に渡り、母はそれを苦に病むで鎭男が十才の秋遂に此世を去り、續いて父も亡りし後は、尾を振り頭を俯れて媚び諂ひし者の今はふりむきもせざるを、鎭男は痛く憤り、如何にもして家を興さんものと、籬の緋桃咲き亂れて春の野邊漸く色づく頃、笈を負ふて上京たのであるが、鎭男が遠き緣續きの是れも兩親に早

く別れて、非道の叔父に養はれし春岡花には、筒井筒振り分髪の幼き比より鎭男とは兄妹の如く、春は野に出て蝶を追ひ、秋は山に遊び夏は河原に魚を漁り、冬は雪を踏むで共に小學校に登り、眞の兄妹と只ならざる程であつた、漸く年比に成ては一入戀さ增り行き鎭男の上京して後は、片山里に一人淋しく戀人の身の上や如何にも案じ暮して居たが果ては叔父の許可も受けず、十六才の春、花子は鎭男を追ふて：：病の床に呻吟するも露知らず：：遙々上京たのである。

＊　＊　＊　＊　＊

朝陽は未だ上野の杜を離れず、遠く本郷臺の大時計の頭を照らし、二十日過ぎの落方の月は西の端に低く傾き、朝霧立ち込むる不忍池畔を靜かに雪見橋の方へと歩を移す二人がある。

「花さん」と前なる男は回顧て

「落ち付くと直ぐ通知せるから、そうしたら成るべく早く來て下さい」

「エヽ、直ぐ行くわ」と急いて步み倚り近く肩を並べて睦まじげに

「考へて見ると夢のようですね、僕が小石川の二階に燻つて居た時から思ふと」當時の感慨にうたれ甚く沈むのである。

「然し、」と強く謂つて「あれ程重かつた病氣も恢復て斯ふなつたのも偏に花さんのお蔭で、あの時花さんが歸鄕て仕舞つたら迚も這麼ことは夢にも見る事が出來ないと僕は尠なからず感謝しますー」

「何ですね、其麼事お仰て、昔の事なんぞお仰ちや妾可厭！」

「いや實際です、花さんには非常な苦勞をさせました僕が小倉の袴を穿いて區役所の受附に、花さんは海老茶の袴で交換局へ：：アハ：：：：：」

「アラッ、止して下さいよ義兄さん、向ふから人か來るわ、其麼大きな聲して、」

「周章て側を離れ少しく頰を染めて、あらぬ方へと眼を外らすのである。

そよ〳〵と吹く風は心地よく面を撫で緩く柳の糸の搖すつて彼方へと渡つて行く。

拆柄撞き出す大佛橫の鐘は朝霧を破つて池の面を渡り余韻永く水の上に消えて行く、

「アラッ、七時てせう、最う十分しかないわ、急ぎませう」

二人は廣小路の方へ姿を隱した。

一時は迚もと絶望した鎮男は嗳き花子の看護に依て危かりし玉の緒を繼ぎとめ、それからは薄給ながら花子が齎し歸るを幸ひ、過劇な勞働を廢して只管學びの道にいそしみし結果、多年の心勞空しからず目出度く地方官に任命て趣任の途に就たと云ふ事である。

評、所謂光明小說、けれども輕浮の痕がなく、しんみりと書き終つた處、優に一かどの才筆たるを失はぬ。

○猫物語

札幌　乳香女史

《上》

ちよいと見た所が、六十四五にもなるだらうか、丈のすらつとした老婆、腰こそ曲らぬ胡麻鹽頭の後の方へ、見つともない程小さな丸髷をちよこんと結ふて、大袈裟に評するなら夫が振り切れ相に首を振り乍ら。……ポーチ、ポチ〳〵〳〵！…ポーチ、ポチ〳〵〳〵！…と呼んで、裏長屋の狭い路次を西に東に探し歩くのが、少くも日に二三度宛なり。

漁村〔賞外〕　志摩坂手　水田蔦枝子



すると向ふ三軒兩隣りのうちには、『さうら又始まつた』と口眞似をする妻君があれば、夫を合圖に飲みかけた番茶を吹き出して笑ふ娘もある涙と鼻を一緒に垂し乍ら腹を抱えて笑ふ坊つ樣達もあるとの事。

老婆の身に取ては命がけ大切な猫であるから、もし其姿が二三十分も見へないと直にポーチポチ〳〵をやり出すが、不思議なことには其呼聲にまで情が籠つて如何にも熱心らしいポチ殿が聲に應じてどこからか時を移さず走つて來る、こんなことが太平無事の長屋中をいつも感心させるやら、笑はせるやらする。けれども御本人は一向そんな事にはお關ひなして相變らず毎日熱心にポーチポチ

〱を繰返す所から、いつとはなしにポチ婆樣、猫婆樣などの綽名がついて今は橫町第一の名物に數へらるゝ迄とはなりぬ。

思へば思はれるのは敢て人間同士に限つた事ではない、猫婆樣がポチを愛することは孫に對する夫以上で丁度新郎が戀ひ戀ひて娶つた新婦を愛するの情もこれには及ぶまいと思はれる位、されば相手のポチも乳呑子が母の後を追ひ廻し、新婦が新郎を慕ふように老婆の聲に耳を止めて一目散に飛んで來て、さもあまへるようににやアと啼いて、足に搦みつき裾に戯れつくのを抱き上げて、頰ずりし乍ら『此野郞!』と眼を細くする老婆の笑顏を見て笑ふものもありとか。

ポチは去年の夏生れて、未三十日經たか經ぬに親里から捨てられたのを、通り懸つた念佛德が拾ひ取つて、間もなく猫婆樣の手に貰ひ受けられたのだが、夫は尾と胴の長い斑猫で自分らの眼には左程可愛らしいとも思はれない。

『薄くなッたが、もう一杯お飮り』と白湯同樣の茶を注いで出し、小判形に切ッた山吹色の澤庵と、蒲鉾形に切ッた紅色の蕪漬とを、一片宛挾んで……『お隣りの老婆樣は今朝からこれで三遍目ですよ……』と火鉢の正面に坐ッた額前に少し兀のある三十前後の主婦さんが笑ふ。

上り口に控えた砂雨顏の肥ッた妻君が澤庵一片を頰張り乍ら……『お近さんがポチ婆樣て云ふがホンにさうですね、主婦さん杯は壁一重で隨分耳障りでせう』と合槌を入れると、並んでゐた獅子鼻の妻君も口を出して……『お吉さん貴婦だッて猫婆樣て云ふぢやアありませんか、私がポチ婆樣と名けた譯はね、お祭りの日に、小供を捧ぐように猫を捧いで、そらポチ、そらポチッて色ンなものを見せて步くあの婆樣の恰好があんまり可笑かッたから冗談半分に、ポチ婆樣と呼んだら善からうッてッたのさアね……』と窓から射し込む光線を除けるためか、主婦さんの左傍に居去ッて、冷た茶を一口飮む、夫を合圖のように三人一緒に笑ふ聲、一層高かつた。

『何でも朝目が醒ると猫の椀を持ち廻るので、小供より猫を大切にするッて嫁さんは不平だし、障子や唐紙を搔き破ッたり、火鉢に大小便をするッてので、息子さんも嫌うさうだが、何しろ老婆があの通りなので若い者一同は苦い顏をし乍らも默ッてるのださうです』

『嫁さんの不平は尤だね、私を人にしてもさうてさア

孫より畜生の方を可愛がられちやア、腹鹽梅が善アありせんさ……』

『それにね、あの老婆はいつも自分のお茶椀に盛た御飯のお初をば、どこでも關はず猫にやるし、どのお茶椀でゝも水をやるし三度〳〵きッ〳〵と猫丈にはお魚をやるッてんだから、猫も増長して老婆の膝に乗るやら、乳を吸ふよふに咽喉の皺などを吸ふて、ふざけるんださうですよ、だから息子さん迄が人間は五日に一度しかお魚を食ないが、猫は三度〳〵だッて云ふさうですよ、困ッた老婆ですね……』

『そんならポチを二三日隠してやッたら氣が狂ふ位でせうね、……隠してやりたい位だね……』

『なんに見へなくなりやア町内中ポーチポチ〳〵ッて

君逝く〔賞外〕　紀伊湊　鈴木ゆふ子



呼んで歩くでせうさ、私が弄花するより悪いぢやありませんかねお近さん……』

『お吉さんは、あの老婆から弄花の悪口を云はれたもんだから敵打ちかね……はゝゝ……噂をすれば影ッてあれ！』と主婦さんは軒端を通る老婆の後姿を指したので、二人は『ほんにね』

（下）

『私が一時間計り留守にした間に失なッたのだから、何でも猫を邪魔にする人が何所かへ投げたに違ひないんだ、平素ポチの尾を提げたり、耳を釣ッたりして責める者は汝計りだから、多分私を困らせるために汝が川へでも投げたんだらうさ……』と、身をふるはして疊を叩きながら、疳走ッた聲で老婆は息子の前に、愚痴の百萬遍も並べ立る……『老母様つまらん事を云ふ者でありま

せん、何で私がそんな惡戲をしませう』……『いやさうてない、汝一人留守番して居て知らんて法があるかね私に心配させ、苦勞させるのは矢張親不孝だ……』『何を仰しやいます、猫の番を怠ッたから親不孝ッて……私には私の仕事がありますのに……』息子は微笑して毫も取合ぬ。……『何が何でも親の大事がるものを粗末にすりやア親不孝だ、不孝だ……不孝だ……汝は親不孝だ……』といよ〳〵じれて怒鳴る老婆の聲益々烈し。

＊　　＊　　＊　　＊

戸外にたちし一人の妻女は『ホンに罪だッたねお近さん……』と他の一人に耳語いた。

評、たわいもなく話だけに、たわいなく面白い、一つは筆の輕いせいもあらう

○夕陽

筑後　大島菊子

人生の煩悶に勞れた力ない頭を擡げて仰ぎ見るみ空には、金色とに彩られたかすれ雲が低う漂うて朱の色を含んだ夕陽は、眼界遠き西の果てへ沈まうとしてゐる渺茫たる筑紫平野も、東の方は一帶の連山が尾を曳いたやうに……今し消え行く覺束な夕陽の光を浴びて、金紛の彩畫を眼前に展べてゐたが、軈て夕烟に包まれて、刻一刻タイムの過ぎ行く影と共に、美しい色彩は薄れ行く、其模糊たる夢のやうな夕景色に見惚れてゐた、苦しい胸には覺えず妙な感想、初戀の過去の想が春の潮のそれのやうに……

青年男女の多くが一度は必ず引掛る戀の關門、妾も遂に此關門を通りぬける事が出來なかつたのでした、丁度急湍のやうに流れて來る、何とも名のつけやうのない痛みは、聖く美しかつた初戀の疵なので、妾は永遠に此痛みを忘れる事が出來ないのです、それで今では最う何事も自然に任せて、そこに慰藉を得るといふ、所謂煩い人寰をさけて、毎日野の散策を試みるのでありますが、妾が夕陽に對した時の感想は、悽愴といふより外はないので、一種いふべからざる神秘的感念にうたるゝのであります、それと同時に起る聯想は過去の戀なので、思へば妾の戀は實に悲愴慘憺の極でありました、百花の美を慕うて勞れた翅を何處に休めやうかと狂ふ蝴蝶のそれの如く妾が美しい戀に狂ふて戀の暗路に迷ひ初めたが十七の春、軈て來む日は失望落膽の悲境に陷るとも知らで踏み入りし青春の戀、一意縷の如き希望を辿りて、人を戀しました情熱は……

『今では最う社會の制裁に任せた身の、情は理性に勝つ能はず』まあ斯様な意味で取消されてしまひました妾は今後再びあの美しかつた戀を繰返す事は出來ないので、丁度人の癈殘の生涯によく似てゐるのです、しかも孤獨の身は宛然、沙漠であり、暗黒であります、さりとて假令や荒れ果てた沙漠でも、そこには甘き泉が湧くではありませんか、假令や寂寥しい暗黒の境でも、そこには一道の光が、辿り行く先を照すではありませんか、思へば妾の境涯は、これよりも尚暗黒、尚寂寞。あゝこれも皆初戀の疵の傷み故。

人の一生は畢竟奈うなる？神様は人間を奈何に支配するのであらう？これは妾の疑問なので、若し現世に神様があるとしたなら、神様は人間を奈落の悲境に導くのではあるまいかと思ひましては、奈うしても無神論者にならざるを得ないのです。

これも最う過去となりましたが、人を戀ひして人に捨てられた身の、誰が此不幸を慰めてくれやう、死は妾が悲痛を忘るゝ唯一の慰藉であるとして、曾て匕首を喉に擬した時――それよ其まゝ死の靜息の境に入つたなら、此儚い浮世の旅は終つたのでありましたが、折しも耳朶に響く名なし小川の琴瑟の樂の音！あゝ此小川の流れ行く森の彼方には、年頃病に惱める母がゐるではないか、父なく兄弟なく姉妹なき妾を持てる母：：：若し妾が此身此まゝ終つたなら、浮世に殘つた母は奈うしやう!!不孝の罪は何處でわびやうと仰ぎ見る雲の色、夕星のきらめき、其崇高い自然の活動に對した時、妾の妄念は拭うがやうに晴れまして、再び人生の旅に上るといふ氣になりました。

評、無量の感慨、青春の人、多くは之を歌ひ之を悲む、小説と云ふより寧ろ美文であるが、健雅の文章、將來伸びるべく餘裕を存して居る。

○桃の家

紀伊　前田かをる

一寸しぐれて快い春雨も、かばかり長ひかれてはと芽ゆる若葉もかこち顔。露野川も小濁の水量増したが今し晴れて行く川面の、霞漸々脱ぎがてに、岸の青柳糸長う、風に優しく紊れる邊、艶かな桃花の色映えた七八株に埋れて、雅やかな茅葺の一棟は桃の家とて、此邊の大地主が別莊なので、今病を養ふ奥様と小間使とが閉ぢ罩めて寂寥の侘ずまひ。

「奥様一寸開けませうか――」と立つ澄江は廿歳の丸顔、溺れる笑くぼ、髮は花月に、頸あし白う、華麗な手織を着て、銘仙の書生羽織。

フラチルの寢卷して、白毛布を輕う臥つて居る奧樣は粗末櫛卷いた頭を捻つてきれ長い眼を見張つゝ

「はあゝお天氣か知ら？」

「お天氣のやうですよ、長い雨氣もとうど晴れましたお心持も善くお成りでせう」と愛苦しく、しとやかに。

「だつても」眼を濕ませて、窶れた頰を一入青白うして、見るとしも無う眼に映る綠の野面、薄ずむ山端さては露野小川、近く艷麗な庭の桃花、

「雲雀が樂しさうに鳴いて——花も咲たわ！」

と怨むやうに云つてホッと太息。

「奧樣さうおふさぎではお惡うございます今少しお氣を大きくお持ちて無いと

病む身も看護する身も、胸は同じ曇りに、等し涙。彼の瘦せた青白い頰の凄さ！奧樣の身に成つて見れば嘸々〱悲しいであらう、お云ひの通り雲雀が天も地も我物顏に振舞ふて、み空益高かれ、口も裂けよと、空高う聲高うほこつて居る。世に春が來て、桃の色香、若草のみどり、雲雀の愛づ子を中に雌と雄のむつび。

人の世に春が無からうか、然れば奧樣は愛づ子を中に——吁無い。あの旦那樣とて優しい性だのに此頃の所爲のぢれつたさ。奧樣の病氣も之れが原因である。治るだらうか、夫婦の中が睦まじなつてこそ治るであらう。是れを治らせるのが看病人妾が任である。多年旦那の親方初め、皆に恩を受けた妾。

そんなら我が身は？

幼な名染もあらう、何くれと無く言葉やさしく愛でられるうれしさの餘りに、何氣なく笑顏をかへして、何時のいつまでも奧樣や旦那樣に溫和しう仕へもし、愛でられもしようと、其を樂みに、幾多の求婚も辭して居たが、思ひ掛ない寢耳に水の一節は旦那樣の怪しい言葉。(奧樣がしねば善い)とは確に妾を後釜にとの思召。でも奧樣が死んでも矢張、旦那の奧樣。——

思へば思う程、千々に亂れて切無い我が煩。

「澄江、少しお水を——」

「はあ、奧樣、氣分がお惡いですか」

奧樣が切無想に少し水を飮んで、

「澄江、もう妾善うなる見込が無いと思ひますわ。後の事はあなたにお賴みしてよ」

「其麽お氣の弱い事を」

と澄江は涙ぐんで、「あとの事つて奧樣」

「旦那樣とあなたは——」

「あれ奧樣、そんな事！」

なまめかしい春風に事かへて、寒風の二ひら三ひら散る桃の花を吹きまく。

評、餘り書きなれた筆致ではないが、決して書放してはない、會話も作者は充分注意して居るやうだが、未だ熟さぬ節が多い。

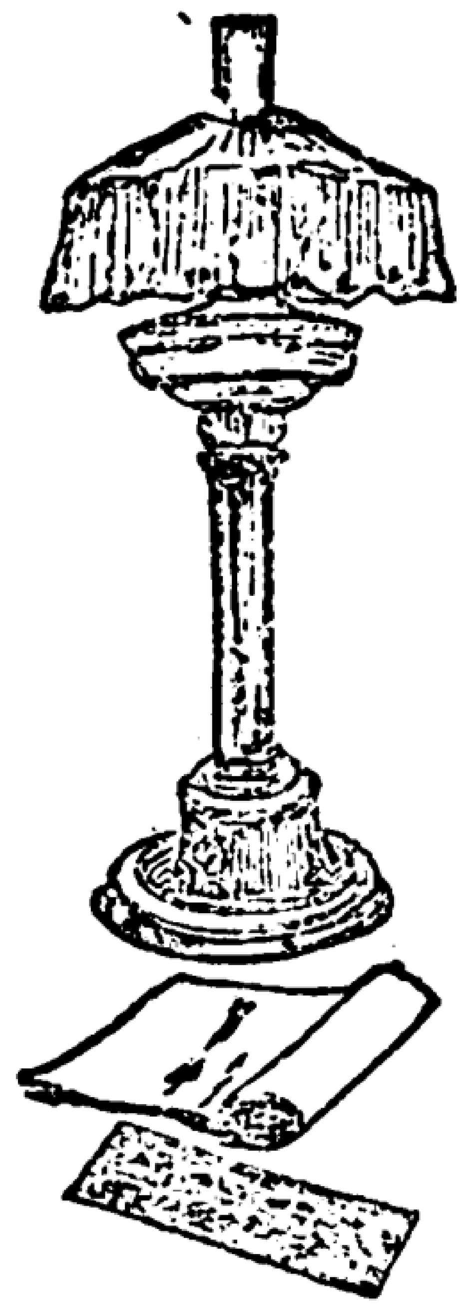
○あゝ母様

宮城　菅原春子

私の大切の〳〵の懐かしい母様は死にました、私の母様はみまかりました、あゝ眠つたやうなあの死顔、いつ私が忘れる事が出來るで御座いませうか、天にも地にも代へ難き大切の〳〵の懐かしい〳〵母様を失つた子供程世に可愛想なものは御座んすまい、まして私の母様は長き臥戸に就いて死なれたのでは御座いません丁度私が十一の年の三月の二十八日でした、人々がよろこんで待つてた御不動様の日でした。朝から空が晴渡つて、實に長閑な春の日で御座いましたから、母様も御一所にと、八ツになる「新チャン」と云ふ弟と急いで學校から返つて、母様に揃へにいたゞいた着物を着て、愈々御祭りへ行く事になりましたが、悲しや、母様が急に御腹が御痛みなさると云ふので、殘念ながら私等ばかり参りましたが、まさかに之が一生の御別れとは、神ならぬ身の露知りませんから、軍歌を唱ひながら勇んで御不動様さして参りました。

午後の三時頃、愈々歸途につきましたが、何處でやら私の名を呼ぶ聲が致しますから、誰かしらと見れば從姉の春子の君と、貞子の君とでした。早く御歸りとの迎へでした、あゝ此迎へ何が爲でしよう、まだ日もくれないのに駈足で家へ歸つて見れば、あなかなしや母様は死にました。三十三才を一期として、私等三人を遺して死にました、噫其間際に御心は何處に馳せたでしよう、定めて言ひ度い事、語りたい事がありましたろう、あゝどうしませう〳〵、夢でしようか、現でしようか、夢ならばとくさめ、現ならばとくかへれと祈りましたが、「咲きにし花は根に戻り、鳥は古巣に歸れ共、歸らぬ君を如時またん」とか。どうして〳〵死んだ母様は歸りませう、あはれ私が此の世を終るまで死んだ母様を、どうして〳〵忘られませうぞや。

評、全體に罪のない筆つき、小說と云ふ程の姿でもないが、此時分から筆を練つて行けば物になる望みがある



はがき文

編輯局選

【天】

○好きな物

大久保村　しげ子

半開の薔薇、採集帖の菫、佛蘭西から御土産の繪葉書、御友達の寫眞、雪の降つた日の大福餅、暑い時の氷、すじのついた御袴、みがきたての靴、鷄の雛子と内の畑の覆盆子。

選んで皆好し、此内の一つでも嫌ひはない

【地】

○麥生の雲雀

越後中蒲原郡新飯田村　小柳滿玖

五月五日に、妾は家の麥畑中を廻つて見ました、すると、雲雀の巣があつて、愛らしい卵が五つ入れてありました、親鳥は食はず、吸まずで、一心に暖めて居ました、何日孵化するでせう。

此通り日記にもお書きでしたらう

【人】

○猫のはだし

上毛　今井八百子

今朝は雨が降るから、しげちやん、一人て、お座敷で遊て居ると、おとなりの、小猫がどろ足のまゝで、しげちやんのそばへ、とんできました。いつも、猫をこわがるしげるさん、おどろいて、あれ〱猫がはだしでお座敷へ上つてよ、母様〱。

一點の邪氣なし

【秀逸】

○花が咲きました

神田　大澤隆子

隆子や今日は如何です、御覽早花が咲きましたよ、と仰有乍ら母上が南向の障子を少し開かれた。成程此處から見る二三本の櫻が咲いて居る。思へば凩寒き夕、ふと病みてより早幾旬、いつ迄御心配を掛る事であろう。

此母にして此子あり

◎隣りの悦び　麹町區　はま子

『お媼さん傷が治りましたとさ、戸山の兄さんが大丈夫になんなすつたとさ、今手紙か着きましたよ』老媼一人、女一人で留守して居つた此の靜かな家に起つた悦びの聲は、お隣の私の家までよく聞ゑました。

よそごとゝは聞かずに

◎春ちゃん　山口朋星子

今年六つの春ちゃんは掛物の中の文の字を見付け出してさも自慢そうに女子文壇の字だと云ひましたこれが幾年の後には此の露のしたゝりそうな瞳に果して何と云ふ字の影を初めて映すでせう?

其名の春と云ふ字

◎覺めたる蝶　越路もくづ

紫匂ふ雲間より日はうら〳〵と登り、花にねむりし胡蝶は小さき羽袖を翻へして、曉の空に舞ひ出でぬ。



あゝ幸ある蝶よ、そも汝は夜もすがら花にいかなる神秘を語りけむ。

人間には洩らすべからず

◎落花　靜岡たか子

何心なく小窓をあけると、まあ美しい事。雲かとみえた櫻は散つて、ちようど雪のよう。とみればおばあさんが張物をして居らつしやる。おせなかは花でいつぱい。おばあさん、お動きなさるなと云はうかしら。

活景、活情、繪畫以上の趣味

◎五月鯉　長崎　粟田壽賀子

今年もまた、幾千の五月鯉、十萬の甍の波を、泳ぎつゝあり。あゝ、五月鯉汝は、年々歳々、幾度かあらはれて、遂に、今や、滿洲の野に、旅順の海に、幾多の、軍神忠士を、つくり出しゝよ。

武士道を論ずる者は五月鯉を忘るべからず

◎花輪　巣鴨　田中舞月子

今し方お友等と遊んでゐた咲ちやんは、いつの間にか

ひとりで、小川の堤に座つて、うれしさうに花輪を作らへて、いちいちキッスして、下の方に流してゐます、あゝこの花輪の行衛は何處なのでせう。

此キッス、純潔、些の穢れを許さず

◎栞　岩代　大中小牧

妾は今北海道の友に送るべく栞をあむで、一針〳〵に友を戀てふ心根をあみ込んでをると姉さん御手紙と妹のさし出す一封の書狀都の友より梅花を封じたうれしい便であつた此梅のかをりも栞の中へ入れたいが。

はいりませうとも

◎稚子の夢　磐北　岡田えい子

日當りの宜い、椽に遊びつかれた、淸ちやんが、乳母のおひざをかりの枕に、何を夢みたのかほゝえんだ。あゝこんな幼子でも何か、思つて居るのかしらん。

言はんとして言ひ得ざるところ

◎藤棚　越後　土田哲子

綠のたる樣な藤棚の下へハンモックを釣て、坊やは其中ににこ〳〵して居たが、いつしか心地よげに寢入てしまつた、何を夢見てか折々は笑顏をもらして居る、無心な天使の樣なほゝを藤の花片が軟になでゝ居る。

藤花の題に更に新しき趣向を加へたり

◎春の小川　愛知　平野樂華子

新芹汀に芽をふくこと繁し、沈みにし木葉も今は流されつゝ春の水いと澄みて、小魚の遊ぶさま長閑なり。堤に笑める蒲公英の花倒に水底に咲き、櫻花一瓣、眠れる胡蝶を乘せ靜かに流れ來る。

初めの二句、着目斬新、俳趣横溢

◎虹　美濃　碓井邦子

五月雨の後なく晴れて、窓射る日の光、濁水漫々たる田圃の端から東の方、白帆の今し一つ二つ見へそめた海の方へ、眼も覺むる許り、燦爛と錦の帶を投げたやうに七色の鮮明な虹の浮橋がかゝつた。

快壯の景、錦の帶は流石に女性の景容

◎薔薇　兵庫　山鐵祉宅

姉樣、一寸來てご覽ん、奇麗に薔薇が咲たからと、弟の呼ぶ聲に、何アにと、返事もそこ〳〵お庭に、行つて見ますと、まア本統に、美事も美事、薄桃色の花に露をふくんで、につこり、まア其姿の、いゝ事。

いやみのなき書きぶり、花薔薇に似たり

◎繪師の妹　牛込　小島登美子

花に三年、顏に五年苦心した私の弟は今日遂に、立派な畫家となりました、私の姉は御存じの如く、詩人であります、けれど私は未だ御飯もたけないとて、母に笑はれます。

◎菫の戀　岩代　服部貞子

けふかあすかのたゆたひを、あゝたんぽゝの君は知らじな。われ菫は[illegible]

らずして人の子に奪はれぬ。邃が森の向ふなる、蕨の詩人よ、いざや土筆の筆取つてそが戀を書きて見れ。

○お月様

小石川　須原秋子

昔母樣のお背で、十三七ッを唄つて、兎のもちをほしがつた、美ちやんは大きくなつたが、お月様はやはり十三七つてある。

○崩れ牡丹

大分　甲斐ふい子

此三月に優等で女學校を卒業なされた姉様は近日靜雄様の所へお嫁にお出ると母様はいはれて居たが、遂に肺炎でなくなられた。妾は悲しくて悲しくて唯夢の様!!。今朝見ればお庭の牡丹も崩れて居る!!!。

○行く春

赤阪　高瀬世思子

紫の薫りゆかしき菫野に節面白く吹き給ひし兄君の笛の音も行く春と共に、大空に消え行くか。

○蕗摘み

紀伊　木村牛女

清い谷川で、赤い裳裾の小女が、美しい清らかな聲て、さとうたを歌ひながら蕗を摘んで居る、その影の、水のまに／＼、チラ／＼するのが、如何にも涼しそうで、私は無音のまゝしばし見ほれてゐた。

○愛弟

芝　額川とき子

七歳になる弟が或時姉樣きて御覧、私昔のお姫様になつたよと、云ふから行つて見れば妾の袴をはき、頭にリボンを付け袴を長う引いて歩いて居た。

○バイヲレット

横濱　N　S　女

文子様去年、貴孃と御一所に、築山の彼方に植へたバイチレット去年に



勝る色に咲きましたよ私どんなに嬉うございませう。

○山吹の實

近江　辰井琴搖

美ちやんが山吹をぼんやり見て居るから、美ちやん奇麗なのね、一本頂戴と言ふと、美ちやんはつんとして、實がなるからあげられ無のよ嘗つて妾が美ちやんの祖父さんに梅の花をねだッて斷わられた時と仝じ口吻に

○高子の夢

秋田　浦井松子

ことし六つの高ちやんは朝起きて不思議そうな顔をして母樣夢ッてほんとに可笑な物ねえ、あの母樣が、人形さんのような赤ちやんをば産みなすつて私嬉しくて／＼たまらなかつたの、そをしたら目がさめて夢なのですもの私くやしくて／＼たまらない夢でないとどんなにいゝでせう。

○お父さんに

備後　伊藤はな子

お父さん。兄さんも妾しもをとなしく勉強してをります。お父さんお丈夫でほんとに嬉しいです。妾しは三年生になりました。お褒美にはブックを貰ひました。

○兄よりの菫

周防　田坂美水

郵便ッと聲がしたので出て見ると軍事郵便で懷しい兄樣よりのであつた、急ぎ開けば、オヤ!! 菫の花が三ッ……戰が休んだのでそこらを逍遥つてたら美代ちやんの好な此菫が……とあゝ兄よりの此の菫。

○日永

上毛　阪本はる子

今日は結構な春日和、野外れの一軒家のお婆さんは緣先に車を持ち出して餘念なくブイ／＼糸を引いてゐる。前は一面菜種の花盛り、雲雀の歌は絕へず雲の上から漏れて來る。



讀友倶樂部

○剽竊詩文の注意（記者書す）

○忌はしき剽竊詩文はなほ減ぜず、本號にも多くの注意があつた、一人々々の注意文を載せると限りある誌友倶樂部の紙面を多く取るから先づ其剽竊詩文と認定せられた文章及び詩歌を左に列載する

文章の部

○第五號消息文中「櫻見に誘ふ」千葉縣すみれ子とあるは卅五年三月十日發兌の「中學世界」第五卷第四號岐阜縣師範學校鳥本柳葉の文と殆んど同一、中間四五行は稍相違してあれど前後は一句も相違なし、

○第五號叙事文「人」賞を得たる舞月女史の「鯨漁」は本年二月十二日發行の「萬朝報」募集新體詩山田碧波の「鯨漁」を文章に綴り直した迄

○第四號論文、小野雪枝子の「鏡面にむかひて」は地賞を得たが本人の作にあらず小林てい子の作である、但し此注意は前號にも見えたが本號〆切前後にも多數の諸孃から注意があつた

新體詩の部

○第五號「地」賞、汀蘭女史の「君を思ひて」は土井晩翠氏著「天地有情」第三十二頁「無題」の詩に一字一句も相違なし、唯、題を改めたゞけ、

○第五號「秀逸」、安藤むき女の「妹のかたみ」は「秀蘭芳菊」中にある横手星舟氏の作を盜んだもの

○第五號「秀逸」、神奈川縣月岡綾子の「臨終の笑」は「女學世界」第一卷第十五號定期增刊「磯千鳥」にある大塚さち子の作を盜みしもの

○第五號、萩原かなえ女の「蝶と菫」は「花にしき」の眞子の作を盜みしもの

○第四號「秀逸」入選、千葉縣梨蹊女史の「深山の溪流」は「中學世界」第三卷第三號に於て「乙」賞を得た雲望生(?)の「水の聲」と同一なり

はがき文の部

○第五號はがき文「天」賞、京都市酢屋橋通西洞院西入寺島方、桂菫風女史の「母樣の涙」と題する一文は明治三十七年二月廿一日發行の「萬朝報」百字文に於て一等を得た下谷、横井若榮氏の作「母の涙」の剽竊なり、右横井氏の文は其後、伊藤銀月氏編の「百字文選」第六十七頁にも載つて居るから參照あれ

○第五號はがき文「地」賞、下總八木第一校榎本しづ子の「秋の針」は、本年一月一日發行の「新文士」第二十三頁にある松本花水君の「秋中の捕物」と題するを剽竊したものである

○第五號はがき文「秀逸」、越後藤枝女史の「夢」は着想も、筆致も平木白星氏選新體詩集「七ツ星」二十五頁酒井八朗君の作を燒直しと云ふよりも寧ろ丸呑みにして只、詩を文にしたゞけ

和歌の部

○第五號和歌「人」賞、越中、島ゆき子の「笛」と題する和歌は「中學世界」第六卷第十二號秋季增刊白雲黄葉百三十七頁 登阪はつ君の作と全く同一、只第二句原作は花の御堂とあつたのを花の御空と變へてあるだけで、剽竊に相違ない。

○第五號和歌欄百一頁初めから五人目、東京武島みれ子と云ふ人のうぶすなの――と云ふ歌は「ハガキ文學」二卷二號埼玉山下芳葉君の作、上の句を少し直して出したのである

右の如く第五號に於ては叙事文の舞月女史、新體詩の汀蘭女史、ハガキ文の桂菫風女史及び榎本しづ子の四名は懸賞無効と確定しましたから無論賞品は送りません、又秀逸以下の剽竊を出した諸孃は投稿の紙上に出た事を以て恥辱の名を得たに過ぎないと思召せ。思想上の事は最も潔白を貴ぶべき筈であるのに他人の作を全然剽竊し、或は剽竊の疑を受くるが如き似而非詩人を投ずる如き心得にては、到底將來發達の望なきのみならず、悔い改めて其人格の修養を心がけないと遂には世間から指彈されるやうになる

次に右、剽竊詩文の出所を詳しく知らせて下された諸孃に記者は厚くおん禮を申します、諸孃が文事に忠實なる新舊の雜誌、新聞其他の文藝に眼を通すこと細密である爲め、偶ま本紙に汚穢の徒、現はれても直ちに本性を看破され、黑白判明、白晝、鞭たるゝも全く諸孃の忠實から出るので、或は親切に忠告し、或は其罪を責め、或は女德の腐敗を憤激し、さまぐ\の書きぶり、こゝに一々掲載するの餘地なきを憾みとする、只諸孃の中の主なる芳名を左に掲げて忠告の勞を謝す

○越後南魚沼郡竹俣村田村いし女○岡山市瀨尾町神山景萍○丹波螢光女○相模濵の子○京都鶴靜子○岩手の一女○南豐の叔子○讃岐娟測繁文○横濵愛讀女○梅野蕭子○埼玉芳葉子○越後凪江女史○長門花影○千葉縣鳥海つる子○伊萬里浦田英子○加藤瀧月○愛讀者○備中小田郡中川村花すみれ○華泉子○備後仙養鶴の目女史○兎の目○ある人○麴町新愛讀者○東京一少女

○諸孃と記者

○記者樣先日の一口噺は如何ですかなるべくなら募集するやうにして下さい、私は、志津敏子樣に大變贊成致して居ります、私もかやうに思つて居りましたから、それから圖畫を投稿致します時、自分の姓名は何處に書くのですか、唯封筒にだけ書けばよろしいのですか、一寸お聞き申します。（長崎磯山春ぶれ）（記者曰、一口噺は猶ほ考へて置きませう、圖畫募集の姓名は封筒にも亦、中へも別に紙片を入れて書いて下さい）○妾は本誌の投稿家の過半が女裝の男子であると云ふのに決して躊躇しませぬ、夫れは種

々の雜誌と對照して見ると直ぐ分りますよ、高橋柳塘の高橋つる子、内藤雪江の内藤雪子、河村龍の河村葦秋子、渡邊翡翠の渡邊まき子、西野春萩の西野春子、小林蟄の小林とき子、木暮刀水の小林とよ、吉原翠國の吉原靜江女史、都筑春波の都筑桔梗女史、大石桃陽の大石よし子、花田翠波の花田翠子、小高清太郎の小高清子、其外調べたら未だ澤山ありましよう、この中でも高橋柳塘は小說家として渡邊翡翠は漢詩家として、河村龍は美文家として木暮刀水は新體詩家として何れも知られて居る斯樣な方迄が我女子文壇の神聖を汚さるゝのは妾は誠に心細う御座ます、又吉原翠國、小高清太郎、花田翠波が女々しく剽窃文を投稿して、あまつさへ其れを壇友に暴露されるなんつて、實に何と云つてよいか妾には分りませぬ、又記者樣は男子の投稿はおかまいないのですか、もし女子文壇の投稿者を女子に限るとの御考へならば速に女裝男子を處分して下さい。（長門雪子）（記者曰、御注意ありがたう、世には斯んな不埓な人もあるでせう、又女裝男子は成るべく採らぬ答ですが幾萬と云ふ多數の投稿ゆゑ、ツイ紛れて入るのです）○私は西國鹿兒島縣の一少女ですが御社發行の女子文壇が明治三十八年の始まると共に産聲を揚げましたと聞きましてうれしさの餘り小々投書致しますから記者先生よろしく御賴みますよ又一寸御伺ひ上ますが俳句は端書でなくて半紙ではいけませんか（大隅糸子）（記者曰、成るべく端書に願ひます）○記者樣に御尋ね申上ます二三度俳句を投書いたしましたが一も御揭載ありませんが文のよからざる故ですか、又規定に違ふて居るのですか參考の爲め御報知下さい（投稿者）（記者曰、投稿は規則通りにさへなされば別にはねるわけはありません、恐らく選に入らなかつたのでせう、御勉强なさい）○記者樣私はいつてもそうですけれどわけて此の四號の女子文壇をばどんなに待つたでせう座して衣縫ふ折にも立つて水汲む折にも心はいつも女子文壇の上に走つて居ましたそんなに待つた女子文壇が來た時に見てからなんとなく物足らぬ心地がしましたなぜでせう記者樣察し下てさい（駿河紫桂）（記者曰、多分投書が出なかつたから左樣に物足らぬお心地がしたのでせう、お出しなさい、其内に屹度紙上へ出ます、物足る時節が參りますから）○記者樣私は女子文壇の愛讀者ですが何んでも投稿するのには直接文壇社から買求しなければなりますまいか一寸御敎示を煩はします（みどり女史）（記者曰、直接の購讀者ならずして取次から購讀の方でも無論投稿は差支ありません）○誌友倶樂部受持ちの記者樣の御芳名と御住所とを知らして下さい（府下、小島登美子）（記者曰、御用事があるなら本社内誌友倶樂部宛でお手紙を下さい、お返事も差支ませうし、都合でお目にかゝつてもよろしい）○記者樣御願申ます私は外の願ではありませんが本誌に餘白あれば『漢詩欄』を何卒設けられ無賞にて募集せられては如何ですが。次號にて御答へ下さい（尾張愛讀生）（記者曰、漢詩欄は當分設けません）○私は只今高等女學校の三年ですがこゝを卒業して東京の專門でない學校に行きたいのですが此頃は風紀がみだれてゐるから行くなといはれますがぜし行きたいですがどの學校がよいですか御知らせ下さいもし普通のでなくば英語の方でもよろしい私立でも何でもよろしい神聖な敎育を受けられるところを（かをる女）（記者曰、女子の英語を學ぶ學校では女子英學塾が最もよろしい、英語以外ならば、あなたの目的をはッきり仰らないと答も出來ません）○記者樣妾地方から雜誌を取り寄せたいのですが御社に寄贈になつた雜誌の評及び其の内部の模樣など御知らせ下さい（麹町、小島仁子）○記者樣、三宅先生の美くしい繪葉書を、卷頭にはさんで下さい、御願ひ申します、この事には妾の御友達の登美子さんも濱ちやんも花ちやんも芳つちやんも里子さんも皆大贊成なのです（總代、小島仁子）（記者曰、雜誌の紹介、成るべく致しませう、繪ハがキも追て附ける事にいたしたいと思つて居ります）

○諸嬢の交際

○私は美津多湍と申者で文壇愛讀者の一人となりました皆さんどをか御交際を願ひます私の地方はたいそを養蠶の盛んな所で私の内の蠶も例年よりはよい虫ですから愛讀者の皆さん見にきて下さいな（上毛、美津多湍女）○群馬縣の今井八百子樣、房子樣、及伏島直子樣其の他の群馬縣人の諸姉樣、詳しく住所をお知らせ下さい、私もなつかしの故鄕は群馬縣ですけれども今は神戶市兵庫に住むで居るので、遠方ではございますが同感のよしみを以て、御交際下さいまし、（神戶市兵庫にてよなえ）○記者さん私は「女子文壇」程理想に合てゐる雜誌は今迄讀んだ事がありません實に感謝します然し入賞した文に剽窃の多いのは實になさけないわけてれ、女として剽窃なんかと云ふ大膽なまねがよく出來まずれ少し良心におちなさいよ（すみれ子投）○群馬の今井八百子樣ありがたう私も御高名はいつも同誌上で伺つて居りましたがつひ折がありませんで失禮致しました、私は片田舍の不束者て何も存じませんが以後はよろしく御願ひ申ます（上毛南雄子）○記者をはじめ賢き諸姉よ妾は本月より愛讀致しましたから誌上にて御見捨なく御交際を願ひます（京都宇治郡醍醐　櫻井龜尾）○私事先頃まで岩代の方に居りましたが都合で當地へ參る事になりました、諸姉樣末ながく御交際を願ひます不束なものですけれど。（攝津國西ノ宮町ノ内濱ノ町門多さなへ）○記者樣並びに皆樣私は月末になりますと「女子文壇」が來るのをまつて居りますわ記者樣寫眞をたくさん出して下さいな御願ひですから（越後片田舍女）○札幌北星女學校の白鳥柳子樣貴孃も此の文壇を愛讀して居るのですか私も愛讀して居ります私は貴孃か御校へ御入學遊はしたと曰ふ事は聞て居ましたけれど此の誌上で御目にかゝろとは思ひませんでした是からは末永く御交際を願ます又繪端書も交換致し度御座いますから何卒御住所を御知らせ下さいなつかしき御柳さん（函館區富岡町五、廣谷あい子）○本鄕なほえ樣先日はいと美麗なる編物御惠送くださいましてまことに有難う、一寸本紙を以てお禮申します、（二葉）○皆樣妾も本誌一號より愛讀者になりましたから以後よろしく御交際下さいな（岩代國郡山中町六永戶はつ子）○記者樣、私は初號より「女子文壇」愛讀者の一人で御座いますが、手前にか

まけ此欄で御目にかゝるのは皆樣一同初めてゞす、何卒記者樣もちろん皆樣の君よ、以後は拙なき妾を、お見知り置き遊ばして、親しく御交通御交際給はらん事を、末ながらます〱「女子文壇」の榮へん事を希望して止まざる次第であり升(下總結城町伊佐岡澄子)○「女子文壇」愛讀諸姉の君に申し上げます妾の如き物に編物御のぞみの爲め御手紙下され感謝致します一々御返事差上げるはずですが七十人も御座ますから紙上で御禮申し上げます尚十人限りと致して詮きましたがあまり多く御のぞみの方がありましたから十五人となしまして二十五人に差し上げました御名は次號で申し上げます(北海道早來市街地本郷なほえ子)○愛讀の諸姉樣私は實に不幸もので父は三才の時死にまして阿母さんの手に育ちました本を見たくも見る事が出來ませんで居るうち三十八年一月一日といふ喜ばしい時に「女子文壇」なる目出度い本是非見たいと思つて取次を賴みて見て居ります前金でなければ私のかせへだ錢でいづれまた皆樣に伺ひます(嚴手縣江刺郡米里村菊池梅子)

◎繪葉書交換

○妾眞誠なるお方と交換したいのです薄學な妾でもお見捨なく又繪端書交換をお望のお方はありませんか(京都府相樂郡祝園村松田ゆき子)○神樂なる姉君等よ妾は親しく御交際を乞ふと共に益々諸姉の御奮發あらせられ拙き賤が女をも御導き下され度う願上ます就ては此際因で端書の交換致したいのですされば諸姉方の自筆叉は彩色版の者にても御送り下さい必ず同等以上の者か自筆にて御返します(大分縣大分町荷揚町五拾番地佐野玉江子)○本誌の交際欄で「繪葉會交換望む」何ど澤山見ますか皆僞りですよ氣をお付なさい妾三回も係りました一度の返事も無いのです(松田香花)○榎本すみれさん前號で繪葉書交換の由申されたが私早速送りましたどうです屆きましたか否……(二葉子)○どうぞ編物送つてくださいな、心ばかりの御禮を致します、ですが餘り亂暴なのは困ります、御受け致しません、なるべくはレース糸のを、私はそれを慰問袋に入れて、戰地へ送ります(麹町區隼町三〇、小島濵子)○御肉筆の繪葉書のよひのを送つて下さる御方には、東京製の美くしひのを返事いたします、妾のアルバム、拙宅へ御出になる方には見せます。(麹町區隼町三〇、小島濵子)○敬愛なる我が文壇の諸孃諸君、妾は軍國の紀念として皆樣と繪葉書の交換が致したう御座いまする故何卒一枚づゝ御送附下さい妾も御返事を致します。(三河國碧海郡大濵町桔梗、都筑靜子)○敬愛なる誌友諸姉、繪はがき交換致したうありますから、どうか御自筆で御送り下さいな、妾も拙いのですが御返し致しますから。(都筑郡新田村新羽上臺小野雪枝子)

◎文藝と學校

○私は神戸女學院に通つて居りまして、常に神樣の大なる御惠みをいただいて居ります、學院は諏訪の麓の最も高燥なる處にあります、皆樣これから學院は大學組織になります、これまで高等科が三年普通科が五年其他音樂專科がありまして高等小學全科卒業生を普通科壹年生に入學をゆるして居りました、以後は普通科を高等科に高等科を大學にすると云ふ事で現在生徒數は二百三拾餘名、教師二十五名御座います(神戸喜久子)○諸姉の中にて二月一日發行の中學文壇及少女界及び本誌四號御所持の方がございましたら下名へ御惠み下さいまし相當の返禮は致します(埼玉縣所澤町山下芳葉)○地方發行の文藝雜誌を御持ちの方は妾と交換しては下さいませんか(埼玉縣入間郡所澤山下里子)○私は永井荷風著の小説「地獄の花」を持ッて居りますが御入用の方に差上げたいのです御望みなれば郵便料十錢を封入して御送り下さいすぐに小包にして送ります、また私は是を御縁に交際をして頂きたいのです(栃木縣芳賀郡眞岡町淺野しげる)○新詩の一句と云ふのは七五ですか數へて下さい(東京一少女)(記者曰、左樣七五もあり五七もあり七六もあり七七もあります、要するは皆一句です、句が四つ或は五つ六つ等あつて一節とも云ひ一聯とも云ふのです)

《五月十六日稿》

新刊紹介

▲月刊スケッチ(第一、二號)　繪畫と文學との調和を計らんが爲に出づ、文及び詩は青年作家の手に成る者多く、畫は三宅岡田、長原、藤島、其他白馬會諸氏のスケッチを載す、横本形、體裁瀟洒たり(定價二十錢本郷元町一ノ十六スケッチ會)

▲はかき新誌(一、二、三號)、繪はかき發刊を以て名ある便利堂より出づ、記事豐富、插畫多くして美くしき雜誌なり(定價十錢本郷妻戀坂上便利堂)

▲五月鯉(第一號)　阪井久良岐を大將としたる川柳界の機關雜誌なり、川柳流行の今日、現はれるべき筈の雜誌なり(定價十錢麹町富士見町久良岐社)

▲向上主義「露西亞號」　向上主義とは雜誌の名に妙なれど內容は存外富贍にして、書生向に適切なる記事多く、又女子に關する論議も盛んなり、新聞躰にして讀みてだへあり(定價五錢本郷丸山福山町六久友社)

▲秀才文壇(第十、十一號)　小石川指ヶ谷町　文光堂

▲繪はがき倶樂部(第五回)　横濱松枝町　同倶樂部

▲ニヒシホ(刷新號)　麻布笄町　にひしほ社

▲文藝(第三號)　麻布本村町　大俗社

▲精神(三、四號)　麹町一番町　精神學會

▲まさご(二號)　京橋新肴町十四　眞砂會

▲シヨコウ(二號)　伊勢松阪町　白羽會

▲紫虹(二號)　美作弓削　硯友會

其他新刊圖書〆切後に到着の分は次號に紹介すべし

編輯だより

○躰裁の刷新。　本誌の發行高は急轉直下の勢を以て月々幾千部宛增刷しても、發行日の四五日後には一部も殘らず賣切となつて、注文に應じ兼るやうな次第で、それ偏に讀者諸君の愛顧に依ること、感謝の餘り、聊か其厚意に酬ふる爲め、本誌は本號より更に躰裁を刷新した、表紙は佛國より此程歸朝の中村不折先生が特に本紙の爲に彩筆を揮はれたもの、又口繪は從來から好評嘖々たる三宅先生の水彩畵色刷の外、別に美術的家庭向の極彩色の繪畵を附し更に嶄新なる寫眞版を數葉增加した、本誌の定價と比較して如何に本誌が利益を顧みることに薄くして、ひたすら刷新に努めつゝあるかを、判斷したまへ。

○内容の一振。　躰裁は躰裁として刷新を加ふると共に、内容實質も愈よ出でゝ、材料を精撰し、編輯に親切に、趣味あり實益ある記事を充たすことは勿論で、本號に於て、諸先生の記事、完結したものもあるから、次號からは更に新しい記事を增加する。今既に分つて居るものは、岡田正美先生の「作家の階級」、鹽井先生の「選評餘談」、中内先生の「伊勢物語」等で是等は必ず次號に出ます。

○懸賞發送。　第三號分懸賞當選者へは前月懸賞發送濟みとなりました、併し當選者で住所本名の分らない方へは送る事が出來ませんから見合せてあります。乃ち第二號懸賞入選者常淸はな子、渡過まさ子、いませきの三孃及び第三號の綾子、房江女、靜花、みれ子の四孃は住所本名を通知あれ、賞品を送ります。

○爾後の當撰者。　これから後ち懸賞當撰者は第何號何々に懸賞當撰した旨を本社懸賞發送掛宛に申込あるべし、其時に住所本名を詳しく明記あれ。さうでないと懸賞發送が後れるかも知れません、當撰者は必ず申込あれ。

○投稿の文字。　凡ての投稿、誌友倶樂部の原稿等は必ず字跡明瞭に、楷書で認めて下さい、亂雜に書き放したものや、小さな字でハガキに何百字となく詰め込んだものや、鉛筆で書いたものや、色インキで書いたものや、ハガキを黑く塗て書いたものなどは、編輯上煩はしくて困るから、文章の上手下手に拘はらず、凡て沒書とします。

▲卒業式の寫眞。　本號口繪には都下有名の女學校卒業式の寫眞を挿入しましたが、各女學校は本誌に同情して最も早く本社に貸與されたから多數の卒業式寫眞は本社の寫眞部に集つて居る、本號に洩れた分は更に次號の口繪として挿入します。

▲次號の彩色畵。　次號の彩色畵は同じく山中古洞先生の「朝の散歩」と題する夏らしい美しい繪を挿入し其次の號には河合英忠氏の密畵を掲げますから榮覽を乞ふ。

▲女流小影。　擔當記者、不快につき本號は休みました、次號には必ず載せますけれども一寸お斷り。

○募集繪畵のます〳〵其數を增すは喜ぶべしてすが、不本意ながら天位を見出す事は撰者の殆ど苦しむ所であつて、規定の勵行の如きやゝ忍びない所があるので、第一回の例を用て爰に又地賓人、人貳人を發表しました。そふして賞外佳作として挿入しました四圖の外に内藤雪子（新潟）。常深花子（兵庫）。藤井康子（山口）。平野樂華（愛知）。潁川とき子（東京）。三村春溪（廣島）。恩田苑子（長野）。古賀つれ子（福岡）。諸姉の如き兎に角今度の撰手たる丈けの價ひを發揮したものと認め得ましたが、如何せん前述の如くて俊秀なるものを得るには繪畵敎育？いくらか文字の力と併行しがたい所もあろふと信じるので、折角なる社主が懸けたる賞品を徒らにすまじとて此に兩度迄規則の增賞をしたのです、けれども諸姉が奮勵を待て快く天位を迎へんが爲には寧ろ規定の勵行！、或はそれが面白かろふと思ふのです。撰者は爰に撰出難を訴へて諸姉の奮勵を仰ぐのであります。（古洞生）

毎號懸賞募集課目

選評大家　文學士日本女子大學教授、鹽谷小波君、佐々木信綱君
　　　　　文學士尾上女子高等師範校教授、藤澤柳浪君、山中古洞君

◎論　文　◎抒情文　◎叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）
◎消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　◎ハガキ文（端書かな付廿四字四行）
◎短篇小説（半紙總かな付廿四字六十行内）　◎新躰詩（半紙一枚十句以内）
◎短　歌（半紙二ツ切一枚一首）　◎圖　畫（二寸の三寸判風俗景色）
◎新派俳句（はがき判紙一枚一句）
但着色無用可成鳫皮紙を用ゆ
△各欄とも一人佳作一章宛投稿の事
△此外家庭教育に關する事項並に讀者の通信等何でも寄稿あれ

賞品規定

◎論文◎抒情文◎叙事文◎消息文◎小説◎圖畫、當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし
△天賞　金壹圓五拾錢　△地賞　金壹圓　△人賞　金五拾錢
◎新體詩◎ハガキ文◎短歌◎俳句、當選者へ贈與品左の如し
△天賞本誌三ケ月分△地賞同二ケ月分△人賞同一ケ月分
毎回の本誌により當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ◎賞品は發表二ケ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽賞状を添へ贈呈すべし◎當選者は速に寫眞送られたし
〔投稿〆切＝毎月十五日〕

△嚴守すべき投書規定　必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に傚ひ住所姓名を明記し、替體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必別に認むべし○封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纒郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり
△寫眞歡迎＝各地女學校舍及校長教頭を始め卒業生又は教育上參考となる寫眞寄贈あれ寫眞版に印刷して紹介すべし
△其他の事項は毎號の「編輯だより」欄に就て知らるべし

定價

女子文壇（毎號三宅氏水彩畫寫眞口繪數葉挿入）毎月一日發行

一册（大判百二十頁）前金拾錢	定價郵税共一册金拾壹錢	外國行
六　册　前金五拾七錢	定價郵税共六册金六拾三錢	郵税共
十二册　前金壹圓八錢	定價郵税共十二册金壹圓廿錢	拾四錢

愛讀者の再讀を乞ふ

○（愛讀は男女を問はず）○本誌は前金の外送本不致候○御申込の前金相切れ候節は無斷送本停止仕候○代金過不足のなき樣注意被下度候○領收書は一切差出さず着本にて領收と見做被下度候○御注文毎に何號より何册及御住所氏名等は明瞭に御認め可被下候○御郵劵代用は必ず定價の壹割増（可成壹錢劵）に願上候○御照會は一切受取不申發信の際御注意可被下候○御問合は返信料添ひ願上候△御申越の號數賣切の時は近刊の分を送本仕候

廣告料

改正金料

種別	普通	特別（表紙四面口繪對面）
一頁（二十四字六十四行）	金拾五圓	金貳拾圓
半頁（二十四字三十二行）	金八圓	半頁以下は御斷申上候
一行（五號字二十四字）	金參拾錢	○

〆切發行前十五日

△廣告特約取扱

神田區千代田町二番地　博報堂
神田區花房町九番地　富士原秀穂
京橋區南佐柄木町二番地　日本廣告株式會社

明治三十八年五月廿九日印刷
明治三十八年六月一日發行

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍

[illegible]

發行所　東京京橋區大鋸町十一番地　電話本局六〇七番　女子文壇社

直接特約大賣捌所

東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿六　東海堂
東京市京橋區鎗屋町十三番地　北隆館合資會社
東京市神田區表神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　良明堂

what a feast we shall have." We all went vigorously to work gathering when a man appeared and said, "You must not take these, they belong to me. These are my clam beds." We left and went to another place, when the same thing happened. This happened again and again until we were driven a long distance from the shore, to a place where some women were gathering.
We soon filled our towels, which we used to put them in (as we forgot to take baskets). Then we came back to the shore and built a fire and cooked our clams. They were pretty sandy, for they were not a very good kind, but we did not mind that much, and all together had a very good time. We did not get home until nearly dark and were very tired, but all united in saying it was a day full of pleasure.

Lovingly yours,
Mary.

はれ追はれて終には岸より遥隔りたる處にて女共の拾ひ集め居り候場所まで參り候。私共の手拭は間も無く一杯に成り（籃を忘れし爲に）候まゝ岸に歸りて早速に蛤を料理致し候。實は蛤ならざる貝の多かりしため中々砂つぽく有之候へ共，去る如き事は格別氣に留め不申候て至極面白く感じ候。
歸宅致し候頃は既に日暮にて隨分草臥居り候へ共異口同音に今日は愉快なる事の有しと申つゝ休み申候。

あなたの愛し下さる
まり子

"The best things are nearest; breath in your nostrils. light in your eyes, flowers at your feet. Then do not grasp at the stars, but do life's plain, common work as it comes, certain that daily bread is the sweetest thing in life."

最上の物は眼下にあり．汝の鼻よりの呼吸，汝の目の光澤，汝の足下の花，皆然り．左れば空想を捨て日々襲來する平易なる業務を果すべし．日常のパンは無味に似れども一生中最上の美味品なり．

And said: 'Forget-me-not.'"

Telling about Our Picnic to Inage

Hattori Zaka, Jo Gakko,
May, 20 1905.

My dear Friend :—

I am sorry you could not have joined us in our picnic last Friday. Our whole school went. We started at seven o'clock arriving at Riyogoku Station in about a half hour. The train being on time we got on at once, and went out into the country about fifteen miles. The day was perfect and getting out at Inage Station, the green fields in all their Spring freshness looked very beautiful indeed, and the half mile walk to the seashore through the fields and pine woods was most enjoyable.

When we reached the beach we took off our shoes at once and as the tide was low we waded in. I put my hand down in the sand and discovered many clams, and forgetting myself I cried out to the girls :—"Ah!

「我をな忘れ草」とぞ宣まへり。

稲毛への遠足を報ずる文

服部坂女學校
五月廿日

親しき友よ,

去る金曜の遠足會に御連なり無かりしは誠に殘念に存候。全校一同にて參り候事とて朝の七時頃に出門し半時間後には兩國の停車塲に居り候。幸にも發車に遲刻なかりしが爲に直ちに乘車致し十五哩の田舍道を通走致し候。こよなき好天氣に候しかば,稲毛にて下車致し候時は青き田畑の春々しき姿は今一層に麗しく存じ候.

別して半哩の田圃途或は松林を緩步いたし候は此上なく愉快に有之候濱邊に達し候や直ちに下駄を捨て干潮を幸ひ一同は踏込み申候手..を沙中に下せば忽ちに夥しく蛤を摑み候故に私事我を忘れて生徒諸姉に「澤山御馳走が出來ますよ」と歡呼致し熱心に拾ひ居り候處或る男の來りて「取つてはいけん。此處はわしの塲所だ」と申し候故他に移り候に又同じ事にて,斯く度々追

not' in English," said little Yukiko gazing fondly on a tiny bunch of the very flowers in her hand.

"Didn't you know it?" asked her school-mate in a surprised manner.

"I wish I did. Do please tell me if you know about it."

"Why, yes. I have just learned a sweet little verse about it. Let me see if I remember it." She turned her head a little and after a few minutes of silence, she recited clearly and sweetly:—

"When to the flowers so beautiful
The Father gave a name,
Back came a little blue-eyed one
(All timidly it came);
And standing at its Father's feet
And gazing in His face,
It said, in low and trembling tones:
'Dear God, the name Thou gavest me,
Alas! I have forgot.'
Kindly the Father looked Him down

よう,」と小女雪子は手にある瑠璃の小さい花束を見詰めながら申しました。

「まだそれを御存知ないのですか」と大そう驚いた容子で學校友達の一人が問ひました。

「知つて居るとよいのですが。御存知なら教へて下さい，どうぞ。」

「エーエー，鳥渡其花に付ての短い可愛らしい句を習ひましたが，覺えて居りますかしら。」少しく頭を傾むけて暫く默思の後に好音明朗に吟誦したのは：—

いと麗はしき花々に
名をば天父は給ひにき。
空いろつけし一小花
氣恥かしげに立歸り
天父の足邊にたゝづみて，
彼の顔をば見上げつゝ
わなゝく聲にていと低く，
「愛する神よ，大君の
與へ給へる我名をば
我は忘れき嗚呼神よ！」
天父は哀に思召し

英文

津田梅子閲　河井道子述

June.

"Now is the high-tide of the year,
And whatever of life hat hebbed away
Comes flooding back with a ripply cheer,
Into every bare inlet and creek and bay;
No matter how barren the past may have been,
'Tis enough for us now that the leaves are green;
We may shut our eyes but we cannot help knowing
That skies are clear and grass is growing."

六月

今こそ歳の上潮時,
干潮に引かれ逝きしもの
喜々たる波と又寄せて
入江や瀬戸を滿すなり.
既往の枯落何かあらん
木々は綠に今しあれば:
知らでやあるべき目を閉づも
草木茂り空澄むを。

Forget-Me-Not.

"I wonder why the Japanese 'Ruri so' is called 'Forget-me-

我をな忘れ草

「何故日本の瑠璃草を英語では'我をな妄れ草'と云ふのでし

▲社告

女子文壇第四、五號とも發行旬日を出でず悉く賣盡したれば申込者へは第六號より代送す

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

最廉無比　定價金拾錢　郵税壹錢

（東京秀英舍印行）